

梶山女学園大学・大学院 F D 委員会活動報告書
(平成27年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

Faculty Development

第3号 (通巻 第16号)

平成 27 年度

梶山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第 3 号（通巻第 16 号）

相山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書（平成 27 年度）

目 次

はじめに 全学 FD 委員会委員長・大学院 FD 委員会委員長 戸部 栄一

I 大学 FD 委員会の活動

1 全学 FD 委員会の活動記録（平成 27 年度）	3
2 平成 27 年度 全学 FD 活動報告	5
3 平成 27 年度 学部 FD 活動報告	13
・生活科学部 FD 活動報告	13
・国際コミュニケーション学部 FD 活動報告	20
・人間関係学部 FD 活動報告	26
・文化情報学部 FD 活動報告	32
・現代マネジメント学部 FD 活動報告	37
・教育学部 FD 活動報告	41
・看護学部 FD 活動報告	45

II 全学 FD 小委員会の活動

1 授業アンケート小委員会の活動記録（平成 27 年度）	51
2 授業改善小委員会の活動記録	88
3 教員研修小委員会の活動記録（平成 27 年度）	106

III 大学院教育の質の向上に向けて

1 大学院 FD 委員会の活動記録（平成 27 年度）	129
2 平成 27 年度 大学院 FD 活動報告	130
3 平成 27 年度 研究科 FD 活動報告	131

はじめに

相山女学園大学全学 FD 委員会委員長

相山女学園大学大学院 FD 委員会委員長

戸 部 栄 一

文部科学省のホームページでは、FD（ファカルティ・ディベロップメント）の定義は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」（中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申（平成 17 年 1 月）による）とされている。FD 活動が始まったころは、「個々の教員の自助努力による授業改善」という色彩が強かったが、その後ここに示されたように「組織的取組」が強調され、大学として、あるいは各学部学科としてどのように授業改善に取り組むべきかという議論が高まってきた。

本学の全学 FD 委員会も、こうした状況を受け、幅広い改革とその展開を図っている。平成 26 年度から、各学部に「教育内容検討会議」を設け、学部学科としてのカリキュラムの妥当性と各科目で教えるべき内容の調整、教授法についての工夫と公開、さらに授業参観制度の定着などの試みを始めている。「主体的学習の推進」、「アクティブ・ラーニングの実践」などをキーワードに、授業内容・方法の改善も進められている。さらに、教務委員会を中心に授業科目のナンバリング設定が遂行され、各学部学科にとっての基幹的科目とアラカルト的科目の仕分け、整理が開始されることとなっている。

こうした動向の中で、平成 27 年度の全学 FD 委員会の主な活動は以下の 3 つの視点から展開され、成果の蓄積を重ねてきた。

- ① 多様な教員研修の採用とその成果の各教員への伝達
- ② 学生の主体的な学習を引き出すための授業アンケートの改善とそのリフレクションの作成、それらの学生への公開、授業内容・方法の反省に基く翌年度シラバスの工夫と徹底
- ③ アクティブ・ラーニングの推進を支援するための仕組みの検討及び参考授業のピックアップと勉強会の開催

これらの情報の共有とそれらを取り入れた授業改善、学生との対話などは、上記の「組織的取組」に向かっており、今後の FD 活動の方向性を示しているものと思われる。今後とも、関係各位のご理解のもと、授業改善と学生の主体的学修の進展に努めていきたいと思うものである。

I 大学 FD 委員会の活動

- 1 全学 FD 委員会の活動記録（平成 27 年度）
- 2 平成 27 年度 全学 FD 活動報告
- 3 平成 27 年度 学部 FD 活動報告

I. 1 全学 FD 委員会の活動記録

(任期：平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日)

(第 1 回) 平成 27 年 4 月 28 日 (火) 17:00～18:00 ※平成 26 年度第 11 回 委員会と合同開催	1. 報告事項 (1) 平成 26 年度全学 FD 委員会活動状況について (2) 平成 26 年度全学 FD 委員会予算の執行状況について (3) 平成 27 年度新任教員研修プログラムについて (4) 平成 27 年度新任教員研修 (学外) について (5) 学士課程教育の質的転換のための改革アクションプランについて (6) 平成 26 年度 FD 活動報告書について (7) その他 2. 議題 (1) 平成 27 年度全学 FD 委員会活動について (2) 平成 27 年度全学 FD 小委員会について (3) その他
(第 2 回) 平成 27 年 6 月 23 日 (火) 17:00～18:00	1. 報告事項 (1) 平成 26 年度 FD 報告書について (2) 新任教員研修 (学外) について (3) 外国語による教授法に関する FD 研修について (4) 「生活経営論」授業公開について (5) その他 2. 議題 (1) 平成 27 年度科研費取得のための研修会に関する件 (2) 平成 27 年度 FD 研修会に関する件 (3) 平成 27 年度 GLEXA (E-learning システム) 活用に向けての講習会開催に関する件 (4) アクションプラン 2015 における全学 FD 委員会の課題に関する件 (5) その他
(第 3 回) 平成 27 年 7 月 28 日 (火) 17:00～17:40	1. 報告事項 (1) 新任教員研修 (学外) について (2) その他 2. 議題 (1) 平成 27 年度授業アンケートの実施に関する件 (2) 教員研修小委員会 (WG 3) 計画書に関する件 (3) その他
(第 4 回) 平成 27 年 9 月 29 日 (火) 17:00～18:00	1. 報告事項 (1) 平成 27 年度 FD 研修会等出席者数について (2) 平成 27 年度後期授業アンケート実施について (3) 教育改革 ICT 戦略大会報告について (4) その他 2. 議題 (1) 平成 27 年度全学 FD 委員会課題進捗状況について (2) 平成 27 年度後期授業アンケートに関する件 ・設問内容について ・教員向けアンケートについて (授業改善小委員会) (3) 平成 28 年度『シラバス』作成に関する件 (4) 平成 28 年度予算に関する件 (5) 教員研修に関する件 (6) その他

(第5回) 平成27年10月27日(火) 17:00～18:00	1. 報告事項 (1) 平成27年度授業アンケートに関する件 (2) 学生FDスタッフの活用について (3) 小委員会の検討状況について 2. 議題 (1) 平成27年度後期授業改善のための授業公開期間について (2) 平成27年度教員研修について (3) その他
(第6回) 平成27年11月24日(火) 17:00～17:50	1. 報告事項 (1) 平成27年度後期授業アンケート科目について (2) 平成27年度後期授業改善のための授業参観週間実施について (3) 小委員会の検討状況について (4) その他 2. 議題 (1) 平成27年度教育・学修環境及び学生の学修時間等に関するアンケート調査について (2) 学生FDスタッフの活用について (3) 平成27年度「今年度の振り返りと来年度の目標アンケート」について (4) 平成27年度教職員研修について (5) その他
(第7回) 平成28年1月26日(火) 17:00～18:00	1. 報告事項 (1) 平成26年度全学FD委員会予算執行状況について (2) 平成26年度後期授業改善のための授業参観週間実施について (3) 平成27年度学生の学修時間等に関するアンケート調査結果について (4) 平成28年度新任教員研修プログラムについて (5) 私情協オンデマンド配信について (6) その他 2. 議題 (1) 平成27年度FD委員会活動報告書について (2) 平成27年度全学FD委員会活動について (3) 平成27年度授業評価アンケートについて (4) 平成27年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」アンケートについて (5) 平成27年度モラールに関する教職員研修について (6) その他
(第8回) 平成28年3月22日(火) 17:00～17:55	1. 報告事項 (1) 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケート結果について (2) 平成27年度授業アンケート結果について (3) 「平成27年度組織人としての責務に関する研修」実施結果について (4) 平成28年度新任教員研修(学外)について (5) その他 2. 議題 (1) 平成28年度前期授業アンケート実施について (2) その他

I. 2 平成 27 年度 全学 FD 活動報告

1. 授業アンケート

・実施時期：平成 28 年 1 月 5 日（火）～23 日（土） ※前 2 週間は予備期間

・授業アンケート対象科目

科目選定：卒業研究、集中講義及び受講者数が 10 名未満の科目を除くすべての後期開講科目の中から 1 教員につき 2 科目を選択

授業アンケート実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	73	64	87.7%	9
国際コミュニケーション学部	157	145	92.4%	12
人 間 関 係 学 部	136	129	94.9%	7
文 化 情 報 学 部	129	115	89.1%	14
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	70	65	92.9%	5
教 育 学 部	87	82	94.3%	5
看 護 学 部	34	33	97.1%	1
計	686	633	92.3%	53

◎リフレクション提出 432 科目／633 科目（68.2%）

2. 授業公開（授業改善のための授業参観）

期間：平成 27 年 11 月 30 日（月）～12 月 11 日（金）

対象：本学教職員及び非常勤講師

趣旨：教員がお互いの授業を参観する。参観した者はよい工夫を自分の授業に活かすとともに、参観の後、フィードバックシート、メール等で感想を授業担当教員に伝える。授業公開した教員も、意見やアドバイスを参考にし、授業改善を図っていく。専任教員全員が、授業の公開または参観を行う。

事務職員も授業を参観し、授業の様子を実際に見ることで、事務側の視点で授業支援を考える契機とする。

学 部	授業公開 人 数	授業参観 人 数	授業公開 科 目 数	参観者有 科 目 数
生 活 科 学 部	7	5	7	4
国際コミュニケーション学部	10	0	13	1
人 間 関 係 学 部	8	6	8	4
文 化 情 報 学 部	6	0	6	1
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	6	3	6	3
教 育 学 部	7	14	7	7
看 護 学 部	5	6	5	3
非 常 勤 講 師	—	1	—	—
事 務	—	1	—	—
計	49	36	52	23

3. 研修会

①外国語での教授法に関する FD 研修会

- ・日時：6月30日（火）16:30~18:00
- ・場所：国際コミュニケーション学部棟 204
- ・テーマ：「英語で専門科目を教えるためのワークショップ」
- ・参加者数：13名

②科研費取得のための研修会

- ・日時：9月10日（木）13:30~14:30
- ・場所：国際コミュニケーション学部棟 206 室
- ・報告者：（各報告：10分~15分）
阿部純一郎 文化情報学部准教授 （若手研究 B）
磯部錦司 教育学部教授 （基盤研究 C）
高植幸子 看護学部准教授 （萌芽研究）
- ・参加者数：31名

③ FD 研修（ハラスメント研修と同時開催）

- ・日時：9月11日（金）10:30~12:00
13:30~15:00
- ・場所：大学会館 大会議室
- ・テーマ：「発問で思考を促す授業をつくる」
- ・講師：中島英博 氏（名古屋大学高等教育研究センター准教授）
- ・参加者数：177名

④ Glexa 講習会

- ・日時：9月11日（金）15:30~17:00
- ・場所：文化情報学部メディア棟 324 室
- ・テーマ：Glexa の活用のための実技講習

- ・講師：Version 2（開発業者）講師
- ・参加者数：12 名

⑤組織人の責務に関する教職員研修（FD・SD 研修）

- ・日時：平成 28 年 3 月 8 日（火）9:30~10:30
- ・場所：国際コミュニケーション学部棟 206 講義室
日進キャンパス 5 号棟 205 室（双方向システムで中継）
- ・テーマ：「教職員の責務について」
- ・講師：服務規程について 吉川ひとみ総務部長
研究倫理について 戸部栄一学長補佐
- ・参加者数：108 名

4. 学修時間アンケート

S*map のアンケート機能を使い、「学修時間アンケート」を次の通り実施した。

学生の皆さんの、1/16（土）～1/18（月）の学修時間について、お伺いします。

この 3 日間、授業の時間以外で、「準備学習」「課題、復習」「授業に関するその他の学習」「授業以外で関心がある勉強」について、何時間勉強しましたか？

勉強の場所は、図書館でも、自習室でも、自宅でも、電車の中でも構いません。

3 日間、それぞれの日の、学修時間の実績を回答してください。

（このアンケートは、皆さんの学修のスタイルを把握し、本学がより価値の高い授業を提供するためにを行います。）

以下結果を掲載

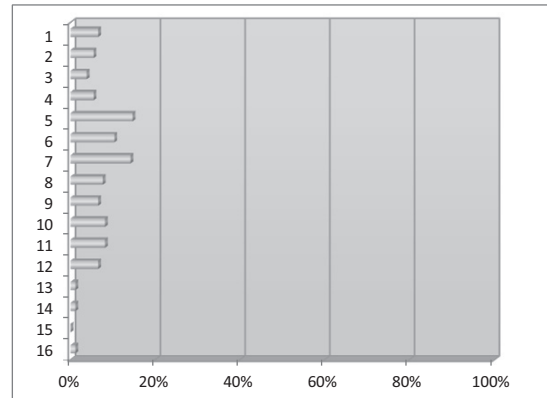
学修時間アンケート

1 所属学科（専修・研究科）を選んでください。（必須）

No	回答	回答数
1	管理栄養学科	12
2	生活環境デザイン学科	10
3	国際言語コミュニケーション学科	7
4	表現文化学科	10
5	人間関係学科	27
6	心理学科	19
7	文化情報学科	26
8	メディア情報学科	14
9	現代マネジメント学科	12
10	保育・初等専修	15
11	初等・中等専修	15
12	看護学科	12
13	生活科学研究科	2
14	人間関係学研究科	2
15	現代マネジメント研究科	0
16	教育学研究科	2

有効回答数： 185

6.5%
5.4%
3.8%
5.4%
14.6%
10.3%
14.1%
7.6%
6.5%
8.1%
8.1%
6.5%
1.1%
1.1%
0.0%
1.1%

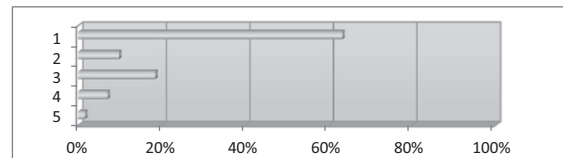


2 学年を選んでください。（必須）

No	回答	回答数
1	1年生	117
2	2年生	18
3	3年生	34
4	4年生	13
5	大学院生	3

有効回答数： 185

63.2%
9.7%
18.4%
7.0%
1.6%

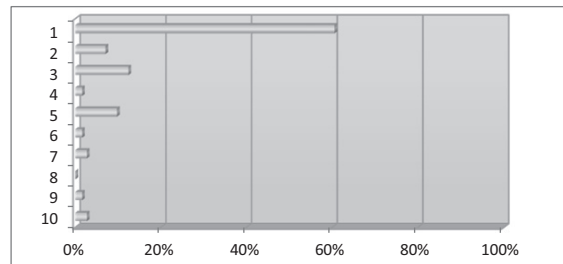


3 【土】 あなたは、1/16（土）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	112
2	15分前後	13
3	30分前後	23
4	45分前後	3
5	60分前後	18
6	90分前後	3
7	120分前後	5
8	150分前後	0
9	180分前後	3
10	210分前後orそれ以上	5

有効回答数： 185

60.5%
7.0%
12.4%
1.6%
9.7%
1.6%
2.7%
0.0%
1.6%
2.7%

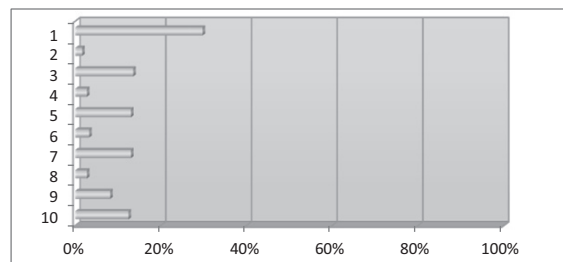


4 【土】 あなたは、1/16（土）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	55
2	15分前後	3
3	30分前後	25
4	45分前後	5
5	60分前後	24
6	90分前後	6
7	120分前後	24
8	150分前後	5
9	180分前後	15
10	210分前後orそれ以上	23

有効回答数： 185

29.7%
1.6%
13.5%
2.7%
13.0%
3.2%
13.0%
2.7%
8.1%
12.4%

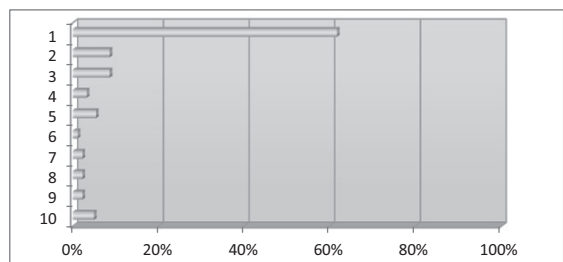


5 【土】 あなたは、1/16（土）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	114
2	15分前後	16
3	30分前後	16
4	45分前後	6
5	60分前後	10
6	90分前後	2
7	120分前後	4
8	150分前後	4
9	180分前後	4
10	210分前後orそれ以上	9

有効回答数： 185

61.6%
8.6%
8.6%
3.2%
5.4%
1.1%
2.2%
2.2%
2.2%
4.9%

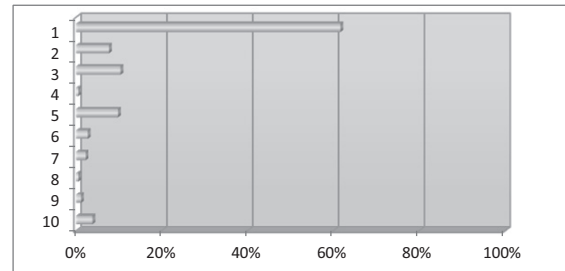


6 【土】 あなたは、1/16（土）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	114
2	15分前後	14
3	30分前後	19
4	45分前後	1
5	60分前後	18
6	90分前後	5
7	120分前後	4
8	150分前後	1
9	180分前後	2
10	210分前後orそれ以上	7

有効回答数： 185

61. 6%
7. 6%
10. 3%
0. 5%
9. 7%
2. 7%
2. 2%
0. 5%
1. 1%
3. 8%

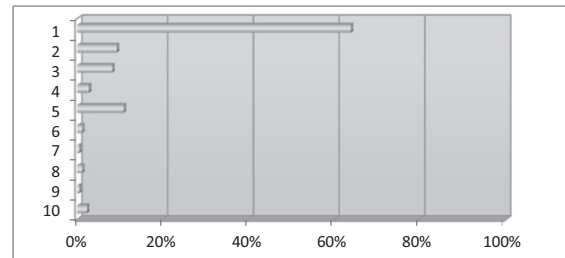


7 【日】 あなたは、1/17（日）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	118
2	15分前後	17
3	30分前後	15
4	45分前後	5
5	60分前後	20
6	90分前後	2
7	120分前後	1
8	150分前後	2
9	180分前後	1
10	210分前後orそれ以上	4

有効回答数： 185

63. 8%
9. 2%
8. 1%
2. 7%
10. 8%
1. 1%
0. 5%
1. 1%
0. 5%
2. 2%

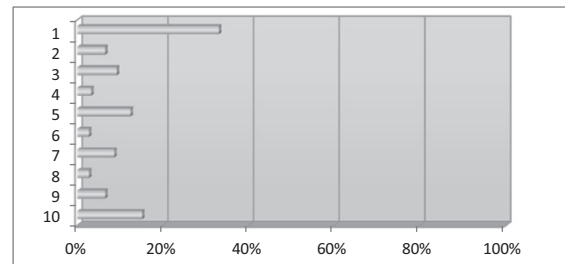


8 【日】 あなたは、1/17（日）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	61
2	15分前後	12
3	30分前後	17
4	45分前後	6
5	60分前後	23
6	90分前後	5
7	120分前後	16
8	150分前後	5
9	180分前後	12
10	210分前後orそれ以上	28

有効回答数： 185

33. 0%
6. 5%
9. 2%
3. 2%
12. 4%
2. 7%
8. 6%
2. 7%
6. 5%
15. 1%

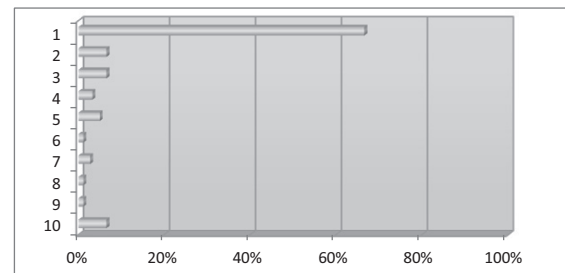


9 【日】 あなたは、1/17（日）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	123
2	15分前後	12
3	30分前後	12
4	45分前後	6
5	60分前後	9
6	90分前後	2
7	120分前後	5
8	150分前後	2
9	180分前後	2
10	210分前後orそれ以上	12

有効回答数： 185

66. 5%
6. 5%
6. 5%
3. 2%
4. 9%
1. 1%
2. 7%
1. 1%
1. 1%
6. 5%

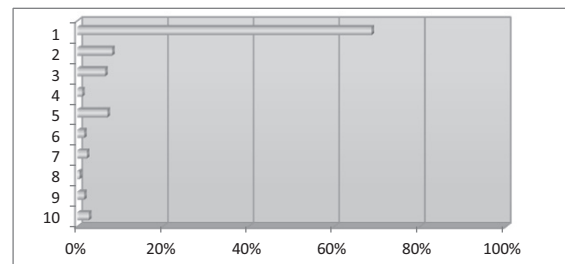


10 【日】 あなたは、1/17（日）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	127
2	15分前後	15
3	30分前後	12
4	45分前後	2
5	60分前後	13
6	90分前後	3
7	120分前後	4
8	150分前後	1
9	180分前後	3
10	210分前後orそれ以上	5

有効回答数： 185

68. 6%
8. 1%
6. 5%
1. 1%
7. 0%
1. 6%
2. 2%
0. 5%
1. 6%
2. 7%

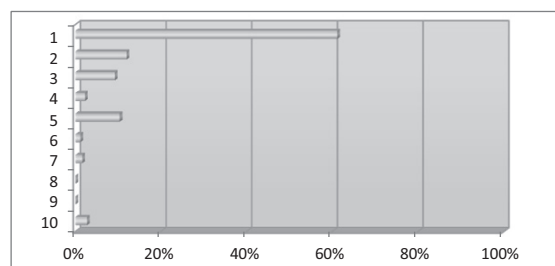


11 【月】 あなたは、1/18（月）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	113
2	15分前後	22
3	30分前後	17
4	45分前後	4
5	60分前後	19
6	90分前後	2
7	120分前後	3
8	150分前後	0
9	180分前後	0
10	210分前後orそれ以上	5

有効回答数： 185

61.1%
11.9%
9.2%
2.2%
10.3%
1.1%
1.6%
0.0%
0.0%
2.7%

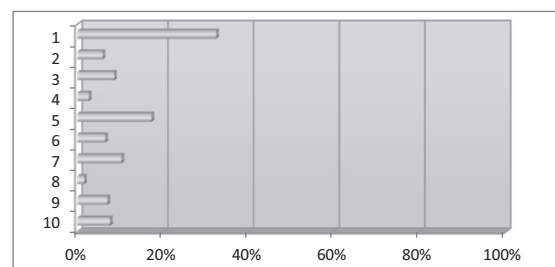


12 【月】 あなたは、1/18（月）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	60
2	15分前後	11
3	30分前後	16
4	45分前後	5
5	60分前後	32
6	90分前後	12
7	120分前後	19
8	150分前後	3
9	180分前後	13
10	210分前後orそれ以上	14

有効回答数： 185

32.4%
5.9%
8.6%
2.7%
17.3%
6.5%
10.3%
1.6%
7.0%
7.6%

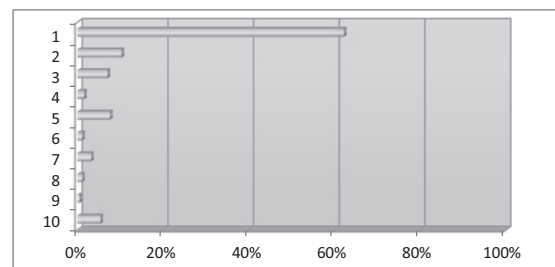


13 【月】 あなたは、1/18（月）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	115
2	15分前後	19
3	30分前後	13
4	45分前後	3
5	60分前後	14
6	90分前後	2
7	120分前後	6
8	150分前後	2
9	180分前後	1
10	210分前後orそれ以上	10

有効回答数： 185

62.2%
10.3%
7.0%
1.6%
7.6%
1.1%
3.2%
1.1%
0.5%
5.4%

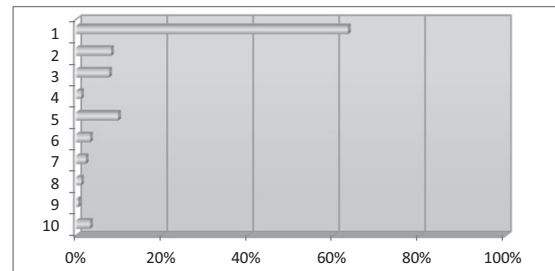


14 【月】 あなたは、1/18（月）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	117
2	15分前後	15
3	30分前後	14
4	45分前後	2
5	60分前後	18
6	90分前後	6
7	120分前後	4
8	150分前後	2
9	180分前後	1
10	210分前後orそれ以上	6

有効回答数： 185

63.2%
8.1%
7.6%
1.1%
9.7%
3.2%
2.2%
1.1%
0.5%
3.2%

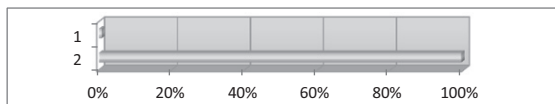


15 あなたの学修時間に関して、思っていることを自由に書いてください。（例：大変と感じていること、やりたいこと、工夫 等）

No	回答	回答数
1	回答あり	40
2	回答なし	5829

回答対象者数： 5869

0.7%
99.3%



学 科	学年	回 答
表現文化学科	1 年	24 時間の短さ。
国際言語コミュニケーション学科	2 年	これから、正式な授業が終わり、補講期間に入っていくので、授業の空き時間を使って、レポート作成や試験に向けての勉強をしていきたいです。
国際言語コミュニケーション学科	3 年	なかなか勉強に集中することができず、気付いたら他ごとをしている(携帯を触る、パソコンでの課題作業であれば、インターネットを開いてしまっている、など)。また、課題はギリギリになって焦る気持ちがないと、始めないようになってしまった。
管理栄養学科	1 年	アルバイトで勉強時間が少なくなっていること。
看護学科	1 年	テストの直前にレポートの課題をいくつも出さないでいただきたいです。
文化情報学科	3 年	テスト前になるとレポートがたくさん出て大変
生活環境デザイン学科	3 年	テスト前には勉強する時間をとるが、そうでないときは課題しかないことが多い。
表現文化学科	1 年	テスト前のため、どうしても課題や復習に偏りがちである。授業以外で関心のある勉強については、夏休みや春休みなどの長期休暇を利用して、学習したいと考えている。
文化情報学科	1 年	バイトとの両立が難しい。
国際言語コミュニケーション学科	3 年	パソコンに向かっている時間が長いいため苦痛。
保育・初等教育専修	1 年	レポートが大変です。 計画的にやりたいです。
初等中等教育専修	1 年	レポートや復習で精一杯で、予習まではなかなかできない。 また、アルバイト(塾講師)の予習をしていることもあり、最近あまり読書ができていない。 春休みは、勉強をしつつ読書の時間を取りたいと思っている。
看護学科	1 年	レポートを早くまとめられるようになりたい
看護学科	1 年	今回の調査はテスト前だったため、土日は1日中勉強していましたが、普段は課題や次の週の授業に必要な学習以外はしていないのが事実です。
現代マネジメント学科	2 年	先生によって課題(レポートなど)を提出期限ギリギリに説明してくる先生がいるが、テスト勉強や資格の勉強をしたいので課題は早めにだしてほしいと私を含め多くの友人が口々にしている。
保育・初等教育専修	1 年	勉強しなければならないと思うし、学びたいこともあるが、なかなかその時間を捻出することが出来ていないのが現実だと思う。
現代マネジメント学科	1 年	勉強をしたいがやる気が出ず、なかなか勉強できない。
保育・初等教育専修	1 年	勉強時間が少ないと思う
初等中等教育専修	1 年	勉強時間を通学中に確保したいが疲れて寝てしまう。
メディア情報学科	1 年	土日はサークルのコンクールがありました。
生活科学研究科	大学院生	大学の授業よりも自分で本を読んだほうがマシ
人間関係学科	2 年	家が遠いので電車やバスの中で本を読んだり勉強したりしています。
心理学科	1 年	授業で出されたレポートを作成するのが大変です。
人間関係学科	1 年	授業の空きコマなどは、極力図書室に行き読書か勉強をしようと心がけています。

初等中等教育専修	3 年	採用試験対策の勉強と講義レポートや試験勉強の両方をこなすのは難しい。
管理栄養学科	1 年	時間をかけすぎてしまい大変です。あと、なかなかやる気が起きません。 何か資格の勉強もしたいと思っています。 いろんなことを少しずつすすめるのではなく、ひとつのことに集中して何時間もやっています。
国際言語コミュニケーション学科	1 年	月曜提出の課題を日曜の深夜までやっていて睡眠時間が足りなかったため、疲れていて月曜は何もできなかった。レポートなどの早めにできる課題は前もって少しずつやっておくべきだと思いつつ、追い込まれないとできないところがあるので直したい。
文化情報学科	3 年	毎日数分でもいいから勉強する時間を確保して勉強するようにしています。
初等中等教育専修	1 年	父が入院しているため、小さな弟の面倒を見なければならないため、平日の勉強がなかなかできない。将来理科教員になりたいと思っているため、理科の勉強も欠かさずに行っている。
保育・初等教育専修	1 年	特にないです。
心理学科	1 年	独り暮らしだと、家事をする時間もあるため、勉強時間がとりづらい。また、授業の教え方が自分と合わない科目は全くやる気がない。
生活環境デザイン学科	1 年	課題が多い
保育・初等教育専修	3 年	課題が多くて、自分の関心のあることや採用試験に向けた勉強の時間が取れません。
保育・初等教育専修	1 年	課題の提出期限がある週は、課題をやることで自由時間がつぶれてしまうので事前に少しずつやらなくてはいけない、といつも思っている。
現代マネジメント学科	2 年	資格の勉強
文化情報学科	3 年	資格関連の勉強時間の方を最近では優先してしまっているので、授業で学んだことについての勉強もこれから頑張っていこうと思った。
人間関係学研究科	大学院生	通学中の地下鉄・名鉄に乗車中に読書する
表現文化学科	3 年	通学時間を利用して勉強することも多い。
教育学研究科	1 年	部活動関係で悩むことがあり、岩崎夏海さんの本を読みました。読書は久しくしていませんでしたが、研究室にゼミ関係の質問をしに行った時から、自分の知識を広めないといけないという義務感を感じました。今後も卒業研究発表会に行く予定なのですが、これから先の進路をどうするか、悩んでいるのでまずそういった関係の本を読んだり、まず基本とされている今までの講義の内容を復習すること、来週の試験に向けて十分に準備をするために、現在の学習時間では不十分だと思うので、理想としては継続的にできるように、まずはやってこなかった分、そして今やらなければならない分をやろうと思いました。
メディア情報学科	3 年	集中力ががない

I. 3 平成 27 年度 学部 FD 活動報告

生活科学部 FD 活動報告

生活科学部 FD 委員会委員

(管理栄養学科) 及川佐枝子、本山昇
(生活環境デザイン学科) 橋本令子、高阪謙次
(学部長・オブザーバー) 間瀬民生

【1】活動計画（目標）

- ①全学で実施される授業アンケートや授業参観などの参加率を高めるよう努力すること。
- ②学部の FD 活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
- ③予定されている学科行事をつつがなく達成すること。

【2】実施報告

①委員会の開催

平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月の期間中、委員会はメール会議によりタイムリーに実施した。協議事項については、FD 委員間或いは各学科会議・教授会にてそれぞれ臨機応変な手段で協議・決定した。

<協議事項>

- 授業アンケートの実施は例年通り実施するが、非常勤の教員については自由記述のみ実施することを確認。
- 授業参観を例年通り実施することを確認。
- 昨年度と同様に、卒業時アンケートを実施することを確認。
- 学部 FD 委員会のウェブサイトの運営について、来年度も継続することを確認。

②学部 FD 委員会ウェブサイトの更新

学部 FD 活動報告の更新を行った。

③購入した書籍

学部 FD 活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなし

④H 27 年度に企画・実施された FD 活動

- H 27 年 7 月 FD 委員による授業参観（及川委員参加）
- H 27 年 9 月 新任教員に対し、各担当教員及び事務室からガイダンスを実施（管理栄養学科）（本山昇教授）
- H 27 年 9 月 科研費取得のための研修会（全学・9/10）、授業参観週間（全学・11/30-12/11）、組織人の責務に関する教職員研修会（全学・3/8）
- H 27 年 11-12 月 授業における学生 FD スタッフの活用（管理栄養学科・森奥登志江教授、河合潤子講師）
- H 27 年 11 月 教員向け授業改善に関わるアンケートの実施（全学）

- H 27 年 12 月 授業アンケート実施（全学）
- H 28 年 2-3 月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケートの実施（全学）
- H 28 年 3 月 卒業時アンケートの実施

【3】課題点

- 目標①については、本学部は授業アンケートでは実施率 87.8%（全学 92.3%）、リフレクションペーパー提出率 71.9%（全学 68.2%）、授業参観では 32.3%（全学 36.1%）であり、全学的にみて若干低かった。しかし本年度新たに実施された「教員向け授業改善に関わるアンケート」では、ほぼ全員から回答が得られ、回答率は 96.7% であった。参加率アップのための働きかけは、教授会や学部メーリングリストを通じて全員にアナウンスという形で行った。授業アンケートでは、実施教科の少ない参加者にピンポイントで依頼を行ったが、実施率アップにはつながらなかった。H 28 年度はさらに FD 活動の意義をより丁寧に説明したうえでアナウンスを増やし、また、非回答者・非参加者を把握して個別に依頼するなど、前年度より参加率が上がるよう努めたい。
- 目標②については学外における FD 研修などへの参加の呼びかけを行わなかった。そのため H 28 年度は学外 FD 研修などの機会を捉えて参加を呼びかける必要がある。学内の FD 活動が増えたことと、昨年度に引き続き学部自動的に FD 活動のための予算がつかず、活性化予算を申請して獲得するシステムになったことも、低調に終わった要因かと思われる。
- 目標③については、予定通り実施することができた。昨年度より実施している卒業時アンケートにおいて、学生の 4 年間の学びに対する感想・意見を把握できたことは、教員にとって今後の教育の指針を確かめるために大変有益であった。また、本年度は授業における学生 FD スタッフの活用の呼びかけを積極的に行ったところ、2 名の参加があり、授業の教授方法の質の向上につなげることができ有益であった。

【4】次年度へ向けた計画

H 27 年度に掲げた目標①②③の達成度をみると、FD 活動を推進する積極的な力がまだまだ弱いことがわかる。FD 活動の意義と重要性を FD 委員がまず理解し、他の教職員の理解を助け、積極的な提案や活動が生まれるように、アナウンスの仕方を工夫する。また、FD 委員自らも積極的に提案を考え、実施報告の内容が増えるように、学部の協力のもと様々な活動を実現していきたい。そのためには、FD 活動への参加率など、既存の学部 FD 活動の現状をより詳細に把握していく必要もあるかもしれない。

本年度新たに実施された「教員向け授業改善に関わるアンケート」の回答によると、両学科教員とも、個人レベルではそれぞれ授業で様々な改良を試みていることが推察できる。しかしながら、各自の試みが現状では十分相互に認識されているとはいえない。そのため、このアンケートの回答を有効に利用し、個々の努力と成果を共有してプラットフォームを作っていくことは、次年度検討していきたい項目のひとつである。

卒業時アンケートは昨年度に引き続いての実施となり、両学科で得られた結果をふまえ、さらなる授業改善の材料としていくこと、ならびに卒業時アンケートの実施内容についても引き続き検討することが必要だと考えられた。

（以上）

平成 27 年度 管理栄養学科 卒業時アンケート

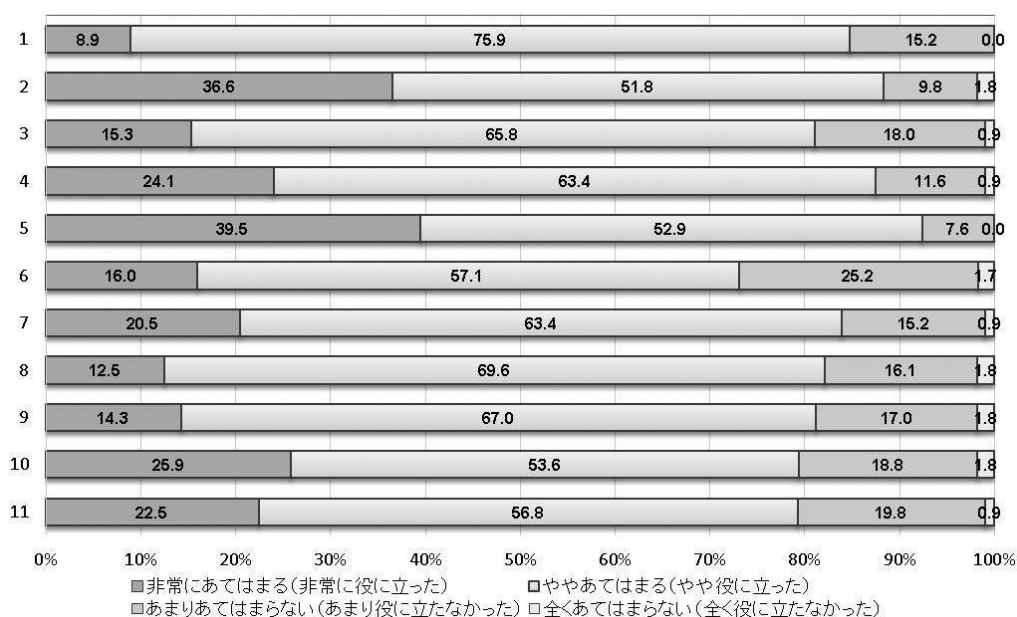
〔概要〕

管理栄養学科 4 年生、112 名（欠席者：4 名）を対象として、2016 年 3 月 2 日（水）に実施した。

〔設問〕

1. 「講義」、「実習・実験」、「臨地実習」を組み合わせたカリキュラムによって、知識と技術の修得とともに、情報の収集とまとめ方、プレゼンテーション力及びコミュニケーション力、管理栄養士としての実践力を養うことができましたか？
2. 3 年次の「専門演習」と 4 年次の「卒業研究」を通じて、研究テーマに関わる情報収集と知識の修得、研究手法と科学的考察を通じ、論文作成力などを養うことができましたか？
3. 4 年次の「栄養総合演習」を通じて、管理栄養士に必要な知識と技術の総復習と横断的な知識及び応用力を強化することができましたか？
4. （知識・理解）4 年間の学びを通じて、食と健康に関連する幅広い知識・技能を身につけ、それらの知識・技能を社会貢献のために発揮するための基盤を築くことができましたか？
5. 4 の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
6. （思考・判断）4 年間の学びを通じて、健康で快適な暮らしを提案するために、食と健康に関連するさまざまな課題を的確に分析し、実践的かつ創造的に自らの見解を形成するための基盤を築くことができましたか？
7. 6 の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
8. （態度・志向性）4 年間の学びを通じて、地域やコミュニティ、食品産業や医療・福祉現場などで、食と健康に関連するさまざまな問題に責任感を持って対処するための基盤を築くことができましたか？
9. 8 の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
10. （技能・表現）4 年間の学びを通じて、さまざまなライフステージの人とのコミュニケーションを図ることができ、食と健康に関連した分野で高い専門性を発揮するための基盤を築くことができましたか？
11. 10 の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？

〔結果〕



〔まとめ〕

項目 6 の「思考・判断」に関する設問では、約 3 割が、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を選択したが、その他の項目については、おおむね 8 割以上の学生が肯定的な回答をした。特に、項目 2,4,5 の「専門演習」「卒業研究」「知識・理解」については、約 9 割の学生が「役に立った」と実感していることがわかった。また、項目 3 の「栄養総合演習」については、昨年度は否定的な回答が半数近く見られたが、今回は肯定的な回答が増えた。一方、項目 6,8-11 の「思考・判断」「態度・志向性」「技能・表現」については、2 割近くの学生が満足していないという結果であった。今後、この項目については改善に向け検討していく必要があると考えられる。

H 27 年度 生活環境デザイン学科 卒業時アンケート

〔概要〕

生活環境デザイン学科 4 年生（131 名）を対象として 2016 年 3 月 15 日（火）に実施した。

〔設問〕

1 学科の目的に関して：

専攻した分野のもののづくりの実践を通して、快適な生活環境を創造することができる人材に、あなたはなれそうだと思いますか？

- | | |
|--------------------|------------------|
| ①なれそう（25.2%） | ②ややなれそう（61.1%） |
| ③あまりなれそうにない（12.2%） | ④全くなれそうにない（1.5%） |

2 学科のディプロマポリシーに関して：

生活環境について、生活者・消費者の視点をもとに、それを具体的なデザインとして提案・実践するための基本知識と技術を、身につけることができましたか？

- | | |
|------------------|-----------------|
| ①できた（22.1%） | ②ややできた（65.6%） |
| ③あまりできなかった（9.9%） | ④全くできなかった（2.3%） |

3 学科のディプロマポリシーに関して：

今後、豊かな教養と人間性を培いながら、生活環境の向上に貢献できそうですか？

- | | |
|--------------------|------------------|
| ①できそう（31.3%） | ②ややできそう（56.5%） |
| ③あまりできそうにない（11.5%） | ④全くできそうにない（0.8%） |

4 学科のディプロマポリシーに関して：

生活環境を、生活者・消費者の視点から、科学的に探求できるようになったと思いますか？

- | | |
|-------------------|-----------------|
| ①なった（19.1%） | ②ややなった（54.2%） |
| ③あまりなっていない（24.4%） | ④全くなっていない（2.3%） |

5 学科のディプロマポリシーに関して：

専攻分野について、その知識と技術を身につけ、具体的なデザインとして提案・実践できるようになったと思いますか？

- | | |
|-------------------|-----------------|
| ①なった（26.0%） | ②ややなった（57.3%） |
| ③あまりならなかった（15.3%） | ④全くならなかった（1.5%） |

6 知識・理解について

生活環境全般への幅広い視点を得たうえで、選択した分野において高度な専門知識を修得したと思いますか？

- | | |
|--------------------|------------------|
| ①修得した（16.8%） | ②やや修得した（61.8%） |
| ③あまり修得しなかった（19.8%） | ④全く修得しなかった（1.5%） |

7 思考・判断について

生活環境に関わる諸問題に、修得した専門性を活かして創造的に取り組むことができますか？

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ①できと思う（20.6%） | ②ややできと思う（65.6%） |
| ③あまりできない（12.2%） | ④全くできない（1.5%） |

8 態度・志向性について

ものづくりの喜びを感じながら、心地よい暮らしのデザインを、試行錯誤を重ねて提案できますか？

- | | |
|-----------------|---------------|
| ①できる（28.2%） | ②ややできる（55.7%） |
| ③あまりできない（16.0%） | ④全くできない（0%） |

9 技能・表現について

職業人として必要な生活環境に関する資格取得を可能にするような専門的技能を獲得し、豊かな表現力・企画力を身につけたと思いますか？

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ①身につけた (25.2%) | ②やや身につけた (49.6%) |
| ③あまり身につけなかった (24.4%) | ④全く身につけなかった (0.8%) |
- 10 入学時に目指した資格や免許に必要な科目を、履修することができましたか？
- | | |
|--------------------|------------------|
| ①できた (51.1%) | ②ややできた (29.0%) |
| ③あまりできなかった (14.5%) | ④全くできなかった (5.3%) |
- 11 本学科での4年間の学びは、あなたにとって充実したものでしたか？
- | | |
|----------------------|-------------------|
| ①充実していた (55.7%) | ②やや充実していた (38.9%) |
| ③あまり充実していなかった (5.3%) | ④全く充実していなかった (0%) |
- 12 本学科の4年間の学びに、あなたは満足していますか？
- | | |
|--------------------|-------------------|
| ①満足している (51.9%) | ②やや満足している (39.7%) |
| ③あまり満足していない (6.9%) | ④全く満足していない (1.5%) |
- 13 本学科の4年間の学びは、あなたの将来に役立ちそうですか？
- | | |
|-------------------|------------------|
| ①役に立つ (51.9%) | ②やや役に立つ (39.7%) |
| ③あまり役に立たない (6.9%) | ④全く役に立たない (1.5%) |
- 14 大学生活全体は、楽しかったですか？
- | | |
|--------------------|-------------------|
| ①非常に楽しかった (74.0%) | ②やや楽しかった (19.1%) |
| ③あまり楽しくなかった (4.6%) | ④全く楽しくなかった (2.3%) |
- 15 本学科に愛着を感じますか？
- | | |
|-----------------|------------------|
| ①非常に感じる (51.1%) | ②やや感じる (41.2%) |
| ③あまり感じない (5.3%) | ④まったく感じない (2.3%) |
- 16 あなたは本学科で4年間、がんばって学んだと思いますか？
- | | |
|---------------------|--------------------|
| ①とてもがんばった (43.5%) | ②まあまあがんばった (45.0%) |
| ③あまりがんばらなかった (9.2%) | ④全くがんばらなかった (1.5%) |
- 17 本学での学びは、あなたに自信をつけましたか？
- | | |
|----------------------|---------------------|
| ①とても自信がついた (40.5%) | ②まあまあ自信がついた (47.3%) |
| ③あまり自信がつかなかった (9.9%) | ④全く自信がつかなかった (2.3%) |
- 18 本学科の4年間の学びについて、ご自由にご意見・ご感想をお書き下さい。

〔結果〕

設問1では、快適な生活環境を創造することができる人材に「なれそう」25.2%、「ややなれそう」61.1%と、大多数が学科の目的に合致した回答であった。設問2~5のディプロマポリシーに関して、73.3~87.8%が肯定的な回答を寄せ、設問6~9の育成する4つの能力(知識・理解)(思考・判断)(態度・志向)(技能・表現)に関しても、78.6~86.3%が肯定的回答であり、ディプロマポリシーに対応した結果であった。設問10では、「できた」「ややできた」と80.1%が回答し、資格取得については半数以上の学生が当初の目的を達成している。設問11~14の4年間の学びの満足度は、90%以上が肯定的な意見であった。設問15では、学科への愛着を尋ねたが、92.3%が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答し、4年間の学びの満足度との関係が強いことがわかった。設問16~17も88.5%、87.8%が肯定的な回答で、4年間のがんばりと身に付けた自信はほぼ同率であり、その中の40%以上が「非常にあてはまる」を選択していた。設問18の自由記述では、「厳しい分、学びが大きかったのでこの学科でよかった」「将来なりたい職につけた」「専門的で大変だったけど、頑張って良かった」「3分野幅広く生活について学べてよかった」「充実した4年間であった」など、高い満足度を示す意見や感想ばかりであった。

〔まとめ〕

以上、今年度は卒業生全員に対しアンケートを行うことができたので、昨年度に比べ精度が高い結果となった。全回答から、学科の設定している目標に満足感・充実感を持って卒業をしていることが示唆された。

国際コミュニケーション学部 FD 活動報告

1. はじめに

国際コミュニケーション学部では現在、大幅なカリキュラムの改革が為されている。特に英語科目における変化が大きい為、英語科目に関する調査を縦断的に行うこととした。今年度は、その2回目である。卒業する学生に対し、英語科目に特化し、自分がどの程度の修得をしているかを達成度として尋ねた結果を以下に報告する。

2. 調査の内容と方法

使用した調査用紙を、資料として巻末に付す。

大学4年間で、どこまで語学を習得出来たかを尋ねるのには、具体的な選択肢を提示し、客観的に答えられるようにした。主観的な選択肢（例：「よくできた」「まあまあよくできた」等）の場合、無意識に謙虚な答えになってしまうことが考えられるので、それを避ける為である。英語が調査の目的となるが、表現文化学科では英語をとらない学生がいる為、言語コミュニケーション学科とは別の質問を用意した。さらに、ドイツ語やフランス語に興味を持つ学生が一定数いることも配慮した構成とした。

実施したのは、卒業式の学位記授与の後である。慌ただしい雰囲気も考慮して、できるだけ○をうつだけ以て終わるようにしたが、具体的な科目名と今後の希望は記述式とした。

3. 国際言語コミュニケーション学科

有効回答数は94名であった。

問1. の英語がどの程度身に付いたと感じているかに対する回答は以下の通りである。

議論	日常生活	旅行	少し分かる	身に付かない
7	25	53	7	2

1割近い学生が、議論や研究と言った活動を行うのに十分な英語が身に付いたと感じている。これは、昨年度と比べてやや少ない。9割弱の学生が、旅行レベルでは不自由しないと感じておりこちらも、昨年度より少ない。昨年度は見られなかった、身に付かなかったと感じる学生が2名いた。全体に評価は昨年度より低めである。しかし、十分な英語力を身に付けて卒業出来る、と感じている学生がほとんどであることに変わりはない。それでは、それらは学生の入学前の期待にどれくらい沿っているのだろうか。

問2. の期待に答えられたかの問いに関しては、以下のような回答があった。

十分上回る	やや上回る	ほぼ期待通り	やや期待外れ	期待外れ
14	25	33	19	3

ここでも、半数近い学生が期待以上の教育を受けられたと評価している。一方で、「まったく期待に答えていない」との評価も3名あった。いずれも、他の質問にほとんど答えておらず、アンケート自体に対してネガティブな態度を持っていたようである。しかし、学習された言語のレベルは、必ずしも低くない。

「役に立った科目」では、一年生のときに毎日学ぶ communicative English が「読む」「書く」「聞く」「話

す」のすべてにおいて、圧倒的な多さであった。Advanced English、expressive English も多く挙げられていた。「こういう科目があったら」というアイデアを募る設問に対しては、今年度は回答が非常に少なかった。そんな中であげられたのが、「英語で映画を撮る授業」「英語で料理を作る」「英語で文学を読む」「international teacher（当学部では native という言い方をしない。多彩な言語に関する科目を開講した結果、必ずしも母国語を教えている教員ばかりではなくなったからである）と討論する授業」「TOEIC の更に高得点を目指す授業」といった内容が見られた。中にはゼミでは実現している授業もあるが、更に広く受けられるようにしてほしいということであろう。座学に留まらない実践的な語学の授業へのニーズが高まっていると言える。

Communicative English への 2 年続けての高い評価が、多くの学生が、毎日積み重ねていく学習が身についたと評価していることが明らかにしていると考えられる。

4. 表現文化学科

当学科では、外国語の履修は 1 種でも卒業できる。2 種を履修することも可能であり、通年で前・後期 1 コマずつで開講される「中国語」「スペイン語」もある。当学科の特徴として、国際言語コミュニケーション学科を第一希望としていたがこちらに来たという学生が一定数存在し、英語への意欲が高い一方で、英語が苦手だから当学科を志望した学生も多く、後者はすでに実力差のある英語ではなく、フランス語・ドイツ語を選択することも多い。新たな言語を学びながら、同時にその言語圏の文化を学び、留学等を通していわゆる「はまった」状態になる学生も見られる。複数の言語を学ぶ学生の動機として、複数の文化について知りたいということもある。

それらを踏まえて、表現文化学科のデータは主に学んだ言語を軸として分析した。有効回答数は 88 である。

主に学んだ言語を英語とした学生は、62 名である。昨年度より全体の人数が少なくなっているにもかかわらず、大きく増加している。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

議論	日常生活	旅行	少しわかる	身につかない
1	17	20	20	4

言語と比較して、やはり全体の値は低い。議論や研究ができるとしたのは 1 名である。しかし、英語圏で生活するのに苦労はしないところまで、英語が習得できていると感じている学生が 3 割近くにのぼっており、昨年度より高くなっている。全体の 7 割近くが、旅行で役に立つ程度には習得できていると感じており、この比率も昨年度より高い。一方で、昨年度は 1 人だった、身につかなかったと感じる学生が 4 名と増加した。

どの授業が役に立ったと思うかの質問には、言語学科と同様の communicative English、expressive English があがっていた。表現学科では、それとは別に、面白かった授業という問題も設けたが、こちらは今年度は、回答数が少なかった。「ビジネスのための英語」があげられた他は、フランス語・ドイツ語・スペイン語といった、他の外国語の授業、留学が多くあげられていた。

主に学んだ言語をドイツ語とした学生は、昨年度の 29 名から、大きく減少して 10 名だった。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

旅行	少し
5	5

大学生になってから学び始めた言語ということで、英語と比較して、身についた実感は薄い。しかし、昨年度は身につかなかったとした学生が3名、少しはわかると合わせると、半数以上が役立つレベルには達していないとしたのに比べて、今年度は旅行に行つて困らないとした学生が5名と半数にのぼり、残りの5名も少しはわかるとしており、身につかないと感じている学生がいなかったことから、昨年度より深い学習がなされたと考えられる。

役に立った授業としては、自由記述であるにもかかわらずほとんどの学生が記入しており、ドイツ語の授業全般をたかく評価していた。「実践的」「資格に結びついた」「わかりやすい」といった内容である。「ドイツ語で読むグリム」も評価が高い。

面白かった授業では昨年に引き続き、木村クリスタ先生の授業が挙げられている。「楽しくて気がついたら身についていたと感じる」との意見があった。「海外演習」つまり留学を挙げている学生が複数おり、当学科らしい深い学習がされていたことが示唆される。

English Festivalのように、英語以外の科目でも劇を上演して、見てもらう機会があれば良いとの意見があった。

主に学んだ言語をフランス語とした学生は、16名だった。昨年度と比較して3名の増加である。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

旅行	少し
13	3

昨年度に見られた、身についていないと感じている学生がおらず、ほとんどの学生がある程度のコミュニケーションが可能だと考えている。これも、ゼロから初めて、4年間しっかり学習した結果だと思われる。

役に立った授業としては、フランス語全般が「丁寧に教えてもらえた」「多様な学びがあった」等の意見と共に挙げられていた。マルコ・ソッティーレ先生の名前が「日本伝統文化論」とも合わせて、昨年に引き続きあがっており、丁寧でわかりやすいとの理由も、昨年度とほぼ同じであった。

面白かった授業では、「フランス語の翻訳」が複数あげられた。また、数名が中国語とスペイン語をあげており、他の言語に対する関心が高いのも、今年度のフランス語選択者の傾向といえるであろう。

表現における外国語の学びは、少数の学生が深く学習するという傾向は昨年と共通していると考えられる。

今後、どのような語学関連の科目があったら良いと思うかについては、昨年度は韓国語が圧倒的に多かったが、今年度はオランダ語・アラビア語・フィンランド語・スウェーデン語・ポルトガル語と関心のある国の言語を学びたいという範囲の大きな広がりが見られた。昨年度同様、やはり英語に対するニーズも高く、TOEICの授業を増やして受講の機会を広げてほしい、international teachersによる語学以外の授業があれば受けたい、といった内容の意見が引き続き見られている。

5. まとめと展望

昨年度と比較すると、全体に学生の自己評価も満足度も数値を落としているが、全体としては高い値をキープしている。他方、記述項目への対応は少なかった。昨年度にあったような、欄外に意見を述べるようなこともなかった。表現文化学科における英語以外の言語学習に対する熱意は相変わらず高く、こちらは昨年度よりも自己評価が高かった。

国際コミュニケーション学部FD委員としては、引き続き調査を行い、カリキュラムの改定が学生にどのように受け止められているかを見ていく所存である。

平成 27 年 3 月 14 日

国際コミュニケーション学部
国際言語コミュニケーション学科
達成度調査

ご卒業おめでとうございます。

卒業にあたり、みなさんが大学 4 年間で英語を修得したと感じている程度について、以下の質問にお答え下さい。

1. 大学 4 年間の課程を修了して、英語はどの程度まで修得出来たと思いますか。
 - a. 英語で研究・議論等の日常生活以上の活動ができるレベル。
 - b. 日常生活を送るのに支障がないレベル。
 - c. 旅行等に行ったとき役立つレベル。
 - d. 少しはわかるレベル。
 - e. あまり身につかなかった。
2. それは、入学前の期待を上回ることができていますか。
 - a. 期待を充分上回ることができた
 - b. 期待をほぼ上回っている
 - c. だいたい期待通り
 - d. やや期待に届かなかった
 - e. 期待以下
3. 入学前に、伸ばしたいと期待していた能力は以下のうち、どれですか。(複数回答可)
 - a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
4. 実際に伸びたと感じている能力は以下のうち、どれですか。(複数回答可)
 - a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
5. 以下の能力を伸ばすのに、役立ったと思う科目はなんですか。(複数回答可)

読む → ()

書く → ()

聞く → ()

話す → ()

6. この学科に、こういった英語の授業があればいいというアイデアがあれば挙げて下さい。

()

ありがとうございました。みなさんの新しい日々が幸多いことをお祈りします。

平成 27 年 3 月 14 日

国際コミュニケーション学部

表現文化学科

達成度調査

ご卒業おめでとうございます。

卒業にあたり、みなさんが大学４年間で外国語を修得したと感じている程度について、以下の質問にお答え下さい。

7. 4年間の課程内で、どの言語の授業をとりましたか。

a. 英語 b. ドイツ語 c. フランス語 d. 中国語 e. スペイン語

8. 主として学んだ言語はなんですか。そしてそれは、どの程度達成されていますか。

() 語

f. 研究・議論等の日常生活以上の活動ができるレベル。

g. 日常生活を送るのに支障がないレベル。

h. 旅行等で外国に行ったとき役立つレベル

i. 少しはわかるレベル

j. あまり身につかなかった

9. 4年間で、役立ったと思う外国語の授業を挙げて下さい。できれば理由もお願いします。(複数回答可)

10. 4年間で、学んで良かった、面白かったと思う外国語の授業を挙げて下さい。出来れば理由もお願いします。3. と重複しても結構です。(複数回答可)

11. この学科に、こういった外国語の授業があればいいと思うものがあれば挙げて下さい。

ありがとうございました。みなさんの新しい日々が幸多いことをお祈りします。

人間関係学部 FD 活動報告

人間関係学部では、これまで学部独自の FD 活動を立案し実施してきた。その内容としては、

- 1) 新入生の入学直後に実施しているコンピテンシーテスト結果を用いた FD 講演会を実施したこと。一前年度からファーストイヤーゼミの時間内に行っているテスト、2 年分の結果をもとに、ベネッセコーポレーション大学事業部のスタッフを招いて、そのアセスメント結果分析からわかる学部の特徴と学部に必要な初年次教育の問題点について話し合いを行った。
- 2) 平成 23 年度から運用を開始した新カリキュラムに関して、年度末に学部独自の授業アンケートを実施した。これは共通の質問項目を用いて、新カリキュラムの評価検証を行う目的である。
- 3) また人間関係学科でも教員有志の参加による卒論発表会が開催されるようになった。心理学科では学部創設以来、毎年行われてきた発表会だが、まだ一部の参加ではあるが、人間関係学科が加わったことは大きな意義があり、今後検討課題になるであろう学部学科のアセスメントポリシーとして、拡大を目指していきたい。
- 4) 1) の講演会の前後から、人間関係学科ではファーストイヤーゼミの共通教材の検討が始まり、平成 26 年度からは「クリティカルラーニング」の教材採用の試みが決定した。そして平成 27 年度は、上記の 1) 3) 4) を継続して実施したが、平成 28 年度に本格的に開始する新たなカリキュラム改革にむけての始動期と重なり、改めて活字で報告する段階に至っていない。これらのうち 2) のアンケートが平成 26 年 2 月で終了し、その結果を詳しく報告していなかった。そこで、この結果に現在進行中のカリキュラム改革の視点で考察を加えたものを、平成 27 年度の FD 報告としたい。

このアンケートは平成 24 年度は後期の成績発表前後の 1 週間に S*map 上で行い、両学科とも 60 名程度の回答を得たが、その後、2 月の卒論発表会において参加者にアンケート用紙を配布し当日回収するという方法をとった。心理学科 3,4 年生が多いのはそのためである。ここで主に紹介する平成 26 年 2 月の実施のアンケートの有効回答数は人間関係学科 96、心理学科 226 となった。学年ごとの回答数は表 1 の通りである。過去のアンケートとは一部のデータで実施方法が異なってしまったが、統合して分析を行った。

本稿では設問ごとの学科別の集計結果に対する考察と、両学科共通項目についての考察部分（前年との比較など）を抜粋して報告する。

表 1 回答者の内訳

学年	人間関係学科	心理学科
1	24	22
2	35	31
3	22	97
4	15	76
計	96	226

【人間関係学科】

設問 1：1 年次のはじめにワークシートを書くことによって、自分の関心に沿った時間割作成ができましたか。

70% が役に立ったと回答する反面、10% がまったく役に立たなかったと回答した。この傾向は前年（平成 25 年 3 月の調査、以下同）とまったく同じであり、ワークシート作成を重視しない層が継続して存在することは注意すべき点である。

設問 2：1 年次の入門演習では、大学での学習方法（たとえば、情報収集の方法、レポートの善き方、発表の仕方など）が学べましたか。

84% が学べたと回答しており、大学での学び方の基礎を教える機会としては意味があったとみなされる。人間関係学科では平成 27 年度からクリティカルシンキングのテキストを取り入れたので、その相乗効果

も今後は期待される。

設問3：2年次の基礎演習では、自分の関心をケース・演習につなげる具体的なテーマへと発展させていくことができましたか。(1年生は回答する必要ありません)

85%の肯定的回答は前年と同じであり、基礎演習の役割が果たしていると考えられる。ただし回答の大半が「どちらかといえば」であり、この科目が入門演習的發展型なのか専門への橋渡し役なのか、その位置づけを明確にしていく必要があるかもしれない。

設問4：この学部の教養教育科目の授業（内容）についてどう思いますか。

82%が充実と評価しているが、これは前年よりも10%低い。現在、全学の教養教育の共通化の作業が進行している。やがては「本大学として提供する教養教育科目」として、同一科目であればどこで受講してもいいようになるはずだが、その中で本学部の教育目標に相応しい教養教育科目をいかに確保していくかが大きな問題になる。

設問5：この学部の外国語教育についてどう思いますか。

前年同様、この設問だけは他の設問の回答傾向と明確に異なる。すなわち充実と評価する回答50%に対して、否定的回答50%となっている。前年より肯定的回答が10%増えていることは評価できるが、学生が外国語教育に少なからず不満を抱いていることがわかる。ただしここで学生が評価する「充実」が何を意味しているかは定かではなく、語学教育の内容なのか、外国語選択の範囲なのか不明である。学部の教育目標とも、また将来計画とも密接に関連する大きな問題であるが、他学部の外国語教育の方向性や教養教育共通化の動きをみても、早急に検討すべき課題には違いない。

設問6：人間関係学科の専門科目の授業（内容）についてどう思いますか。

92%が充実と評価しており、新カリキュラムで科目を整理して明確化した効果が現れているとみなしたい。設問16、設問17と合わせて考察すると、回答者の大半が専門科目およびその関連性を十分理解して学んだと解釈できる。

設問7：ケースや演習についてどう思いますか。(1,2年生も回答して下さい)

設問6と同様、93%が評価しており、学部の特徴的な重要科目としてケースメソッドを位置づけている意味があったと思われる。

設問8：ケースや演習は、自分の関心にそったテーマを選べましたか。(1年生は回答する必要ありません)

自分の関心に沿ったテーマを選んだ（選べた）との回答が100%となっており、十分に評価できる。

設問9：ケースや演習は、自分の希望するクラスに入ることができましたか。(1年生は回答する必要ありません)

90%近くが希望クラスに入れたと回答していて、選抜方法やその結果にとくに問題はないと思われる。

設問10：ケースメソッドを受講して満足していますか。(3,4年生以外は回答する必要ありません)

満足度は100%で、ケースメソッドというこの学部独自の授業の意義と重要性が学生にも理解されていると評価できる。

設問11：卒論は、自分の関心に沿ったテーマを選びましたか。(4年生以外は回答する必要ありません)

ほぼ全員が関心のあるテーマを選んだと回答、卒論が決しておし着せの課題ではなく、主体的な研究成果

であることがわかる。卒論事前指導制度が役割を果たしているともとれる。

設問12：卒論をやり遂げて満足していますか。(4年生以外は回答する必要ありません)

前年は「満足」が45%（肯定的評価全体は82%）だったが、今回は73%（肯定的評価93%）に上昇している。前年は心理学科(88%)との差が卒論に対するコミットの意識が両学科でやや異なる状況を推測させると考察したが、データのすべてが発表会で得られたものと見なせるので、その効果の現れと考えてよいだろう。

設問13：卒論指導の授業や抄録集以外で、広く卒論の成果を発表する機会があった方がいいですか。

これは回答が分かれた。今回、人間関係学科でも一部で卒論発表会を行ったが、そうした機会を望むとする回答は45%、不要という回答が55%となった。抄録集を含めて日頃の卒論作成の過程で十分という意見なのか、これ以上の負担は嫌だという意見なのか判断はつきかねるが、両学科共通の設問12「卒論をやり遂げて満足していますか」を見ると、発表会を体験した人間関係学科の学生はすべて「あった方がよい」である。

設問14：3年次の卒論事前指導は、卒論のために有効だったと思いますか。(4年生以外は回答する必要ありません)

事前指導制度が始まって3年目となるが、肯定的評価は52%、否定的評価が48%との結果になった。ただし肯定的評価は前年よりも増えている。この制度によって、指導教員と指導生が4年次で初めて顔を合わせるというコンタクト上の問題点はほとんどなくなったと思われるが、この結果を見る限りではいまだ有効とはいえなかったことになる。

設問15：心理学科開講の専門科目についてどう思いますか。

新カリキュラムでは心理学科の専門科目を人間関係学科の発展科目に組み込んで、両学科の学びの壁を低くすることで、人間関係学科における心理学領域のウェイトをより高めることが狙いであった。その結果、満足が46%となり、目的が果たせたかどうかは不明である。前年同様「わからない」が30%程度もあった。今後のカリキュラム改革では心理学科開講の科目がより受講しやすくなる方向であるため、満足度が高まることを期待したい。

設問16：これまでに受講した科目間の関係がわかりましたか。

「ややよかったと思う」肯定的回答が68%あり、学生なりに科目の関連性を理解していることが推測される。あるいは学科説明やガイダンスなどの機会を通して、学科領域の説明が適切に伝わった可能性もある。これを見る限り、学生は主体的に科目の関連性を把握しているので、学部の科目設定やそのガイドが適切なものだったと評価できる。

設問17：人間関係学科は何を学ぶ学科なのか、自分なりにわかったと思いますか。

肯定的評価が74%だが、「わからない」が16%となった。人間関係学部、とくに人間関係学科は何を学ぶ学科かわかりにくいとの批判は依然としてあり、それを新カリキュラムでより明確にしたつもりであるのに、学生に伝わらない部分があると思われる。新入生オリエンテーションを始めとして理解を深める機会をもっと多くすべきなのであろう。また、わかったという学生がどんな学科像を「自分なりに」わかったのかは定かではなく、むしろそこが問題かもしれない。その分析も必要になろう。今後のカリキュラム改革では、科目群をいくつかのモジュールにまとめ、それに沿っての履修を指導するため、わかりやすさが増えることを期待したい。

設問18：人間関係学科での学びに満足していますか。

全体で 80% が満足と回答した。ただし、回答を寄せた学生はウェブ回答や発表会参加者という熱心な学生であるので、その意味で回答自体に偏りがあることは否定できない。学部教育の方向性は評価しつつも、「わからない」と否定的回答合わせて 20% の意味を十分に検討することが大切であろう。

設問19：シラパスについてどう思いますか。

今回、新規に追加した項目である。57% がシラパスをよく読んで授業選択したと回答し、39% がシラパスが役立ったと回答した。シラパス充実の効果はあったと思われる。

【心理学科】

設問 1：1 年次の入門演習では、大学での学習方法（たとえば、情報収集の方法、レポートの書き方、発表の仕方など）が学べましたか。

87% が学べたと回答、人間関係学科とほぼ同じ結果である。前年よりも否定的回答が減り、入門演習（現在のファーストイヤーゼミ）の意味が浸透していることが示された。

設問 2：2 年次の心理学実験では、心理学の基礎や方法論などについて理解することができましたか。

前年と同様、95% が理解できたと回答した。アクティブラーニングの事例として別途、心理学実験の授業内でも調査しているが、1 年を通して心理学研究の基礎をじっくり体験しながら心理学的思考を身に付け、レポートを書く訓練を繰り返す機会が有効に作用したと考えられる。

設問 3：この学部の教養教育科目の授業（内容）についてどう思いますか。

83% が充実と評価した。この値は人間関係学科と同じで、教養教育を充実させてきた効果が現れてきた可能性がある。

設問 4：この学部の外国語教育についてどう思いますか。

34% が肯定的、66% が否定的評価となった。やはり過半数以上の学生が外国語教育には何らかの不満をもっている実情が改めて示されたと言える。「どちらかといえば充実していない」が 42% と増加し「まったく充実していない」が減少したことが目立つ。この原因は外国語教育に絞った調査をすることできちんと把握する必要がある。

設問 5：心理学科の専門科目の講義（内容）についてどう思いますか。

前年とほとんど変わらずに 89% が肯定的評価で、これも人間関係学科と同様の傾向を示し、学部の専門教育が適切であると判断される。

設問 6：ケースや演習についてどう思いますか。

これも前年同様、90% が肯定的に回答しており、ケースあるいは演習型の少人数学習の評価が高いことがわかる。ただしやはり否定的回答が 10% 程度存在することは改めて調査すべきであろう。

設問 7：ケースメソッドや演習は、自分の関心にそったテーマを選びましたか。

肯定的回答が 91% で、各自の関心に合ったテーマが用意され、それらが適切に選択受講されている実情が伺える。

設問 8：ケースメソッドや演習は、自分が希望するクラスに入ることができましたか。

これも例年通りまったく問題ない回答傾向だが、前年同様に 8% ほど希望が叶わなかった学生がいること

は、やむを得ない事態とはいえ検討課題になる。

設問9：ケースメソッドを受講して満足していますか。

60% が満足、36% がやや満足で、ケースメソッドの配意が適切で、学生にとっても満足できる重要な科目であることが確認できる。

設問10：卒論は、自分の関心に沿ったテーマを選びましたか。(4年生以外は回答する必要ありません)

98% が肯定的回答で、自分の研究テーマが卒論として結実していることがわかる。発表会に積極的でない学生がいることは否定できないが、設問12の満足度と合わせると、ある種のアセスメントポリシーとして発表会まで含めて卒論指導をすることの重要性が評価できる。

設問11：卒論は、自分の希望するクラスに入ることができましたか。(4年生以外は回答する必要ありません)

88% が希望通りとの回答である。残りの部分については形式上やむをえないと思われるが、学生自身が胸を張って卒業研究できるような配慮が必要となるだろう。

設問12：卒論をやり遂げて満足していますか。(4年生以外は回答する必要ありません)

92% がやり遂げて満足と回答している。心理学科の卒論は実証研究が多く、データ収集やデータ分析の手間がかかり、そのうえ卒論発表会まであって、他学科に比べると負担が大きいとの意見や感想を聞くが、それだけの労力がこの満足感に反映していると見ていいだろう。自分の行った研究成果を適切にプレゼンすることの意味が理解されればなお好ましい。

設問13：ケース・演習や卒論のクラス選択に際しては、オフィス・アワーのような教員と接触する機会がもっとあった方がいいと思いますか。

83% が教員とのさらなる接触機会を求めている。オフィス・アワーはあまり適切に機能していないとの報告もある。心理学科ではワークシート方式をとらないが、学生指導の一環としてこの種の要望に応える相談機会は用意してもよいと思われる。

設問14：3年次から卒論に向けた授業があった方がいいと思いますか。

心理学科では現在は卒論事前指導制がなく、ケースや演習と卒論が形式上切り離されている。67% が「あった方がいい」、全体では90% 以上が卒論前段階の指導を希望しており、また人間関係学科で導入された事前指導が成功しているため、心理学科においても、今後のカリキュラム改革では、卒論事前指導を採用することになった。

設問15：人間関係学科の専門科目についてどう思いますか。

新カリキュラムでは両学科の垣根が低くなり、他学科専門科目が発展科目として受講できるようになった。人間関係学科同様、積極的ではないにしろ心理学科でも65% 近くがこれに満足傾向を示している。今後のカリキュラム改革では、より一層受講可能になるので、満足度の上昇を期待したい。

設問16：心理学科での学びに満足していますか。

心理学科での学びの満足度は79% で、サンプル数の違いはあるが人間関係学科とほとんど同率である。学科の教育方針が適切であったと評価される反面、やはり少数ながら「どちらでもない」以下の否定回答が20% もあることは、よりきめの細かい教育が必要となると思われる。

【共通設問】

回答傾向として両学科とも前年とほとんど同様の結果となった。新カリキュラムの効果は安定してきていると考えていいだろう。

「教養教育科目の満足度」「外国語教育の満足度」については当然のことながら両学科で大きな差は認められなかった。

「ケース、演習の充実度」については、前年と比べて「かなり充実」にかなり差があったが37% および38% と差がなくなった。

「ケースの満足度」にも両学科の差が認められた。「満足」は人間関係学科よりも心理学科の方が相変わらず高く、満足度の程度が異なっている。

「卒論は自分の関心に沿ったテーマを選んだか」では、前年は心理学科の方が明らかに高かったが、今回はほとんど差がなくなった。

「卒論をやりとげて満足しているか」でも同様の傾向が読み取れる。心理学科は「満足」と「やや満足」合計が89% であるのに対して、人間関係学科は82% で、やはり心理学科の値が高い。「満足」だけ見ると人間関係学科は73% で心理学科よりも高く、発表会の参加者の満足度が高いことがわかる。

前年と変わらず、心理学科の3,4年生間に大きな差は認められなかった。

以上の調査結果を、今後のカリキュラム改革に活かすとすれば、外国語教育における不満点の確認と改善、ケースメソッド・演習科目の質的充実、学科を越えた履修の自由度の増大、心理学科での卒論事前指導の導入、そして人間関係学科における卒論発表会の拡充が望まれるといえる。

文化情報学部 FD 活動報告

文化情報学科 FD 活動報告書

文化情報学科では平成 27 年度の FD 活動として、平成 27 年 12 月 19 日開催の第 1 回スクーリング、また、平成 28 年 3 月 12 日開催の第 2 回スクーリングに参加した高校 3 年生（平成 28 年度入学生）に対してアンケートを実施した。高校 3 年生が入学前に不安を感じていることを洗い出し、入学後に円滑な学生生活を送るために、スクーリングにおいて取り組むべき事柄を明らかにすることを目的とした。また、アンケートの設問は、平成 26 年度に実施したアンケートを踏襲しており、経年比較により実施したイベントの効果検証を行う。

第 1 回スクーリング

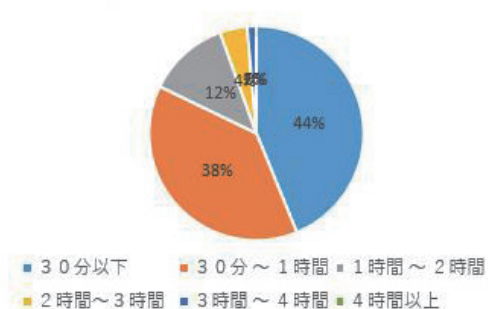
AO 選抜、併設校推薦、公募推薦の合格者が対象者である。第 1 回スクーリングの前半は「世界遺産と世界遺産検定」と題した講演、後半は「ブログソフトを使ったホームページの作成」と題した演習を実施した。アンケートの有効回答者は 73 人であった。アンケートは表 1 に示す 14 の設問で構成されている。ここでは、特徴的な傾向を示した設問 4、5、7、8 の結果を図 1 に示す。

表 1 アンケートの設問（第 1 回スクーリング）

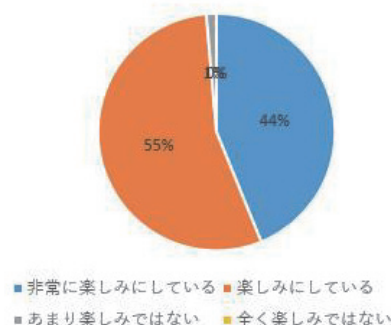
Q1	今回の第 1 回入学前スクーリングの時期について	Q8	入学後に不安だと考えていることは何ですか？（複数選択可）
Q2	本学の入学前スクーリングは 2 回ですが、その回数について	Q9	文化情報学部の入学者受け入れ方針を知っていますか？
Q3	大学合格後に、高校での学習に関してどのように変化しましたか？	Q10	『世界遺産と世界遺産検定』の内容についてどう感じましたか？
Q4	学習している時間は、1 日あたり、平均してどれくらいですか？	Q11	「世界遺産と世界遺産検定」についての感想を教えてください。
Q5	大学への入学を楽しみにしていますか？	Q12	「ブログソフト…の作成」の内容についてどう感じましたか？
Q6	入学後、大学生活で楽しみにしていることは何ですか？	Q13	「ブログソフト…の作成」についての感想を教えてください。
Q7	来春から大学生になるにあたって不安がありますか？	Q14	本日のスクーリングに参加した感想や今後の展望など

設問 3 は「30 分以下」が最多の 44% となった。昨年度のアンケートでは「30 分～1 時間」が最多だったことを考えると、高校生の学習時間は年々減少しているように思われる。設問 5 は“肯定的な回答”が 99% となり、大学での新しい生活に対する期待が大きいことが読み取れる。一方で、設問 7 で“不安を感じているとの回答”が 93% を占めていることが分かる。加えて、設問 8 では「授業についていけるかどうか」「レポートや課題について」に関して不安だと回答している。これらの結果は昨年度と同様の傾向である。このことから、入学生の大部分は、高等学校の受動的な学びから、大学での主体的な学びへの変化に戸惑いを感じているものの、何から手を付ければ良いのか分からないといった実態が浮かび上がる。スクーリングでは、これらの不安を解消するために、模擬授業などの受動的な体験に加え、レポート作成やプレゼンなどの主体的な体験を導入することが重要だと考える。

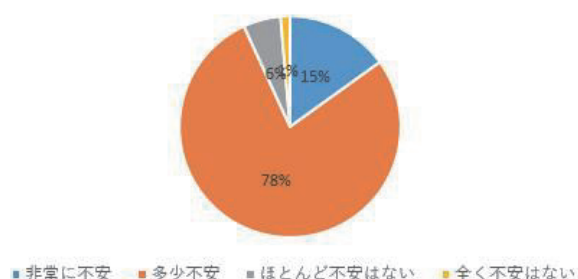
Q4. 大学合格後に、学習している時間は、1日あたり、平均してどれぐらいですか？



Q5. 大学への入学を楽しみにしていますか？



Q7. 来春から大学生になるにあたって不安がありますか？



Q8. 入学後に不安だと考えていることは何ですか？
(複数選択可)

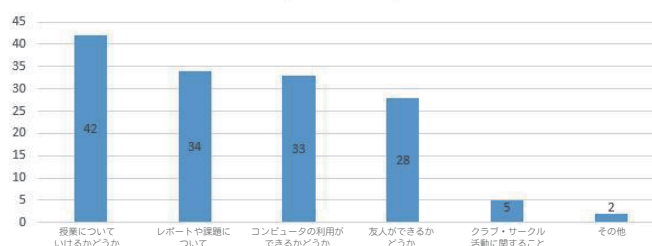


図1 アンケートの回答 (第1回スクーリング)

第2回スクーリング

第1回の対象者に加え一般入試の合格者が対象者となる。第2回スクーリングでは「教員・先輩との相談会」を中心に据え、高校生の不安を取り除くことを目的とした。アンケートの有効回答者は104人であった。アンケートの設問と結果を表2に示す。また、比較のため昨年度のアンケートの結果（有効回答者は109人）を表3に示す。

表2 アンケートの設問と回答 (平成27年度 第2回スクーリング)

下記項目に対する不安は変化しましたか。	不安はなくなった	一部不安が残る	不安なまま
①授業内容に関して	57.7%	41.3%	1.0%
②単位の修得に関して	44.2%	49.0%	6.7%
③部活動など学生生活に関して	62.5%	35.6%	1.9%
④アルバイトに関して	63.5%	33.7%	1.9%
⑤コンピュータの利用に関して	54.8%	41.3%	3.8%
⑥友人関係に関して	50.0%	46.2%	3.8%
⑦就職先など将来に関して	45.2%	46.2%	8.7%

表3 アンケートの設問と回答（平成26年度第2回スクーリング）

下記項目に対する不安は変化しましたか。	不安はなくなった	一部不安が残る	不安なまま
①授業内容に関して	31.2%	64.2%	4.6%
②単位の修得に関して	35.8%	57.8%	6.4%
③部活動など学生生活に関して	53.2%	42.2%	4.6%
④アルバイトに関して	63.3%	32.1%	3.7%
⑤コンピュータの利用に関して	37.6%	42.2%	19.3%
⑥友人関係に関して	38.5%	54.1%	7.3%
⑦就職先など将来に関して	29.4%	56.9%	13.8%

今年度は、教員・在学生との相談会に加え、教員の担当授業の紹介を組み入れたことから、「①授業内容に関して」の不安が大きく取り除かれたことがわかる。また、“情報学”を専門とする教員が複数参加したことから、「⑤コンピュータの利用に関して」に対する不安が解消されていることも特徴的である。全体的に結果は改善しており、今年度の取り組みは成功だったと考えられる。加えて、この企画の継続を希望する声は非常に多く、今後も継続して実施することが望まれる。

メディア情報学科 FD 活動報告書

メディア情報学科では平成 27 年度の FD 活動として、平成 27 年 12 月 19 日開催の第 1 回スクーリングおよび平成 27 年 3 月 12 日開催の第 2 回スクーリングに参加した高校 3 年生（平成 27 年度入学生）を対象に行ったアンケートで得られた 87 名の回答をもとに、今後の入学前教育や FD の課題を検討した。

高校での学習時間／得意・不得意科目

高校 3 年生になってからの学習時間は、入試前では「30 分以下」が 9 人「1 時間以下」が 17 人と、合わせて 26 人（前年 24 人）から、入試後は「30 分以下」が 29 人「1 時間以下」が 33 人と、合わせて 62 人（前年 46 人）に増加、約 6 割以上が入学後の学習時間が 1 時間以下と回答。入試後、学習習慣を維持できていない。入学前スクーリングだけでなく、入学後も継続的に課題を出すなどの、学習習慣を維持させる仕掛けの検討が必要である。

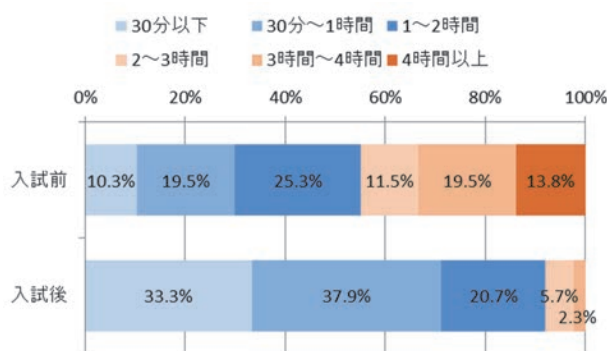


図 1-1 入試前後の学習時間推移

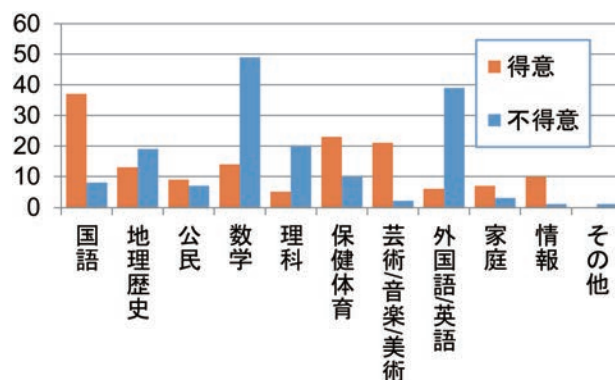


図 1-2 科目の得意・不得意

得意な科目は「国語」（37 人）、続いて「保健体育」（23 人）、「芸術／音楽／美術」（20 人）が上位である（図 1-2）。不得意な科目は「数学」（48 人）、「外国語／英語」（39 人）である。

大学入学への期待と不安

「大学への入学を楽しみにしているか」という問に対しては、「非常に楽しみ」（40.2%）と「楽しみ」（50.6%）を合わせると 9 割以上が楽しみと回答（図 2-1）。その内容は「友人との交流」（61 人）「大学での学び」57 人と、友人と学びに対しての期待が上位である。

一方、「大学生になるにあたって不安があるか」という問に対しては、「非常に不安」（26.4%）と「多少不安」（69.0%）と、ほとんどの参加者が不安を感じ（図 2-2）、その内容は「友人ができるかどうか」（49 人）、「授業についていけるかどうか」（29 人）、「レポートや課題について」（47 人）が上位である。

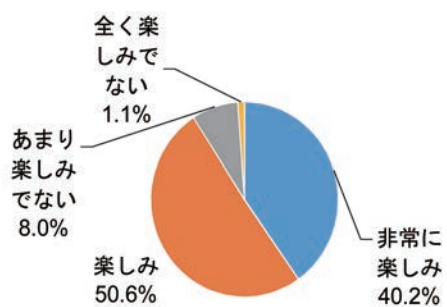


図 2-1 大学入学への期待 (N=87)

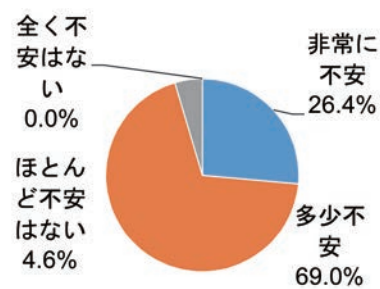


図 2-2 入学への不安 (N=87)

スクーリング内容に関するアンケート結果

昨年度、入学前後での学習習慣の改善やリメディアル教育の必要があるとの課題を受け、本年度はFD担当と初年次教育担当者がスクーリング内容を検討し、以下の目的に沿ってスクーリングを実施した。

- (1) 入学モチベーションの維持・向上のため、学科の教育内容への興味・関心を高める（第1回）
- (2) 本学科での学修のための学習習慣の定着、および、学生生活への適応を援助する（第1回、第2回）
- (3) 初年次教育への導入をはかる。オープンキャンパスとプレゼミ・研修合宿の中間に位置するものとみなし、両者をつなぐガイダンス的な内容を含める。

以下、各回で行った内容と、受講者の受け止め方（アンケートより）を示す。

第1回スクーリング：

AO 選抜、併設校推薦、指定校推薦、一般入試 A、公募推薦 I の合格者が対象者である（参加者 51 名）。

- ①学科説明：“もらったカリキュラムマップを見て大体のやりたいことは決めておこうと思った”等
- ②情報社会論入門：未来の「仕事」から考える（具体的な授業に興味を持つ）：“情報社会の歴史や今後について学ぶことができ、より授業に興味を湧いたので、今後の授業に向けて復習し、活かしていきたい”等
- ③学力把握（学習者自身が把握するために漢字・英語の問題解答と解説）：“漢検・英検の2級を大学1年生のうちにとれるように勉強していきたい”“合格してから勉強を前よりもしなくなってしまったけど、大学でも高校で学んだことは必要なんだと改めて感じた。”等
- ④図書リストを配布と課題提示（入学までに取り組んでほしい学習として）：“メディアに関する本をもっと読んで、入学前に少しでも知識をつけたい”等

第2回スクーリング：

第1回の対象者にセンター入試 A、公募推薦Ⅱを加えた合格者が対象である（参加者 87 名）。

- ①ガイダンス（入学後の履修の一部を知ることによって大学の学びと入学後の見通しを持つ）：“自主性が求められるということを実感した／必修科目を入れて、時間割をたてていくのが難しそう”等
- ②学力把握（学習者自身が学力を把握するため TOEIC Bridge レベルの問題解答と採点）：“もっと英語の勉強に力を入れようと思った”“力のなさを感じた。英語で映画をみたいと思った”等
- ③キャリアデザイン（大学4年間の学修を計画する意義を）：“自分が今までどうやって生きてきたのか、どういう自分なのかを再確認できた。これからどうやって生きて行くのか、計画を立てようと思った”等

- ④先輩から大学での過ごし方のアドバイス（8名の1~4年生の大学生活紹介）：“今とても不安で何をどうしたらよいのか悩んでいたが、先輩のお話を聞いてまず自分をよく見つめ直そうと強く思った”等
- この他、スクーリング2回目参加の学生の中には、1回目以降に立てた目標を実行している参加者もいた。“新聞を一面だけでも良いので目を通す／パソコン関連の検定を取ろうと勉強し、P検3級取得。MOSの勉強をしている／色の資格を取るために色の勉強を始めた／漢検2級の取得をしようと、高校の教材を復習している／スクーリングで配布されたお勧めの図書を、課題用に読んだ本以外もたくさん読んでいる／

大学生活への不安を取り除きつつ、大学の学修の見通しを持ち、国語・英語等の問題解答によって学習者自身が現状を把握し、推薦コンテンツの紹介により具体的な課題を意識させる、といった一連の流れは、入学後の初年次教育（ファーストイヤーゼミと基礎演習）の中でも継続することが重要である。

現代マネジメント学部 FD 活動報告

第2節：現代マネジメント学部 主任

吉田良生

その他：現代マネジメント学部 教務委員会 FD 委員 石井雅治

1. 現代マネジメント学部における FD 活動

現代マネジメント学部における独自の FD 活動は、①「学生生活評価アンケート」の実施、②「教育研究報告」の発行、③「授業改善のための教員による授業参観」から成る。なお、③は全学で行われた授業参観の、本学部における実施部分である。

平成 26 年度まではこれらに加え、現代マネジメント研究会(FD 講演会)が行われてきたが、平成 27 年度は予算が下りず実施できなかった。他は前年度と同様の内容が実施された。

本報告では、「教育研究報告書」に記載された、「平成 27 年度本学部教員の教育研究活動について」と「学生生活評価アンケート」の実施結果概要を報告する。

2. 平成 27 年度本学部教員の教育研究活動について

はじめに、今年度の本学部の教育活動をふりかえる。カリキュラムに関しては、昨年度からスタートした経営関連科目の充実を図った新カリキュラムが3年次まで進行し、学部の特徴が一層明確になってきた。また、教養教育科目が全学共通化されたことにより、他学部からの受講生が増え、学部横断的な授業が増えた。さらに本学部の上に設置された大学院現代マネジメント研究科も2年目を迎え、4名が修士論文を提出し、はじめて修士号を出すことができた。ただし、今年の入学者は1名にとどまったため、今後の募集活動に課題を残すことになった。

一方、イベントとしては、一昨年度、学部開設10周年記念事業として着手した就職壮行会、第3回ビジネスプラン・コンテストを今年度も引き続き実施することができた。特にビジネスプラン・コンテストについては、学内外から多数の応募があり、応募総数は高等学校の部、大学の部を合わせて54件に達した。応募数は昨年度に比べて減少したが、発表内容は昨年度に比べ一層レベルアップしており、本学部の特色ある取り組みとして、今後も継続できることを願いたい。また新たな取り組みとして「TOEIC コンペ」も実施した。4名の応募者の内2名が700点台の高得点に達しており、これを表彰した。今後も学生の外国語への関心を強めるように努めたい。

次に、研究活動を総括する。上記のような教育活動と併せて、今年度、本学部教員（教授10名准教授8名、講師3名の合計21名）による研究活動は、下表のように実施された。「著書・学術論文」が年々減少し、「特許・その他」「著書等」も昨年度に比べて減少している点が懸念される。外部資金の獲得を目指す全学的な動きを受け、本学部においても学外の研究助成金の獲得件数はほぼ昨年度並みの件数を維持している。研究活動を活性化させる必要があるとともに、専門分野による違いもあるであろうが、教員間の個人差が依然として大きい。

本学部では、学部の専門性を生かし、就職活動に強い学生を育成することを目指して、アクティブラーニングをはじめ、企業や行政等と連携した教育研究を展開している。今後も学部の総力を挙げて、その取り組みを充実させ、学部の独自性を堅持していきたい。

「教育研究報告」にみる学部教員の研究活動の推移（過去３年間を基本とする実績）

項 目	第 1 回教育研究報告 (平成 14 年度)	第 13 回教育研究報告 (平成 26 年度)	第 14 回教育研究報告 (平成 27 年度)
著 書・学 術 論 文	7.6 編	4.5 編	3.7 編
特 許・そ の 他	4.1 編	7.9 編	5.3 編
著 書 等 小 計	11.7 編	12.4 編	9.0 編
研究助成金(学内)	1.6 件	0.5 件	0.4 件
研究助成金(学外)	0.4 件	1.8 件	1.5 件
研究助成金 小 計	2.0 件	2.3 件	1.9 件
所 属 学 会	4.4 件	5.1 件	6.0 件
学 外 委 員	0.5 件	1.1 件	2.7 件

<注>

1. 表中の数字は教員 1 人当たりの数字である。
2. 「第 1 回教育研究報告（平成 14 年度）」は本学部の前身である生活社会学科の最終年度のものである。

3. 学生生活評価アンケート（第 14 回）：概 要

調査期間：

平成 27 年 12 月 4 日（金）～12 月 22 日（火）

調査対象：

椋山女学園大学現代マネジメント学部在学学生 701 名

（1 年生 193 名、2 年生 150 名、3 年生 174 名、4 年生 184 名）

回答数：561 名、回答率 80.0%

調査目的：

全学 FD（ファカルティ・デベロップメント：教員の教育能力の向上）活動の一環として、現代マネジメント学部の学生が本学での生活をどのように受け止めているかを調査した。今回も過去の 13 回とほぼ同じ項目について回答を求めた。本学部における教育と学生生活の質的向上のための基礎資料を残すことを目的として、この結果を記載する。

調査項目：

1. カリキュラム

カリキュラムの満足について、肯定的回答（よく当てはまる、または少し当てはまる）は、「語学科目」では 62.2% (58.6%)（以下、カッコ内の数字は前年度の結果、以下同様）、「情報科目」では 74.2% (66.9%)、「その他教養科目」では 77.8 (77.6%)、「専門科目」では 81.5 (80.5%) であった。前年よりわずかではあるが、増大している。

「情報科目」の到達度別クラスの導入について、肯定的回答は 69.2% (71.9%) であり、新年度初めのオリエンテーションの出席について、肯定的回答が 84.6% (88.9%) であった。単位制度の仕組みの理解について、肯定的回答が 76.9% (77.7%) であったのに対し、履修と成績評価に関する説明や手続きの分かりやすさについては、肯定的回答が 60.0% (61.6%) しかなかった。学生の手続ミスも多いので、今後の説明には、実施時期を含め何らかの改善が必要であろう。

自由記述回答では、外国語教育の充実を求める記述や、習得単位数の上限の緩和または撤廃を求める記述が多かった。

2. 大学の環境

環境（主に施設）の満足では、ハラスメント相談室、図書館、チケットサービスコーナー、トイレについて、肯定的回答は64~88%程度であった。特に大学の中核施設のひとつである図書館については、肯定的回答が88.0%（87.7%）であり、改装を終えた前年度とほぼ同じであった（改装前の前々年は77.6%）。一方、学生控室、売店、書店などについては、例年同様、評価は低い。

自由記述回答では、本年は、情報演習室のパソコンの旧さを指摘する記述が著しく多くあったことが特徴である。幸いなことに、平成28年度から新型と入れ替えが行なわれる。Wi-Fi環境の拡充を求める記述もあった。しかし、Wi-Fi環境は学生控え室等のみで整備するものとし、教室ではむしろ携帯電話の電波のジャミングを含め、ポータブルネット環境との遮断が必要ではないだろうか。例年同様、コンビニエンスストアやATMの設置を求める記述や、食堂の改善を求める記述が多く、学部棟の建物や設備などの改善を求める記述も少なくない。

3. 事務職員の窓口対応

学内の各窓口での対応について、肯定的回答は、前年同様、各部署73~77%程度であった。この数値を見ると比較的好印象を抱いている学生が多いが、自由記述回答を見ると、そのほとんどが不満の記述であり、その数も多い。学生への対応に引き続き留意する必要がある。

4. 他学部開放科目について

他学部の開放科目の参加について、肯定的回答が7割を超えており、関心を持っている学生の割合は比較的高い。

自由記述回答では、その受講への戸惑いもいづらか記述されている。各講義には学部による特長もあり、他学部の講義を、単に多様な学生に開放すればよいのかは、今後検討の余地があろう。

5. 学部間・他大学間との単位互換、所定の資格等の単位認定

単位互換や資格等の単位認定の希望について、肯定的回答は78.7%（83.7%）であったが、前年より5ポイント減少している。他学部開放科目と同様、単に他大学の講義を受講できればよいのかは、今後検討の余地があろう。

6. 就職指導

キャリアサポート課による就職指導を受けた学生では、就職指導について、肯定的回答は73.6%（71.3%）、同課が主催する各種講座についても、肯定的回答は76.1%（75.2%）であった。比較的好印象を抱いている学生が多い。

7. インターンシップ

インターンシップの有効性について、肯定的回答は85.7%（81.7%）であり、実際に参加した学生の満足について、肯定的回答は75.2%（69.5%）であった。前年に比較してやや高まっているようにも見えるが、前々年の結果（有効性84.0%、満足75.9%）と比較すると、変化はないと言えよう。

自由記述回答では、例年同様、インターンシップを卒業要件単位に求める記述が多い。

8. 奨学金制度

奨学金制度に対する学生の認知について、肯定的回答は37.5%（40.7%）であり、毎年下がっている（前々年41.6%）。より徹底した周知が必要であろう。奨学金制度の充実について、肯定的回答は71.1%であり、奨学金受給者の満足について、肯定的回答は73.1%（73.2%）であった。一定の成果をあげていると言える。

自由記述回答では、奨学金制度のより充実や、より詳しい説明を求める記述もある。

9. 学生生活等

例年同様、予習・復習は、合わせて週平均2時間程度しか行なわれていない。しかしながら、授業についていけることについて、肯定的回答は75.0%（71.1%）であり、多くの教員が極めて緩く単位認定することが常態化していることが分かる。逆に、課題の多い教員や試験の難しい教員のクラスは学生が集まらず閉講となる傾向があり、本学部が今後、高等教育機関としての体を維持しようとするのであれば、抜本的な対策を講ずる必要がある。

他方、アルバイトは週平均3.1日（3.2日）、16.3時間（17.5時間）行なわれている。従って、講義を加えた学習時間の週二十数時間程度（大学設置基準第21条第2項は、週六十数時間程度の学修が必要と規定）と比較すると、本学部の学生は平均的に、学生4：非正規労働者3の存在であることがわかる。この比率はここ十年程度ほとんど変わっていないので、このことへの対応姿勢を含め、今後の学部のあり方を検討する必要があるだろう。

10. 学生生活全般

学生生活全般に対する学生の満足について、肯定的回答は76.8%（78.4%）であり、比較的好印象を抱いている学生が多い。しかし、前々年の79.2%から継続して見ると、一貫して減少しており、今後検討の余地がある。

以上。

教育学部 FD 活動報告

事例：ケースメソッドⅠ「生活と文化の創造」

「文化的領域の拡充」と「共同体型ワークショップ」による事例分析の探求

磯部 錦司

1. 本科目の位置づけ

本学部では、「十分な指導力と人間的な魅力」にあふれた保育士・教員の養成をめざし、様々な全人的・教育活動が試みられている。また、「生涯に渡って学び、成長し続けられる保育士・教員の育成」を目的とし、その第一が人間力の育成であると考え、「知識、理論、実践」をつなげるカリキュラムを構成している。本科目「ケースメソッド」は、それまでの専門知識を基盤に理論と実践を紡ぐ役割として位置づけ、「人間的な魅力」と「学び続ける力」をより深める授業として期待される。各授業は、ⅠとⅡから構成され、各10クラスに分かれ各教員の専門性を軸とし主題が設定されている。例として、校外学習、子育て支援、障がい児とその親、ミュージカル、いのちの循環、デジタル化教育、自然環境、教育保育の課題、絵本探究、アウトリーチ活動、国際教育、数学的活動等がある。その中で本授業は「生活と文化創造」を主題に行っている。

2. 本授業の到達目標

- ・表現や文化の創造について人間理解を深める。(知識、理解)
- ・実践事例の収集と分析から子どもと文化について考察する。(思考、判断)
- ・演習と討議をとおり生活との関係を深める。(態度・志向)

3. 授業づくりのコンセプト

今日における大学教育の課題から、下記の視点をもとに授業を構想した。

○社会の一員として共同体の中で教育・保育を考えさせる

教育を社会的創造活動として捉え、その背景との関わりの中で子どもについての理解を深めていく。

○子どもとの直接的な関わりにおいてこそ本質が理解できる。

○生活背景との関わりから見なければ「本質的な子ども理解」はできない。

○自分たちの企画立案によって成果を感じながら授業を進めさせたい。

○理論と実践をつないでいく場の充足が保育者・教員養成教育において必要である。

4. 教授法とその特徴

<全体>

ワークショップ型の演習を基軸として講義、事例分析、討議、レポートにおいて下記の内容において行う。

○文化的共同体(NPO、行政、保育園、小学校)と連携した社会的創造活動において授業展開

○学生が企画、立案し、ファシリテーターとなってワークショップを実践

○その自分たちの実践事例を基にしたエピソード分析と討議

○子どもと直接に関わる参与観察からの資料収集によるエピソード分析

○子どもの生活背景とのつながりを基盤とした実践事例分析

<講義>

子どもと文化について、実際の活動を記録した映像をもとにそのプロセスの行為や作品の中に見られる内容を分析する。

○事例による実践分析方法の修得

人間の営みとしての表現や文化の「発生と創造」について見方を広げ、その取材や調査の方法や分析の仕方、実践の内容や視点等について修得する。

○自分たちの企画・立案した実践をもとにしたエピソード収集、分析

ワークショップの具体的な実践の内容や方法、映像や作品に見られる内容から、その背景にある子どもの心的な状況や、主題性、行為の意味、造形要素などを究明していくための視点とエピソード分析の方法について修得する。

<事例分析>

下記の2つの活動のどちらかを選択し、子どもと生活を共にしながら、実践を試み、その活動を基に記録を収集し検討する。子どもを対象とした2泊3日の中で事前にワークショップを計画し、子どもとの関わりを想定し準備する。その内容を現地で試み、活動後、エピソードを基に分析・討議を行う。また、子どもの作品展や交流をとおして、内容を深めていく。

○ワーク1（「子ども芸術村」、2泊3日、岐阜県飛騨山中）

NPOが主催するアート・キャンプと連携し、子ども50名、学生、音楽家、料理研究家、美術家が参加し、飛騨の山中の1軒家において2泊3日の生活を共にし、ファシリテーターとなって子どもに直接に関わりながら、衣食住を共にする。そこにおいて、ワークショップを企画し、子どもの実践記録を参与観察において収集し、エピソードから検討する。

- ・地域、作家、音楽家、料理研究家などプロと連携して行う。
- ・衣食住を共にしながら生活の中でリアルな実態から子ども理解と実践分析を行う。
- ・直接に子どもと関わりながら事例を収集する。

○ワーク2（「利賀村アートキャンプ」2泊3日、富山県南砺市利賀村）

山中を拠点にした宿泊を伴う3日の「アート・キャンプ」を核として実践する。企画立案したワークショップを村の子どもたちと直接に関わりながらファシリテーターとして実践する。また、村の方たちと交流しながら村の生活と文化に触れ、生活背景から理解しながら実践する。

- ・村の保育園、小学校で行うワークショップの内容と方法を企画、立案、実施
- ・村の方々との「人間関係と生活文化」をテーマにした交流活動
- ・生活背景から理解し3つのワークショップを実践しその記録を基に討議
- ・自然環境との関係を問うことをテーマに5つのワークショップを展開しその作品と記録を基に討議

5. 授業事例

<ワーク1からの事例分析>

森の自然環境の中にある1軒家を拠点に学生1人が小学生6名を担当し、子ども50名、作家、音楽家、料理研究家、教育研究者が生活を共にする。まず河原では遊びながら石を並べたり、森では隠れ家づくりをつくるなど居場所づくりから活動が始まっていく。夜の活動では森を散歩し星を観察しそれを絵にしていく。音を集める活動では、河や風の音を録音機で集めそれを絵にして表わすなど、衣食住を共にしながら学生は子どもの表現活動を援助し、それを参与観察しながらエピソードを収集していく。3日間の生活が終了した後、子どもたちに絵を描いてもらいその内容が生活とどう関わっているかを分析する。活動後、エピソードを討議しながら分析し、授業後レポートにまとめていく。学生は、自分が記録したエピソードと表現内容から、子ども理解と、人間の遊びの本質や生活の中に生まれる原初的な文化の発生等に気づきながら新たな発見を繰り返していく。

<ワーク2からの事例分析>

グループで企画、計画した立案を村の2つの保育園と小学校で実践し、実践記録とエピソードを収集し、子ども理解と子どもの表現について事後においてエピソードを交流し検討しながらまとめていく。小学校では村の全児童24名が参加し学生と共同で作品をつくっていく。担当学生がファシリテーターとなり、

他の学生は子どもと直接に関わりながら参与観察していく。活動のプロセスに着目し、子どもの活動をつぶさに記録に取り、活動後、その意味を考察し、全体で検討する。また、作品内容を分析し、実践者は、実践の立場から子どもと関わりを中心に、観察者は子どもの活動の記録から子どもの文化と活動について新たな考えや見方を広げていく。

6. 評価方法

- ・企画、立案、実施内容（指導計画の具体性、計画性、準備状況、実践内容について主体性、協力性を含め5段階で評価、全体の40%）
- ・エピソード分析の討議内容（観察の視点をもって記録を収集し、その視点から考察し、討議されているか。全体の30%）
- ・エピソード記録と考察のレポート（記録の分析をもとに考察が視点を的確にしておこなわれているか。全体の30%）

7. 成果

○「社会人として必要な基礎力」についてのアンケート

過去にアクティブラーニング調査のために東海地区統一で作成された17項目のアンケートを活用し自己評価を行った。特に、結果に成果が見られた項目は下記のようなものであった。

（①大変高まった ②やや高まった ③変わらない）

主体性（①54%、②46%、③0%）、働きかける力（①50%、②50%、③0%）

創造力（①58%、②38%、③4%）、傾聴力（①58%、②25%、③17%）、柔軟性（①54%、②42%、③4%）、状況把握力（①50%、②50%、③0%）、感受性（①79%、②17%、③4%）

特に、「創造力、傾聴力、感受性、主体性、働きかける力、況把握、実行力、課題発見力、計画力、専門知識、論理的思考力、批判力」では90%以上において高まった効果を自己評価において示している。

○事後の記述（「どの場面で、何を感じ、気づき、考えたかを記述せよ」）

特に多い内容は、「子どもの実態や自然、生活に関わる変化や気づき」であった。人や自然との具体的に直接的な相互作用によって他者への関わり方や感じ方が深まっている。その手段として芸術活動の役割を確認した。また、援助者として子どもに直接に関わることによって、意識や関わり方の内容が具体的なものとなっている。コミュニケーションに関わる自己変化の記述が多くある。

○事前・事後の「生命のイメージ」の絵画表現による比較

事前と比べ事後の学生が表した内容は、人や自然との関係を「総体的、統合的」「つながり」でとらえる表現が多くなっている。他者への関係性を「関係や状態」で表す表現が多く見られた。その内容から、他者の捉え方や環境への感じ方、考え方の広がり深まりを確認した。

[付記]

本実践は、下記の皆様の協力を得て行っている。

- ・「NPO法人 ぎふ・こども芸術村」
- ・「富山県南砺市利賀村」
- ・「富山県南砺市立利賀小学校、同ささゆり保育園」

[参考]

- ・磯部錦司・山崎真里「自然観と生命表現の変容—事例分析2（アート・キャンプ2013）」（『椋山女学園大学教育学部紀要』VOL.7、2014年、pp 31-44）
- ・磯部錦司「社会的創造活動としての造形活動—子どものアートが社会をつくる—」

(磯部錦司編著『造形表現・図画工作』建帛社、2015 年、pp.174-175)

・磯部錦司「地域社会とつくる」

(『保育のなかのアート－プロジェクト・アプローチの実践から－』小学館、2016 年、pp 147-150)

看護学部 FD 活動報告

竹井留美、前田節子、服部律子

看護学部のFD活動は、「アクションプラン 2015」に基づいた昨年度からの継続事項である授業改善、特に看護学教育における教育方法を中心に取り組んだ。

I. 学習支援に関する取り組み

臨地実習における効果的な学習支援に向け研修会を開催した。

1. 日時：平成 27 年 8 月 4 日（火）13:00~15:00
2. 場所：看護学部棟 102 教室
3. テーマ：「臨地実習における効果的な学習支援を考える」
4. プログラム：
 - 1) 「学生の特性と現状の問題・課題」についてワールドカフェ方式のディスカッション
 - 2) ワールドカフェ方式でのディスカッションを踏まえ「臨地実習指導を効果的に行うための工夫」についてグループ討議
 - 3) グループごとの発表
5. 出席者：33 名（出席率 82%）
6. 目的：看護学部における異なる領域の教員が、学生の特性と現状の問題・課題を共有し、臨地実習指導を効果的に行うための工夫を検討することを目的に研修を行った。
7. 結果・評価

「学生の特性と現状の問題・課題」および「臨地実習指導を効果的に行うための工夫」についてグループ討議、発表を行った。本学部は長期休暇中も含めて通年で実習が開講している事情から、教員全員参加でのFD研修が難しい状況である。しかしその中で日時を調整し、約8割強の参加者があった。

まず、臨地実習指導を通して感じている学生の課題や問題について共有し、次いでそれに対する臨地実習での工夫をワールドカフェ方式で検討した。ディスカッションの結果、学生の特性としては、愛想が良く、返事も良く、品が良く、真面目、素直、よい子、On Off の切り替えができるが、自立・自律していない、全体的に承認欲求があり、省エネタイプ、指示待ちの傾向にあるという意見が挙げられた。また、学生の問題・課題としては、学年の特色があるものの、学生は応用力が低く、表現力が弱い、課題への自覚がない、人や状況を受け入れられる枠が狭い、関係性の構築が苦手、表面的で論理的思考ができない、自己肯定感が低い、考える喜びの体験が少ないこと、目指す看護師像の具体化ができないことが課題として挙げられた。

続いて、臨地実習指導を効果的に行うための工夫について、学生の特性と現状の問題・課題を踏まえたグループディスカッションが行われた。ディスカッションの結果、自己の課題を自覚させること、実習中の自己の目標や行動の目的について言葉で表現させること、臨地実習に向けて学生の意欲が上がるようサポートしたうえで課題を提示すること、素直さや指示待ちの学生の特徴を活かし設定した課題を積極的に与えることにより学習量を増やすこと、学習課題を繰り返し与えるという意見が挙げられた。承認欲求に対しては評価を明確に伝え、特に自己肯定感が低い学生には褒めて育てることが大切であるものの、褒められることで軽率な行動をとらないよう褒め方を工夫することの必要性が確認された。応用力が低い学生に対しては、はじめは手取り足取り指導して学力の基礎をつくり、徐々に学生自身で考えていくことができるよう段階的な個別の関わりや、はじめに最終的な看護の方向性を示した上でプロセスにおける丁寧な指導を行うとよいなどの意見があった。相手の立場で考えられ

る学生に対しては、その面を伸ばす関わりが必要であり、相手の立場で考えることが苦手な学生に対しては、時間をかけて個別に考える時間を設ける工夫が挙げられた。さらに、人や状況を受け入れられる枠が狭い学生に対しては、発想力豊かな学生と実習グループを編成するなどの工夫を行い、学力だけでなく感性を高めるようなサポートが必要であるといった意見が挙げられた。また、学生に対し考える喜びや楽しさを体験できるような指導的関わりが重要であり、患者や臨床実習指導者からのポジティブな反応により看護へのモチベーションを上げ、臨床実習を成長する機会として、カンファレンス等を活用し達成感や成功体験が得られるような機会を作ることが指導の工夫として挙げられた。そして、学生が看護において「わかる」体験をすることで、看護は素敵であるといった内発的動機を高めることに繋がる指導の工夫が重要であるという意見があった。教員側における指導の姿勢として、教員がモデルを示すこと、教員の統一した指導を心がけること、臨床側との指導のバランスを図ること、学生の実習状況に関する情報を共有しながら指導にあたることができるよう臨床側とのコミュニケーションを図る指導上の工夫が考えられた。その他、学生の情報収集や学生の個性を教員間で共有し、実習グループ編成における工夫が必要であることの重要性などが確認された。

以上より、ワールドカフェ方式により、ディスカッションのメンバーが固定されることなく様々なメンバーとの討論や意見の共有が可能となったため、幅広い内容の意見が認められた。教員が捉える学生の特性や現状は多種多様であり、学生と教員の関わりの深さが現れたディスカッションとなった。また、学生の特性や現状における意見から、学生についてメンバーで共通認識が図られ、指導の工夫に対する具体的な意見に繋がった。

8. 次年度の課題

グループ討議で挙げられたように、学生は様々な特徴をもち、また、学年による特色があるため、一学年のなかで実習グループが組まれることを考慮し、学生個人の特徴とともに学年ごとに異なる特色を捉えることが、指導に当たるうえで必要である。グループ討議で話し合われた課題を克服するために、意見として挙げられた効果的な指導の工夫を実践し、工夫の効果について評価していく必要がある。

また、指導の工夫における効果を評価していくことにより、指導における改善点などを明確にし、更なる実践・評価を行う。

Ⅱ. 新任教員研修に関する取り組み

看護学部における教育に関する内容を理解し、本学部での指導に活かすことを目的に、新任教員には次のようなガイダンスに参加頂き、新任教員の研修を実施した。

1. ガイダンス内容

- 1) 学部・学科の理念・特色、大学学術研究倫理憲章、3つのポリシーについて
- 2) 学部棟をはじめとする施設について
- 3) 学部のカリキュラムについて
- 4) 授業内容・授業方法について
- 5) 学部事務関係について

2. 日程と研修内容

- 1) 4月1日 学部長との懇談、学部事務関係の説明 1-1)、2)、5)
- 2) 4月2日 新入生オリエンテーション・教員紹介 1-2)、3)、4)
- 3) 4月3日 入学式 1-1)
- 4) 4月4日 新入生オリエンテーション・指導学生との顔合わせ 1-3)、4)
- 5) 4月6日 「人間論」第1講義聴講 1-1)

3. 課題

次年度に向けた改善点を明確にするために、研修内容に対する新任教員からのアンケート調査などが必要と考える。

Ⅲ. クリッカーを用いた教育に関する取り組み

平成 26 年度 FD 委員ならびにクリッカーを用いて授業を行っている教員でクリッカーを用いた授業を行うことによる教育効果を評価した。また、クリッカーを用いた教育に関する取り組みは、本学看護学部紀要に発表した。

【概要】

クリッカーを使用することに対する学生の感想からクリッカー導入の効果を評価するとともに今後の課題を明らかにすることを目的に調査を行った。

看護学部の 1 年生から 3 年生を対象に、クリッカー使用の感想について質問紙調査とインタビュー調査を用い調査を行った。

結果として、クリッカーを「できるだけ使ってほしい」で“とてもそう思う”または“そう思う”と回答した者が 77.1% であった。「自分たちの理解度を教員にわかってもらえる」、「授業への関心が増した」、「積極的に授業に参加できるようになった」などで“とてもそう思う”または“そう思う”と回答した者が 80% を越えていた。また、[自ら参加している楽しさ]、[リアルタイムな感覚] など、クリッカーの使用に対する好意的な反応が認められた。

学生はクリッカーの使用を好意的に捉え、クリッカーを使用することによってもたらされる“ライブ感”が学生自身にとって楽しく、また積極的に授業に参加できるという効果が認められた。

Ⅳ. 看護学教育ワークショップ講演会への参加

1. 日時：平成 27 年 10 月 28 日（水）
2. 場所：千葉大学けやき会館
3. 参加者：服部律子
4. 内容：西村周三氏（一般社団法人 医療経済・社会保険協会 医療経済研究機構所長）「人口問題から読み解く 10 年後の課題と展望」Dr.Jane Barnsteiner の特別講演「Quality&Safety Education for Nurse(QSEN): Ensuring Quality of Clinical Education」参加者からは、以下の報告があった。両氏の講演は、超高齢化が進む中、病院から施設、自宅と居住場所が変わっても継続したケアが求められていること、人口問題を背景にますます看護の必要度は上がる一方、18 歳人口の減少に伴い看護に進む人数は激減し看護職の確保は難しくなること、新人看護職の働く場も病院とは限らず多様化してゆくという内容であった。どのような場で勤務することになってもその質と安全を維持・向上させながら看護実践が行えるように教育していくことが必須であり、それは科目レベルではなく、カリキュラム全体で漏れがないよう取り組む必要性を認識した。

総括

平成 27 年度の学部 FD 活動は、主に臨地実習における効果的な学習支援に向け研修、新任教員に対する研修、昨年度導入したクリッカーの導入効果、看護学教育ワークショップ講演会参加の評価を行った。

臨地実習は、学生にとって講義や演習での学びを統合し実践する学習の場である。教員による効果的な方法を検討することは重要であり、この研修を通して、教員組織全体で具体的検討ができたことは有意義であったと考える。新任教員研修は、本学看護学部における指導の体制について着任当初より共通認識を持つことにより、教員全体が同じ方向に向かっていくために必要である。次年度は、新任教員からの研修に対する意見を求める試みも必要と考える。また、クリッカー導入の評価では、その導入効果が認められたと考える。看護学教育ワークショップ講演会では、時代の変化や要請に柔軟に対応した教育内容、方法の必要性を再認識した。

それぞれの FD 活動における今後の課題を踏まえ、組織的な PDCA サイクルの確立に向けて取り組んでいく必要がある。

Ⅱ 全学 FD 小委員会の活動

- 1 授業アンケート小委員会の活動記録（平成 27 年度）
- 2 授業改善小委員会の活動記録
- 3 教員研修小委員会の活動記録（平成 27 年度）

Ⅱ. 1 授業アンケート小委員会の活動記録

(任期：平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 4 月 30 日)

平成 27 年度 授業評価アンケートの分析

授業アンケート小委員会

1. 授業評価アンケートの実施方法

平成 27 年度は、卒業研究や集中講義など受講者数が 10 名未満の科目を除く全ての後期開講科目から、教員毎に 2 科目以上の対象科目を選択し、授業評価アンケートを実施した（4 年間で各教員の全ての担当科目を網羅することを想定）。授業評価アンケートは、全学の教育の改善・充実を図ることを目的とし、全学 FD 委員会に設置された授業アンケート小委員会が授業評価アンケート結果の分析を担う。後期開講科目が対象となることから、表 1 に示すように平成 28 年 1 月 5 日（火）～1 月 23 日（土）までを実施期間、平成 27 年 12 月 17 日（木）～26 日（土）までを予備期間とした。

表 1 実施期間と予備期間

実施期間	平成 28 年 1 月 5 日(火)～1 月 23 日(土)
予備期間	平成 27 年 12 月 17 日(木)～26 日(土)

アンケートの設問項目は表 2～5 に示す 17 項目で構成されている。表 2 の設問 1～5 はシラバスに関する項目、表 3 の設問 6～14 は授業に関する項目、表 4 の設問 15、16 は総合評価に関する項目、表 5 の設問 17 はカリキュラムに関する項目である。また、設問 18～20 は「教員による独自の設問項目」として、教員が自由に設問を加えることが可能である。設問 17 を除き、受講者はこれらの設問に対し、「その通りである」、「どちらかといえばその通りである」、「どちらかといえばそうではない」、「そうではない」の 4 択で回答する。このうち、設問 2～4 は、設問 1 において「その通りである」または「どちらかといえばその通りである」のいずれかを選択した回答者が対象となる。これら 17 項目に加え、「1. この授業で、よかったと思う点がありましたら、記入してください。」「2. この授業で、改善すべき点がありましたら、記入してください。（授業内容、授業レベル、授業方法、授業形式、学生の姿勢、教員の言動など）」の 2 つの自由記述欄がアンケート用紙の裏面に設けられている。本稿では、設問 18～20 の教員独自の設問項目と、自由記述欄の回答は分析対象から除く。

表 2 シラバスに関する設問項目

設問 1	受講にあたって、この科目のシラバスを読んだ。
設問 2	（設問 1 でシラバスを読んだと答えた者のみ回答） この科目を履修登録する上で、シラバスの内容は役立った。
設問 3	（設問 1 でシラバスを読んだと答えた者のみ回答） このシラバスの主な内容を覚えている。あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認して受講している。
設問 4	（設問 1 でシラバスを読んだと答えた者のみ回答） この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。
設問 5	（設問 1 でシラバスを読んだと答えた者のみ回答） シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。

表3 授業に関する設問項目

設問 6	この授業は理解しやすかった。
設問 7	この授業の進度は適切であった。
設問 8	教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。
設問 9	板書や資料(配布資料・映像など)の提示方法は適切であった。
設問 10	教員の話し方(声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方)は適切であった。
設問 11	私語など、不真面目な学生に対する教員の対応は適切であった。
設問 12	授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。
設問 13	予習や復習など、自主的な学習を行なった。
設問 14	あなたから見て受講者は真面目に参加していた。

表4 総合評価に関する設問項目

設問 15	この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。
設問 16	総合的にみて、この授業は充実していた。

表5 カリキュラム・マップに関する設問項目

設問 17	この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください(複数選択可)。 ①知識・理解 ②思考・判断 ③態度・志向性 ④技能・表現
-------	--

授業評価アンケートの対象となった科目は全学部で686科目あり、その内、633科目において授業評価アンケートは実施された¹。各学部の実施率を表6にまとめる。対象科目数は学部毎で異なり、少人数で実施する演習科目が多く設置されている看護学部の対象科目数は34と他と比べ非常に少ない。この問題を解決するため、看護学部のみ柔軟な実施時期を認めるなどの議論が全学FD委員会委員会において進行中である。また、実施率は全体で92.3%であり、昨年度の95.8%から若干の減少となったものの、例年に比べて高い値となった。このため、今回報告する分析結果は十分な標本数を備えていると考えることができる。

表6 実施科目数及び実施率

学部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
生活科学部	73	64	87.7%	9
国際コミュニケーション学部	157	145	92.4%	12
人間関係学部	136	129	94.9%	7
文化情報学部	129	115	89.1%	14
現代マネジメント学部	70	65	92.9%	5
教育学部	87	82	94.3%	5
看護学部	34	33	97.1%	1
計	686	633	92.3%	53

¹ 平成26年度は1224科目を対象とし、1173科目で実施された。実施率は95.8%。

授業評価アンケートの実施後は、アンケート結果を教員にフィードバックすると共に、教員の自己点検・授業評価を行うための「リフレクション・ペーパー」の提出を依頼した。リフレクション・ペーパーの記述形式は特に定めないが、「1. 結果としてよかった点」「2. 改善されるべき点」「3. 今後の改善点、その他」の3項目を中心に記述することとした。各学部のリフレクション・ペーパーの提出率を表7にまとめる。全体の提出率は68.2%と比較的高く、本学の教員の授業改善に向けた積極的な姿勢が読み取れる。しかし、昨年度の提出率75.4%と比較すると今年度は約7%減少している。来年度は、リフレクション・ペーパーをFD活動の一環に位置付け、教員間での認識を促すとともに、提出率の向上を目指す必要がある。

表7 リフレクション・ペーパーの提出率（平成28年3月22日現在）

学部	アンケート 実施科目数	リフレクション・ペーパー 提出科目数	リフレクション・ペーパー 提出率
生活科学部	64	46	71.9%
国際コミュニケーション学部	145	91	62.8%
人間関係学部	129	83	64.3%
文化情報学部	115	83	72.2%
現代マネジメント学部	65	44	67.7%
教育学部	82	61	74.4%
看護学部	33	24	72.7%
計	633	432	68.2%

また、リフレクション・ペーパーの提出依頼と同時に、授業アンケート調査実施に関する意見書の提出も依頼した。意見書の提出状況を表8に示す。提出された意見書の総数は75であった。昨年の122に比べて、約50も減少しており、授業アンケートの改善に対する教員の関心が薄れていることが読み取れる。これらの意見書を次年度のアンケートに反映させることで教員の関心を高め、本学の今後のFD活動に活かしていくことが強く求められる。

表8 意見書の提出数（平成28年3月22日現在）

年度	提出数
平成27年度後期	75
平成26年度前期	122
平成25年度前期	127
平成23年度前期	120
平成22年度前期	112
平成21年度後期	82
平成20年度前期	87

2. 授業評価アンケートの分析

授業評価アンケートの結果を分析するに当たり、双光エシックス株式会社に報告書用のグラフ作成を委託した。表9に示す5類のデータを分析対象とした。設問に無回答であった場合は「無回答」として集計に加えることとした。また、設問2~5は、設問1に「その通りである」または「どちらかといえばその通りである」のいずれかを選択した場合のみ集計に加えた。

表9 分析対象とグラフの種類

分析対象	グラフの種類
設問項目の回答数の割合	100% 積み上げ横棒
設問項目の平均スコア	レーダーチャート
設問15と他の設問との相関係数	横棒
設問16と他の設問との相関係数	横棒
設問17の回答割合	100% 積み上げ横棒

2.1 設問項目の回答数の割合

設問1~16における回答数の割合を100% 積み上げ横棒グラフで表す。各グラフは科目区分（講義、演習、語学、実験実習）に分けて集計されている。図1~16に示すグラフは全科目を母集団としたときの回答数の割合である。

図1~5はシラバスに関する設問1~5の結果である。設問1では、講義と実験実習において、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」という肯定的な回答の割合が高く、一方、語学においては低いことがわかる。語学は必修であることが多く、加えて、同一科目が複数クラス設置される場合はテキストが統一されているケースも多いため、シラバスを参考としない学生も多いようである。設問2では、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」を合わせれば約9割を占めており、履修する科目を決める上で、シラバスは重要な役割を果たしていることが読み取れる。一方、設問3では、肯定的な回答は5割程度に留まった。履修登録時にシラバスを参考にするものの、授業の度にシラバスを確認することは決して多くないようである。また、一部の学部では、毎日（月曜～金曜）、ネイティブスピーカーから英語を学ぶ「毎日英語」が実施されており、その都度、学生がシラバスを確認することは困難であることが予想される。設問4では、肯定的な回答が大部分を占めているが、特に「演習」「語学」はシラバスに記載された計画に沿って授業が進められる傾向が強い。一方で、「講義」「実験実習」はシラバスに記載された計画から外れることも多いようである。実験実習においては、その性質上、受講者の進捗がばらつくことが予想されるため、教員が学生の修得状況に合わせ柔軟に計画を変更していることが考えられる。設問5においても、肯定的な回答で9割を占めており、特に「演習」「実験実習」での評価が高い。「演習」や「実験実習」は、その性質上、体験的な要素を含むことが多いため、学生の到達感もそれに応じて高くなることが理由と考えられる。今後も全学FD委員会を中心にシラバスの充実に取り組むことが重要だと思われる。

図6~14は授業に関する設問6~14の結果である。設問6は難易度、設問7は進行速度に関する項目である。いずれの設問においても、他の科目区分に比べ、「演習」と「実験実習」は高い評価を得る結果となった。設問5で言及した到達目標においても「演習」「実験実習」は評価が高く、ここでの結果に係

していると考えられる。全体的には、肯定的な回答が大部分を占めており、本学教員が学生の目線に合わせた授業を心がけていることが読み取れる。設問 8~12 は授業における教員の振る舞いに関する項目である。いずれの設問においても、他の科目区分に比べ、「講義」の評価が低い結果となった。「講義」は 100 人を超える大規模教室での授業も多く、授業の進捗のコントロールが困難であることが理由と考えられる。特に、設問 11 の私語への対応に関しては、「講義」の「その通りである」と回答した割合は 40.8% と非常に低い。教員の監視が十分に行き届かない状況での、不真面目な学生への対応は今後の課題と考えられる。一方で、「実験実習」は少人数での授業が中心となるため、設問 10 の教員の話し方や設問 11 の私語への対応で非常に高い評価を得ている。これは、この実情を裏付ける証拠である。設問 13、14 は授業における学生の振る舞いに関する項目である。設問 13 の結果から、予習・復習などの自主的な学習が不十分と思われる学生が 3~4 割存在することが読み取れる。特に「講義」においてその割合は顕著であり、「どちらかといえばそうではない」が 36.8%、「そうではない」が 17.8% となっており、合わせると 5 割を超える高い値を示した。アクティブ・ラーニングと呼ばれる学生主体の授業スタイルを導入するなど、受講者に積極的な学習を促すための仕掛けが必要であると感じる。また、設問 14 においては、全体的に肯定的な回答が多いが、やはり「講義」のみが、他と科目区分と比べ肯定的な回答が少ないことが気にかかる。大規模講義の弊害がここにも現れていると思われる。

図 15 は授業を受けたことによって生じた学生の意識の変化に関する設問 15 の結果である。「演習」「実験実習」において「その通りである」と回答した学生が約 5 割存在するのに対し、「講義」「語学」は 4 割程度に留まった。少人数で実施することが多い「演習」「実験実習」では、発表や討論など受講者の積極的な参加を要するため、受講者自ら考え、新たなことに気付く機会が多いことが理由と考えられる。一方で、「講義」は教員主導で受講者は受身の形態になりやすい。アクティブ・ラーニングなどの試みを教員も積極的に導入すべきと考えられる。また、「語学」においては、「講義」とは異なり、学生主導の形態ではあるものの、新たな気付きに至ることは少ないようである。

図 16 は学生の達成率に関する設問 16 の結果である。全体的には肯定的な回答が約 9 割に達しており、シラバスに記載された目標への達成を受講者は感じていることが分かる。一方で、「講義」は他の科目区分と比べ、「その通りである」と回答した割合が少なく 40.4% に留まった。大規模授業などにおいて、学生の習得度に差が生じることは、授業の性質上、致し方ないと思われる。

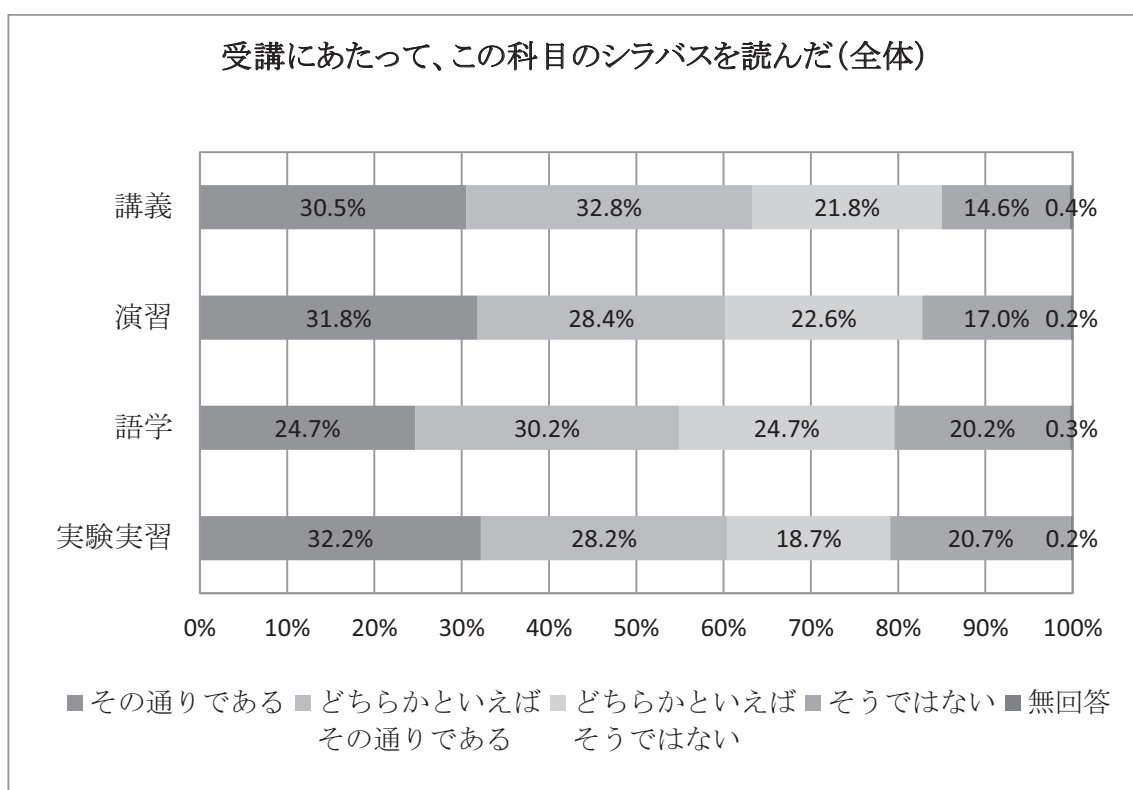


図1 設問1の回答数の割合(全科目)

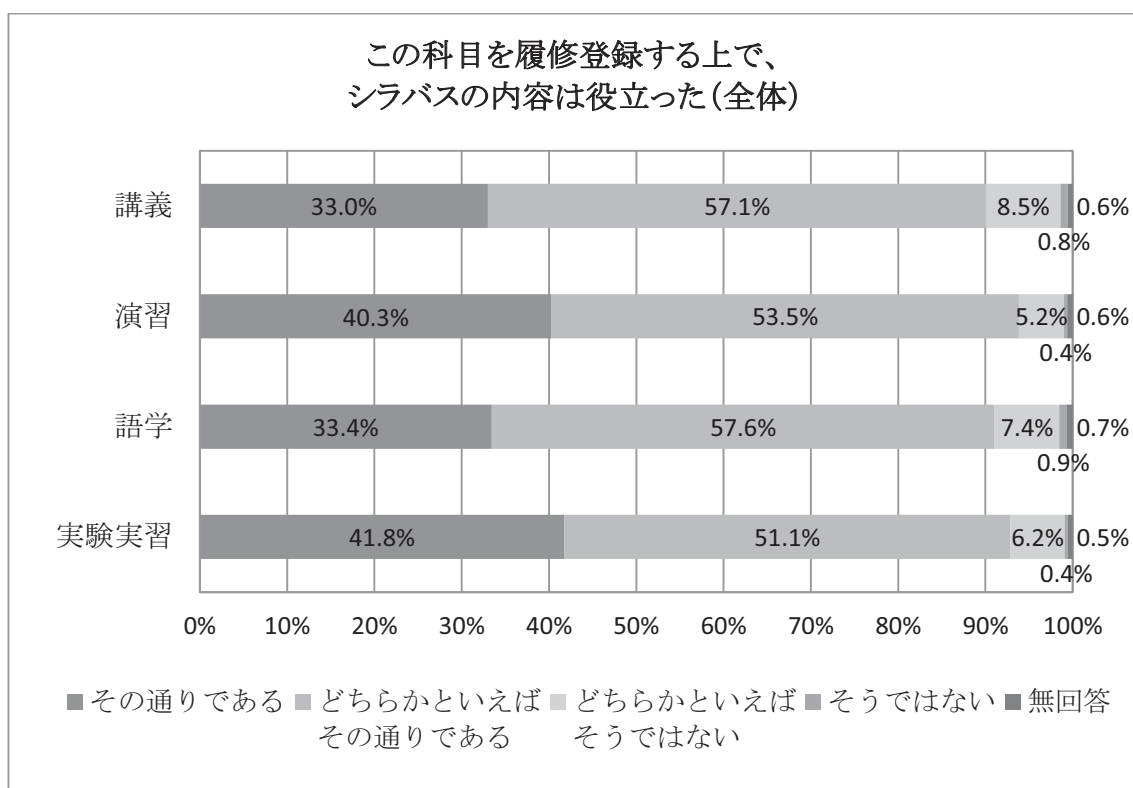


図2 設問2の回答数の割合(全科目)

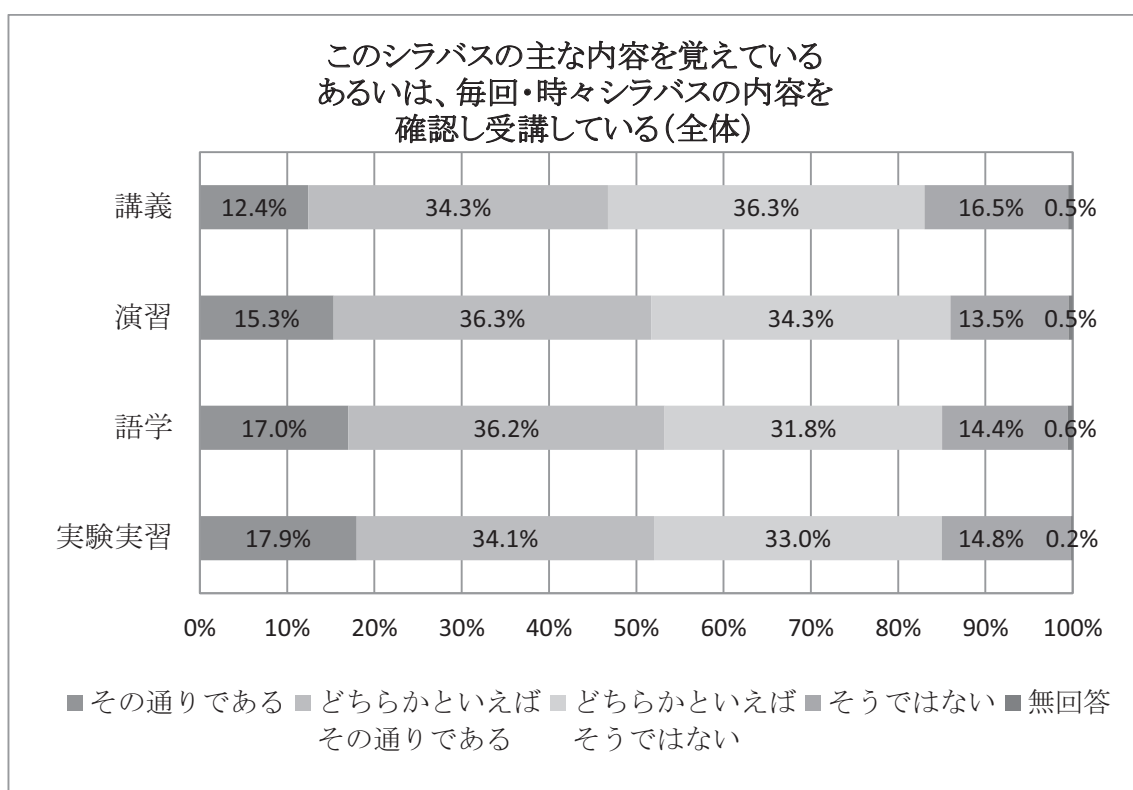


図3 設問3の回答数の割合(全科目)

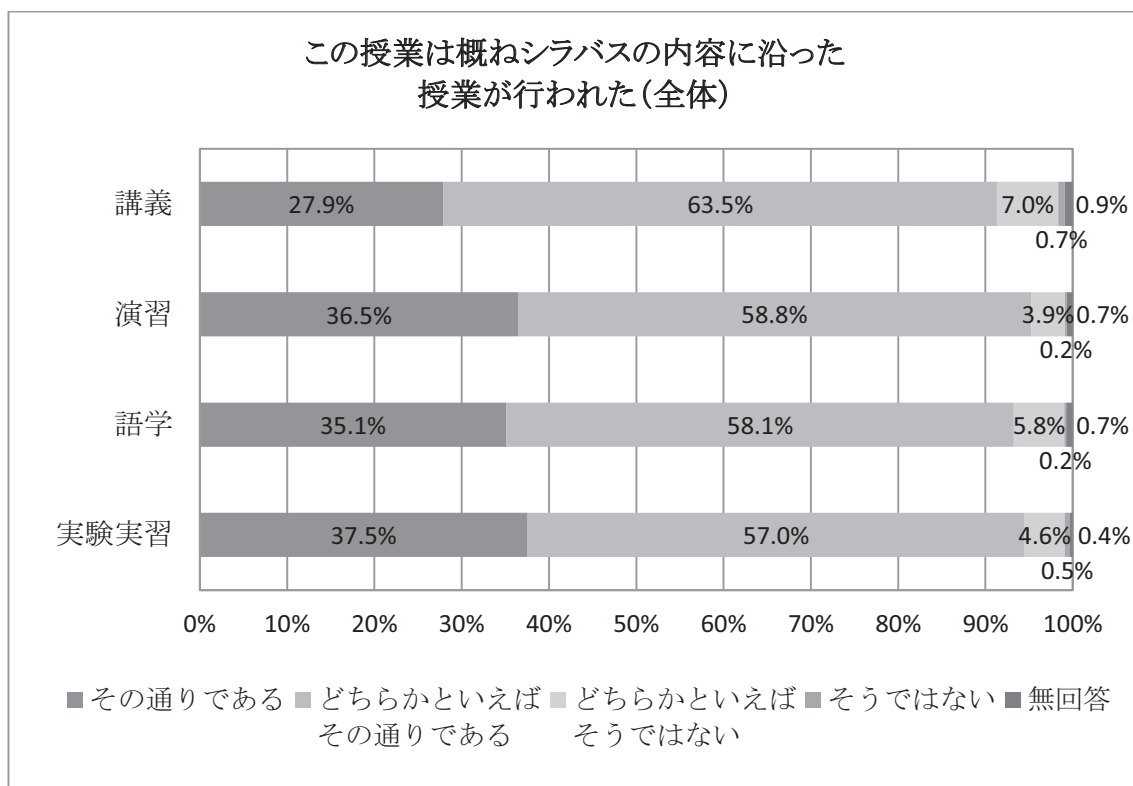


図4 設問4の回答数の割合(全科目)

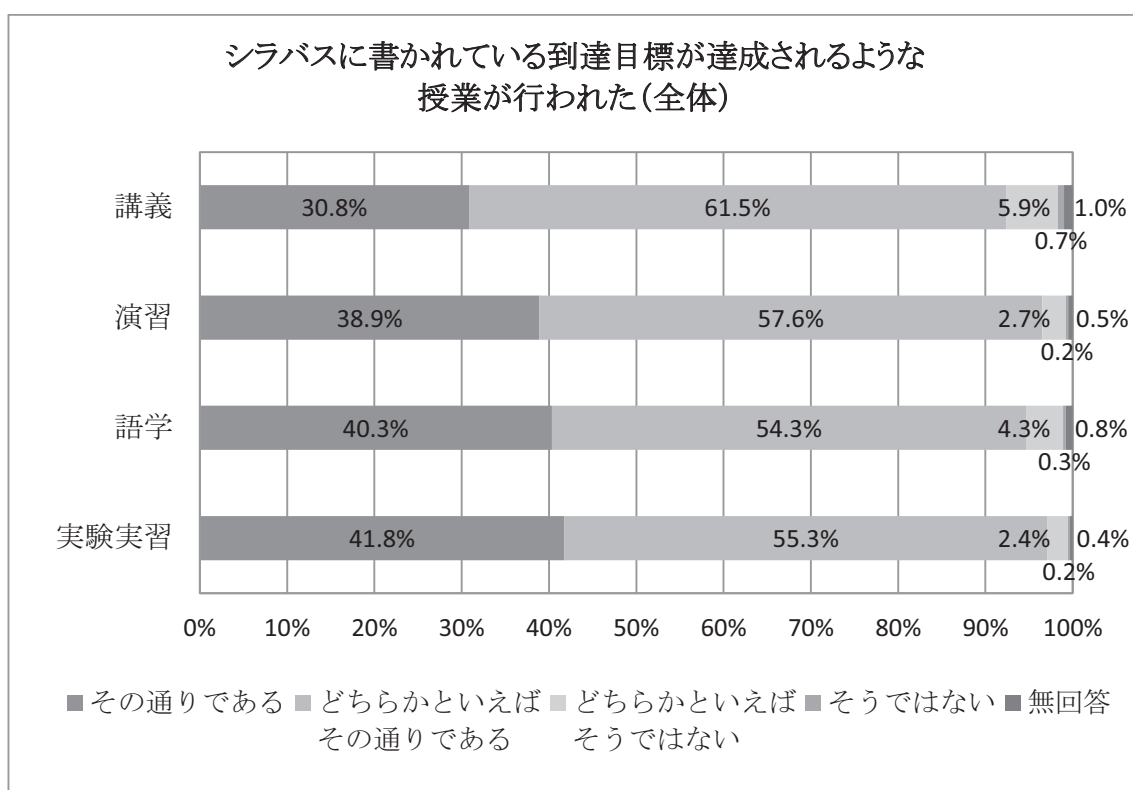


図5 設問5の回答数の割合(全科目)

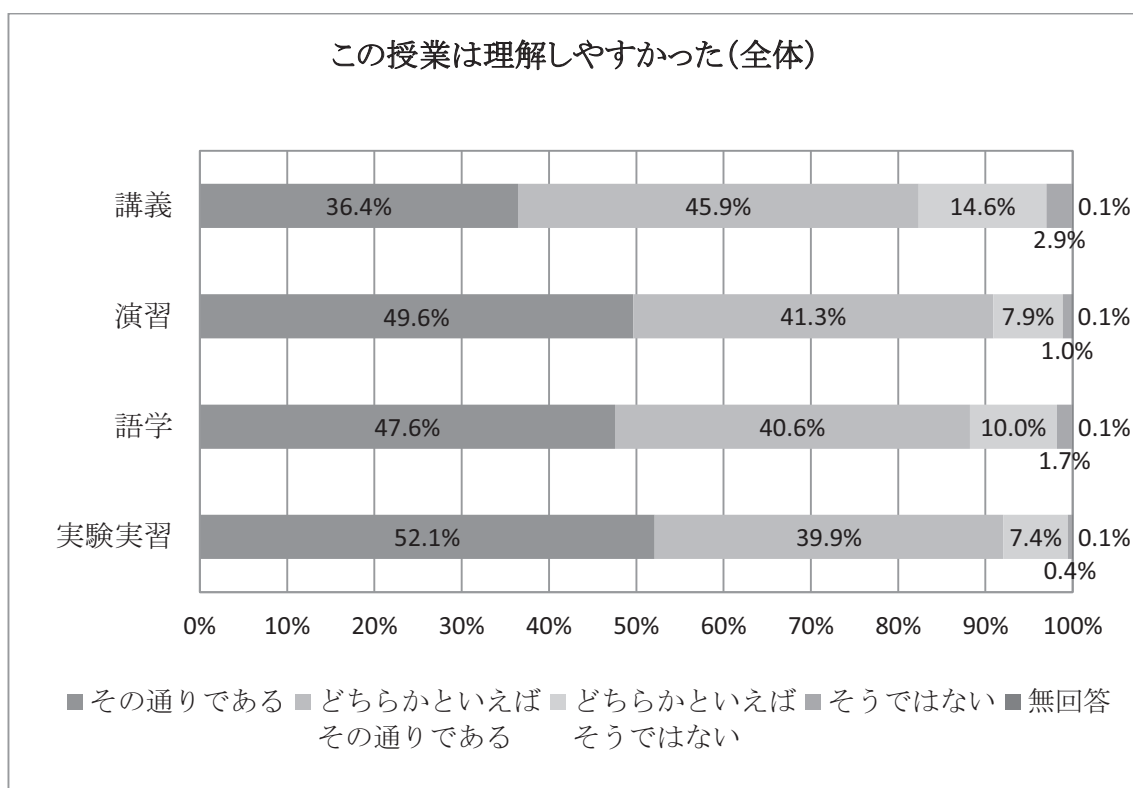


図6 設問6の回答数の割合(全科目)

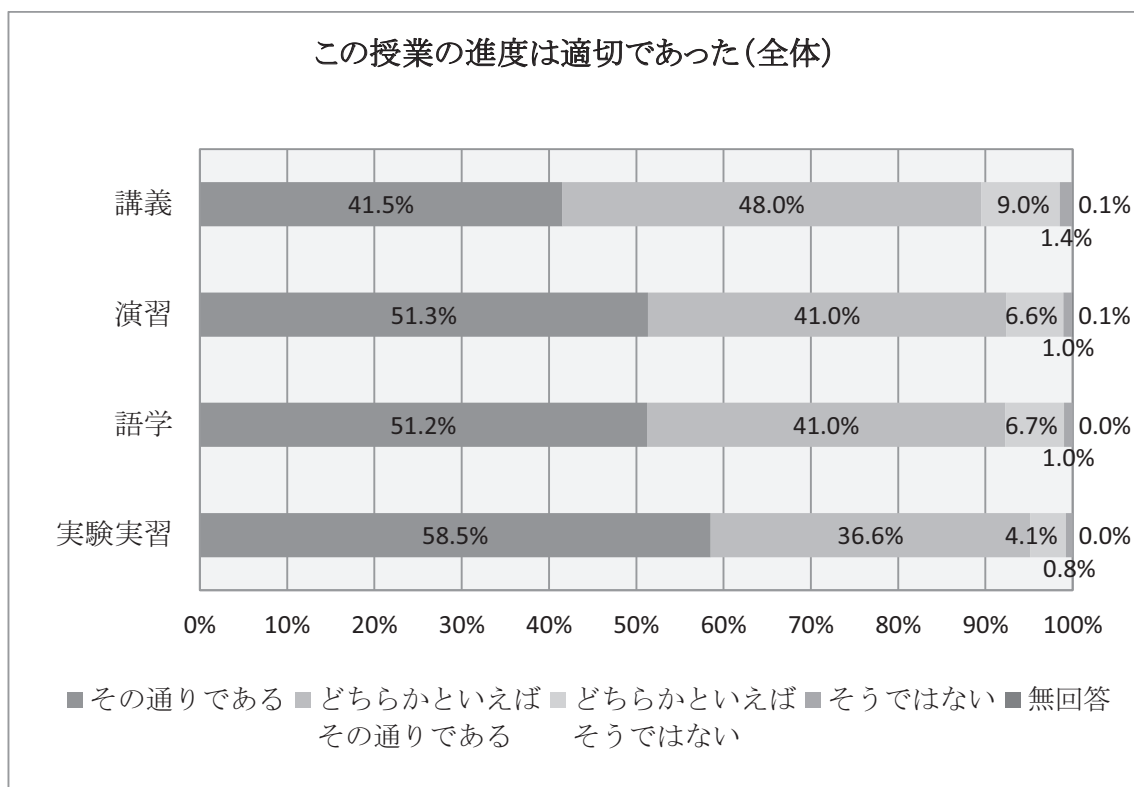


図7 設問7の回答数の割合(全科目)

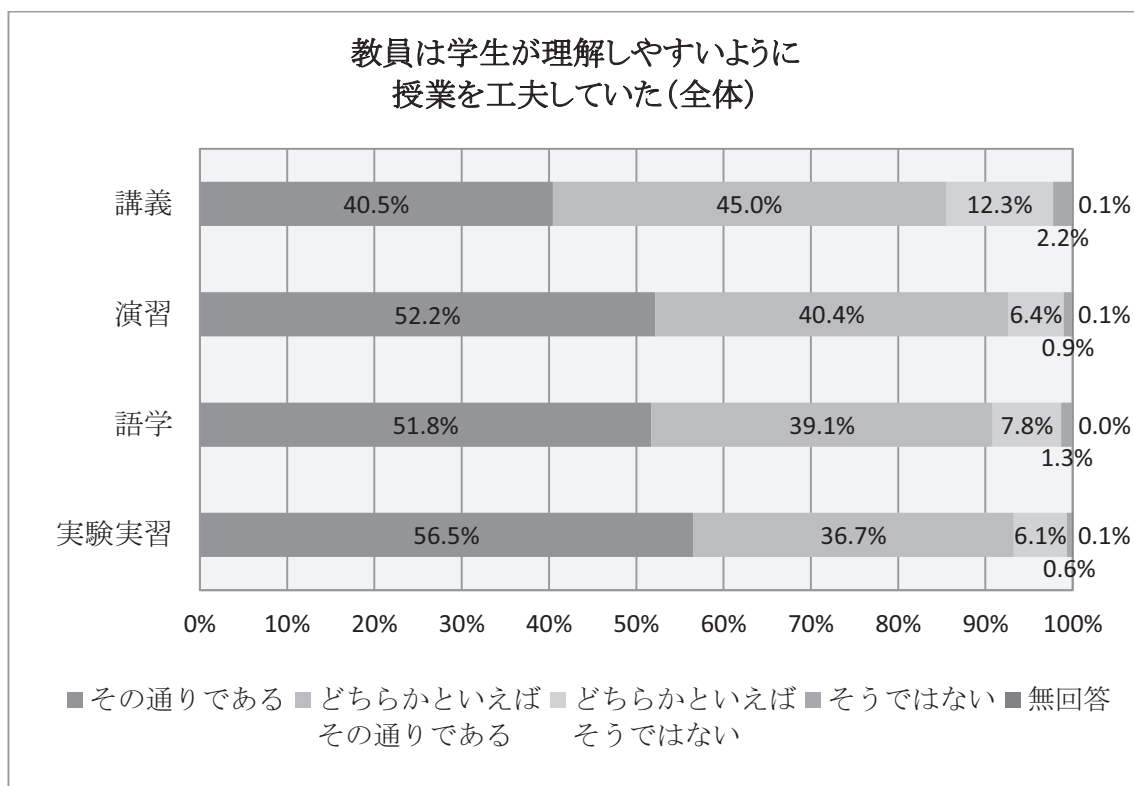


図8 設問8の回答数の割合(全科目)

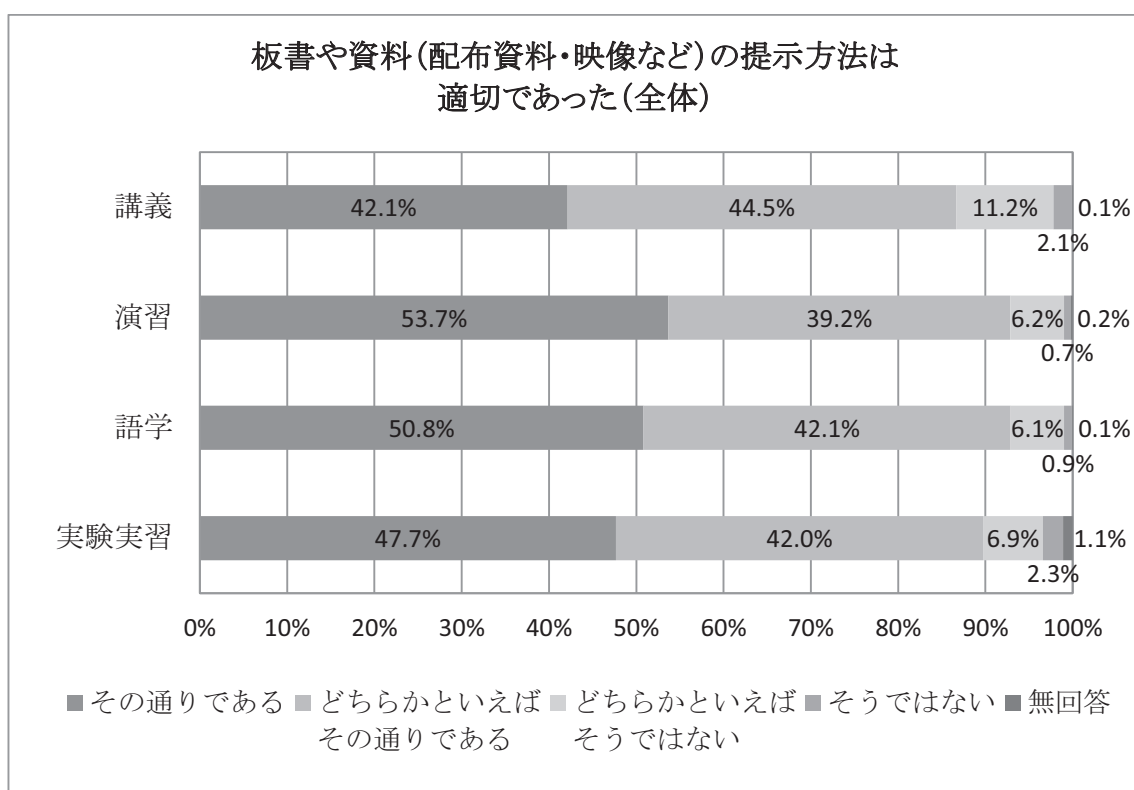


図 9 設問 9 の回答数の割合 (全科目)

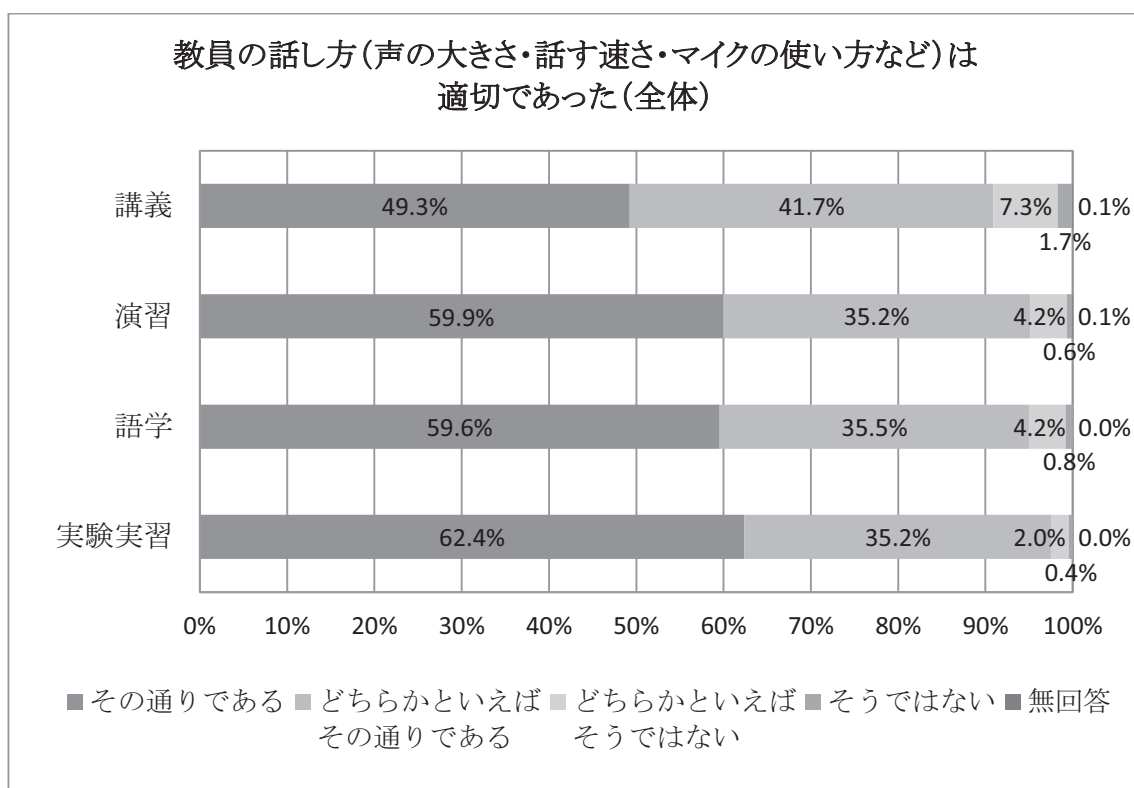


図 10 設問 10 の回答数の割合 (全科目)

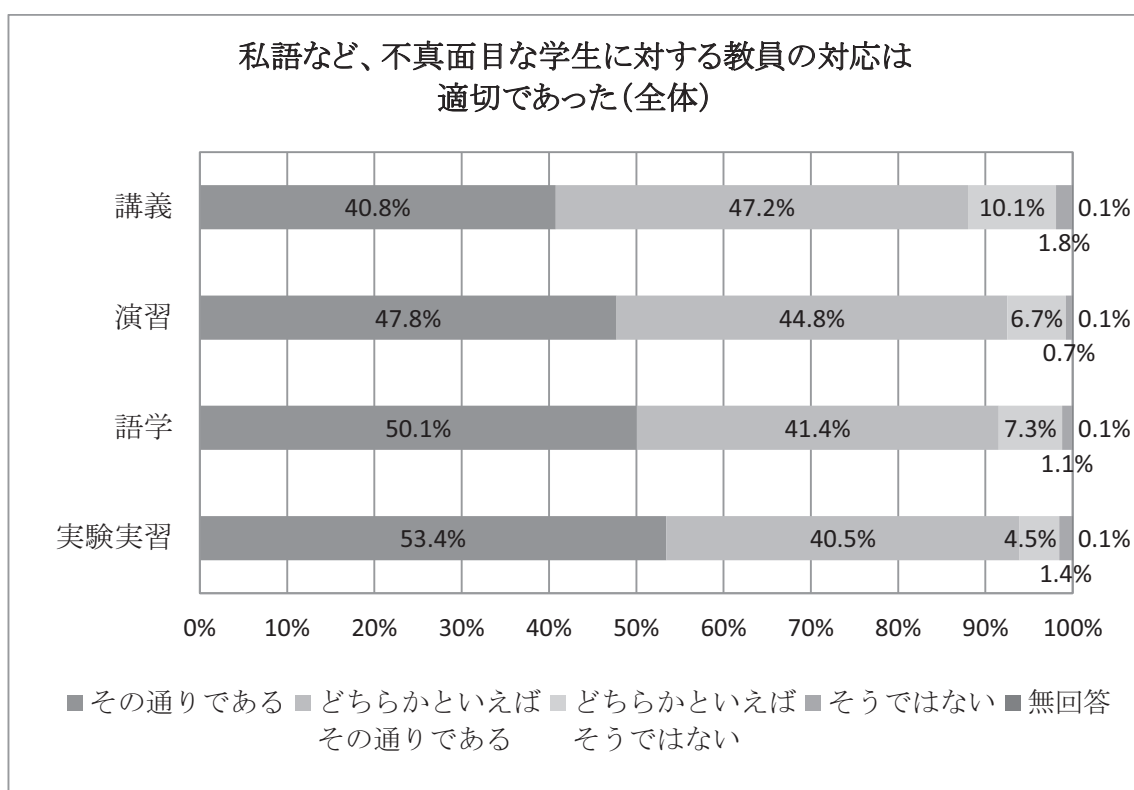


図 1 1 設問 1 1 の回答数の割合 (全科目)

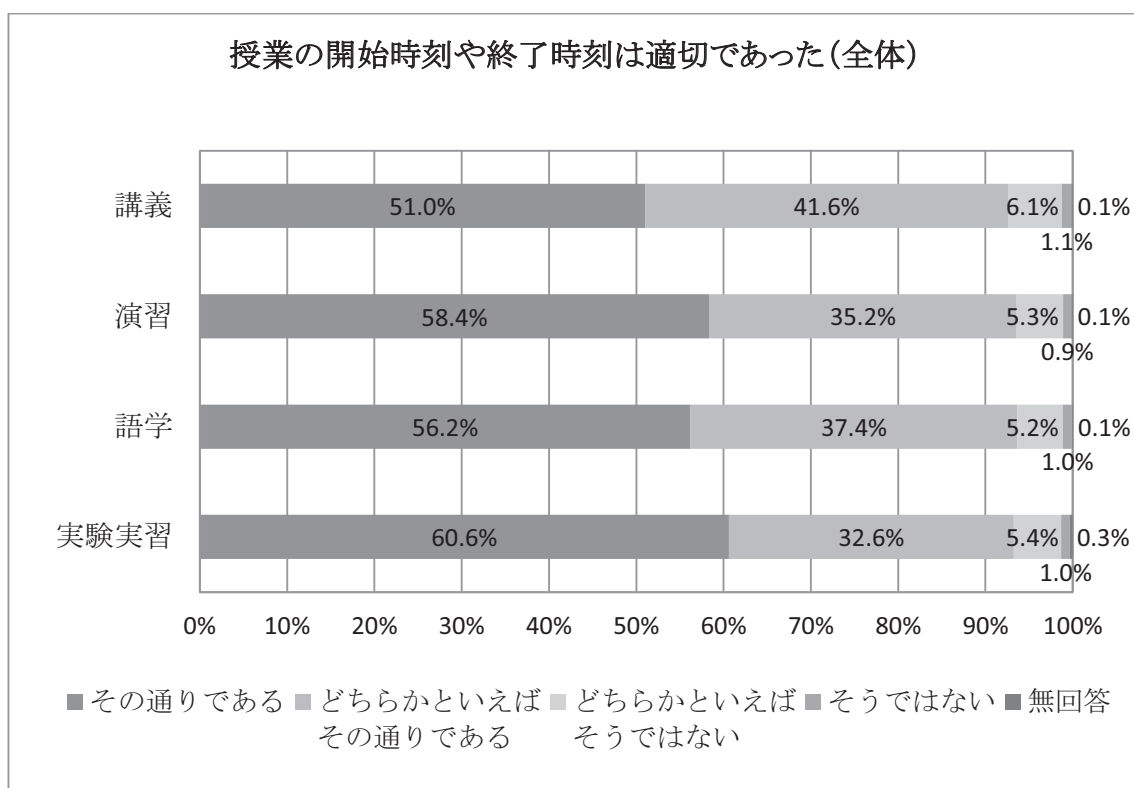


図 1 2 設問 1 2 の回答数の割合 (全科目)

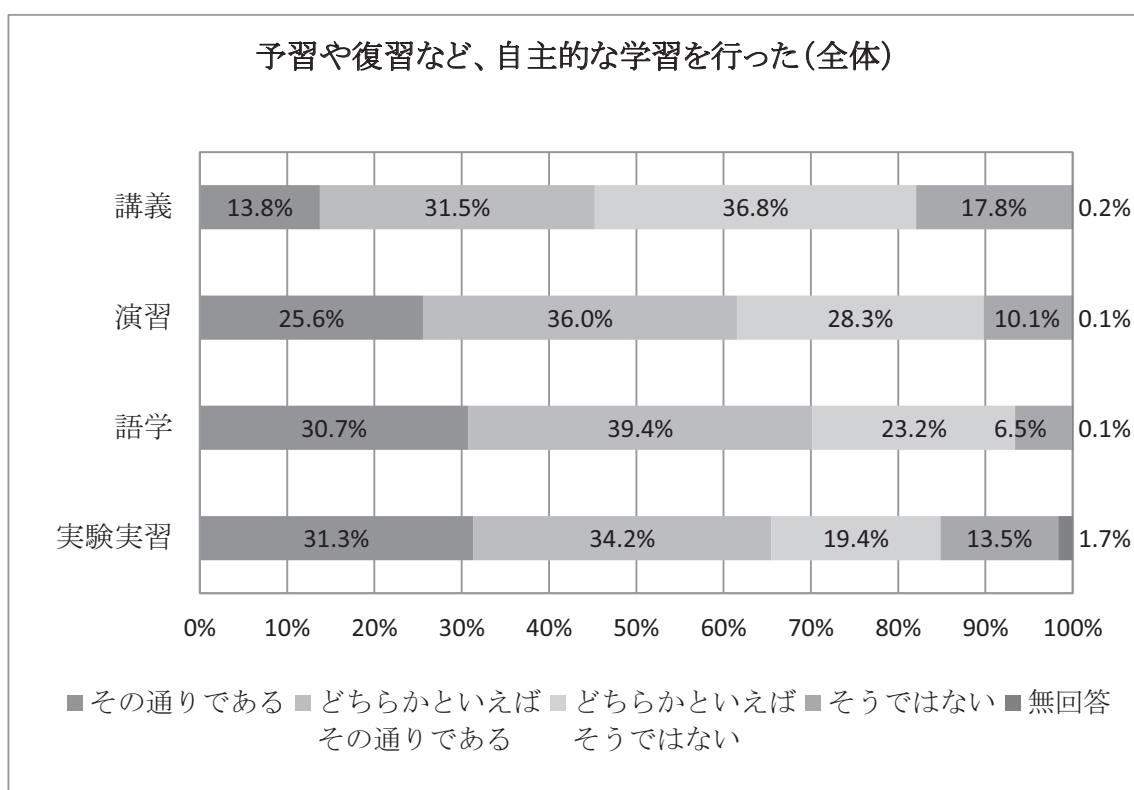


図 1 3 設問 1 3 の回答数の割合 (全科目)

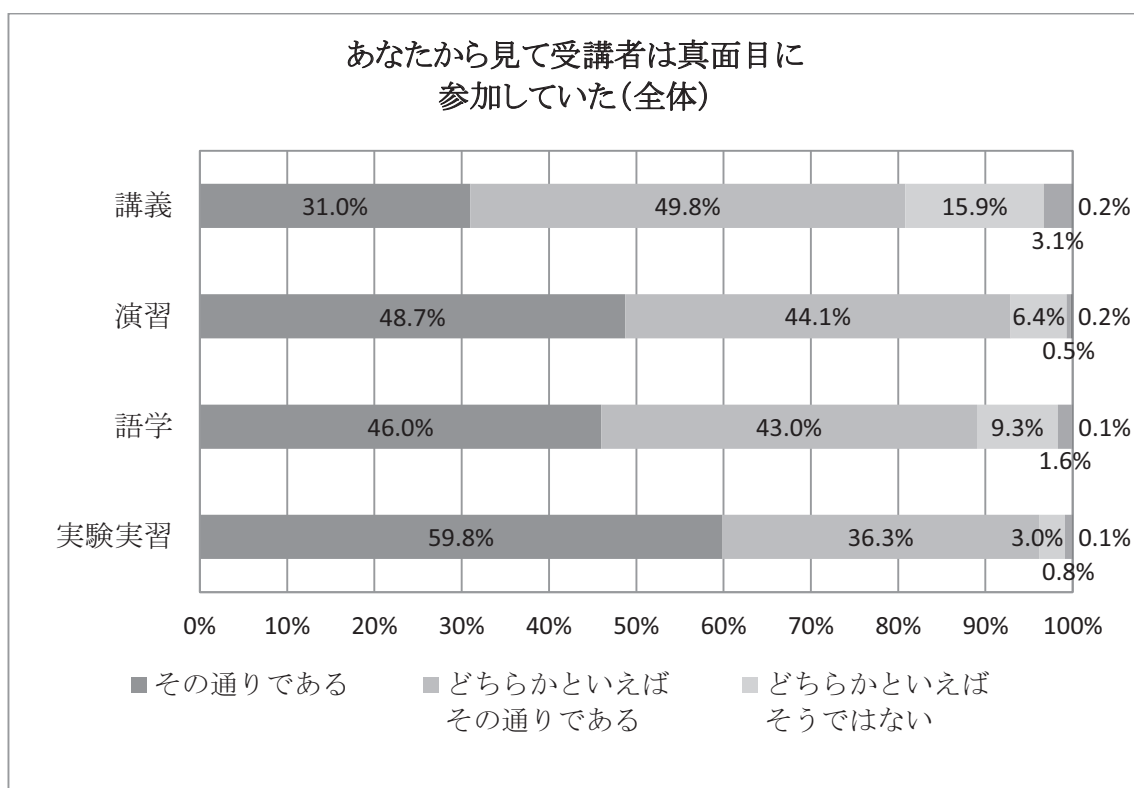


図 1 4 設問 1 4 の回答数の割合 (全科目)

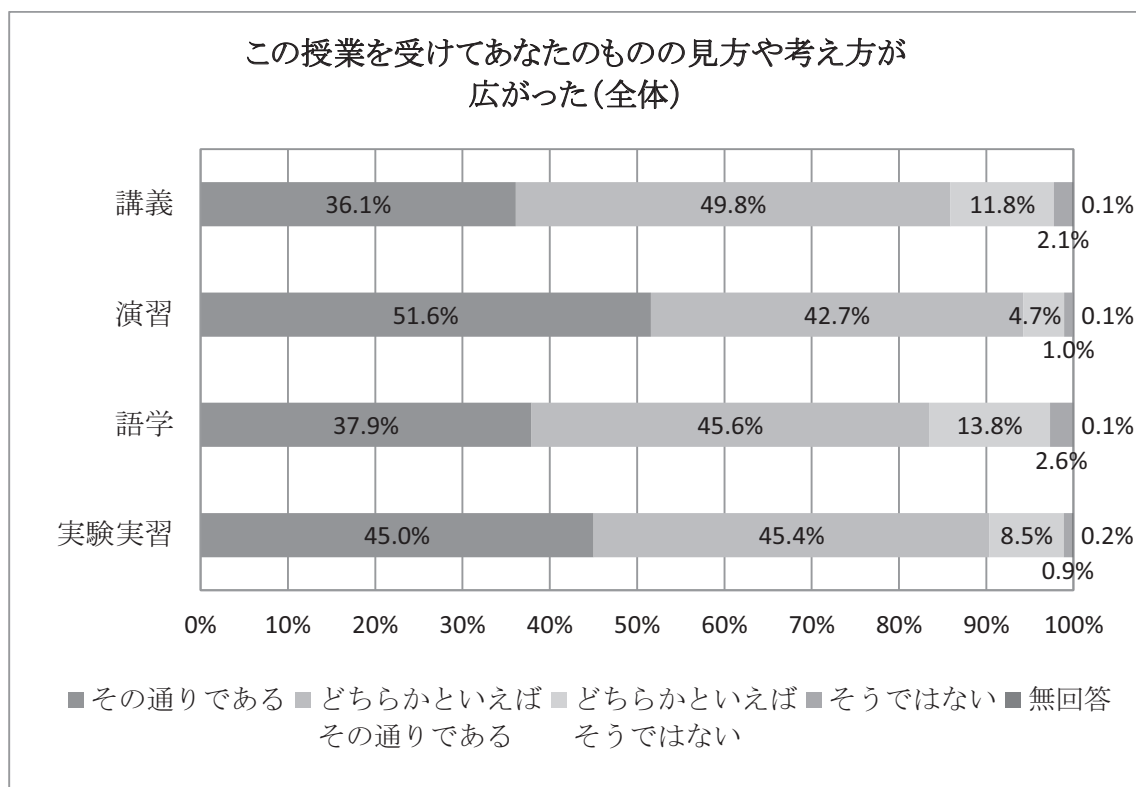


図 1 5 設問 1 5 の回答数の割合 (全科目)

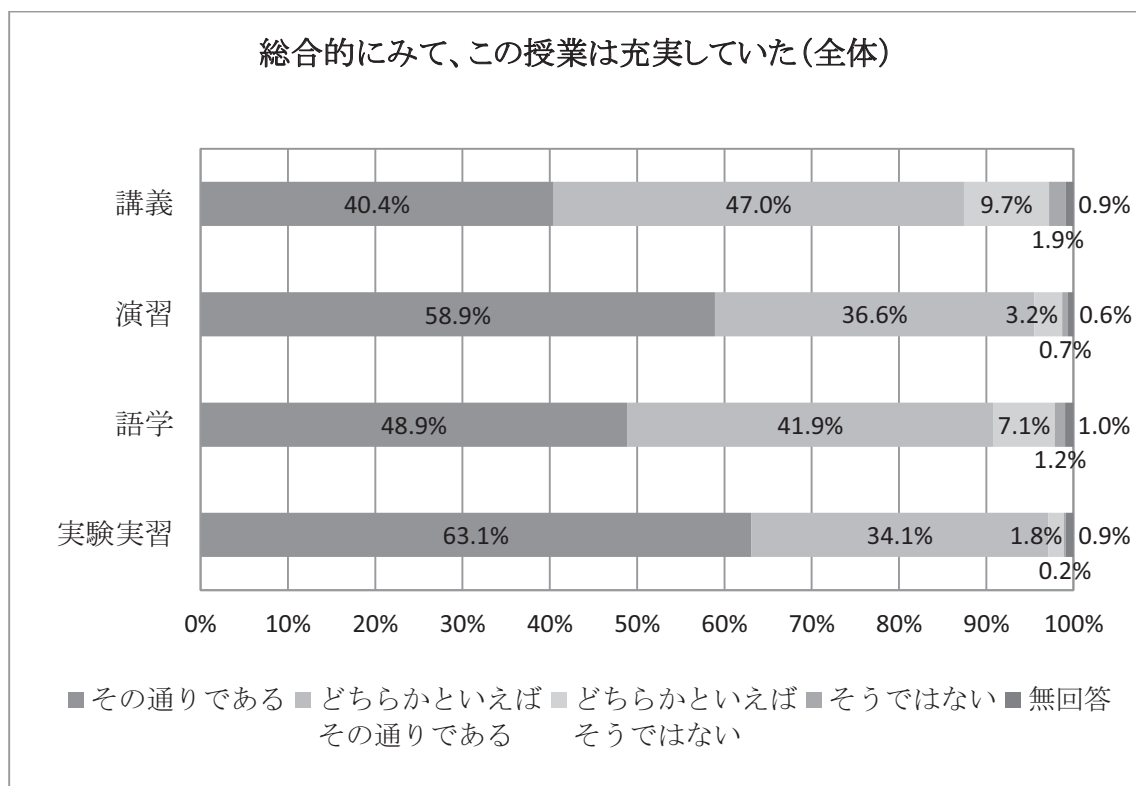


図 1 6 設問 1 6 の回答数の割合 (全科目)

2.2 設問項目の平均スコア

設問 1~16 における各学部平均スコアと全学部平均スコアとの比較をレーダーチャートで表す。ここでは、ある設問において、「その通りである」を 3 点、「どちらかといえばその通りである」を 2 点、「どちらかといえばそうではない」を 1 点、「そうではない」を 0 点として、全回答の平均値を求め“平均スコア”と定義する。このため平均スコアは 0~3 の範囲に収まる値となる。図 17~23 に示すグラフが各学部の平均スコアである。比較のため各グラフには全体の平均のスコアも示されている。

図 15 が生活科学部の結果である。設問 1~5 のシラバスに関する設問のスコアが全体に比べて低いことが分かる。特に設問 1 においては、顕著に低い傾向が示されている。生活科学部は、国家資格である「管理栄養士」取得を目指す管理栄養学科を含むため、他学部に比べ必修科目が多い。このことから、履修科目を決定するためにシラバスを確認するという行為が少ないことが原因と考えられる。また、設問 6、7 の難易度と進行速度に関するスコアも低い。「管理栄養士」取得を重要視するため、授業のレベルは高く、受講者の評価も厳しい傾向があるようだ。受講者の積極的な姿勢に応えられるよう、教員も真摯に学生と向き合うことが重要と考える。

図 16 は国際コミュニケーション学部の結果である。いずれの平均スコアも全体に比べ優れていることが分かる。他学部に比べても、この傾向は顕著であり、国際コミュニケーション学部の授業満足度は非常に高いと言える。公開授業などの仕組みを利用して、他学部の教員が国際コミュニケーション学部の授業を体験する機会を増やすことも検討すべきである。一方で、国際コミュニケーション学部は、英語の徹底修得を謳った国際言語コミュニケーション学科を含み、語学教育が充実している。前節の回答者数の割合で示したように、「語学」は他の科目区分に比べ、評価が高い傾向にある。このことが、国際コミュニケーション学部の結果を後押ししたことも考慮する必要がある。

図 17、18 は人間関係学部と文化情報学部の結果である。両学部の平均スコアは類似しており、設問 1 の値が全体に比べ高いことを除き、その他の設問項目は全体の平均スコアとほぼ一致している。これらの学部は、生活科学部とは逆に、選択科目がカリキュラムに多く含まれており、履修登録の際にシラバスを確認することが必須となる。このため、設問 1 のスコアは高い値を示したと考えられる。しかし、人間関係学部においては、設問 13 の予習・復習に関するスコアが若干低いことが読み取れる。アクティブ・ラーニングなどの授業スタイルを積極的に導入することで、学生の主体的な学びを伸ばすことが必要と思われる。

図 19 は現代マネジメント学部の結果である。いずれの平均スコアも全体の平均スコアに比べ低い傾向が読み取れる。現代マネジメント学部は、社会に直結した「経営」を学問の中心に据え、少人数制の教育を積極的に導入しているにも関わらず、あまり成果は上がっていないようである。同じ人文学系でありつつも平均スコアの高い国際コミュニケーション学部を参考に改善を図るべきである。

図 20 は教育学部の結果である。国際コミュニケーション学部には及ばないものの、設問 1 を除き、いずれの平均スコアも全学部の平均スコアと同等以上の値を示している。教育学部は、学部の性質上、教員同士の相互依存も強く、授業改善に向けて熱心に取り組んでいる。この教員の姿勢が、受講者の授業評価にも好影響を与えていると考えられる。また、生活科学部と同様に、資格取得がカリキュラムの中心であり、必修科目が多いことから、設問 1 のスコアは低い結果となったと考えられる。

図 21 は看護学部の結果である。全体的に全学部の平均スコアと一致、もしくは、低いスコアとなる傾

向が読み取れる。看護学部は生活科学部と同様に国家資格である「看護師・保健師」取得を目標に掲げていることから、試験対策を中心とした科目が設置されている。一方で、平成 27 年度の教員数は 49 人、学生 1 人当たりの学生数も 8.55 人²と、他学部に比べ、教員による学生のケアが手厚い。また、病院施設での実習も多く設置されており、“頭”ではなく“体”で学ぶ経験も充実している。このことから、学生の自主性が必然的に高まり、厳しい評価となったと考えられる。また、設問 1 のスコアが低くなった理由も生活科学部と同様である。

² 参考：椋山女学園大学ホームページ <http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/about/info/number/>

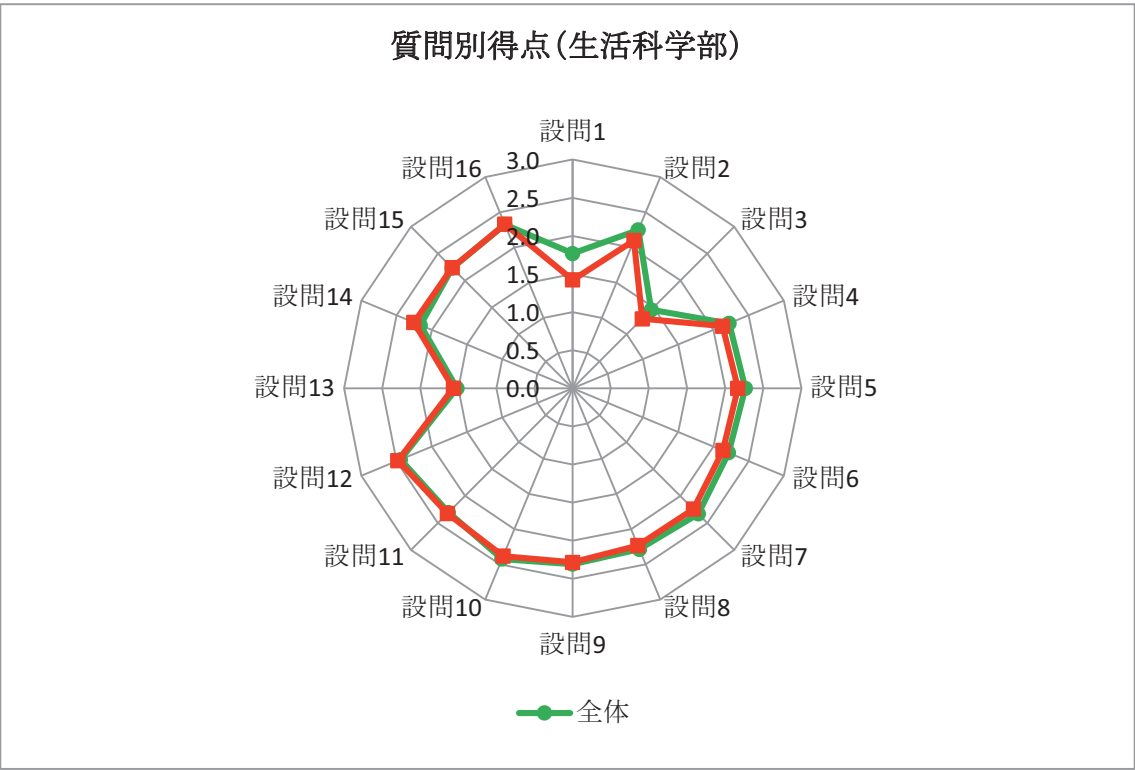


図 1 7 平均スコアとの比較 (生活科学部)

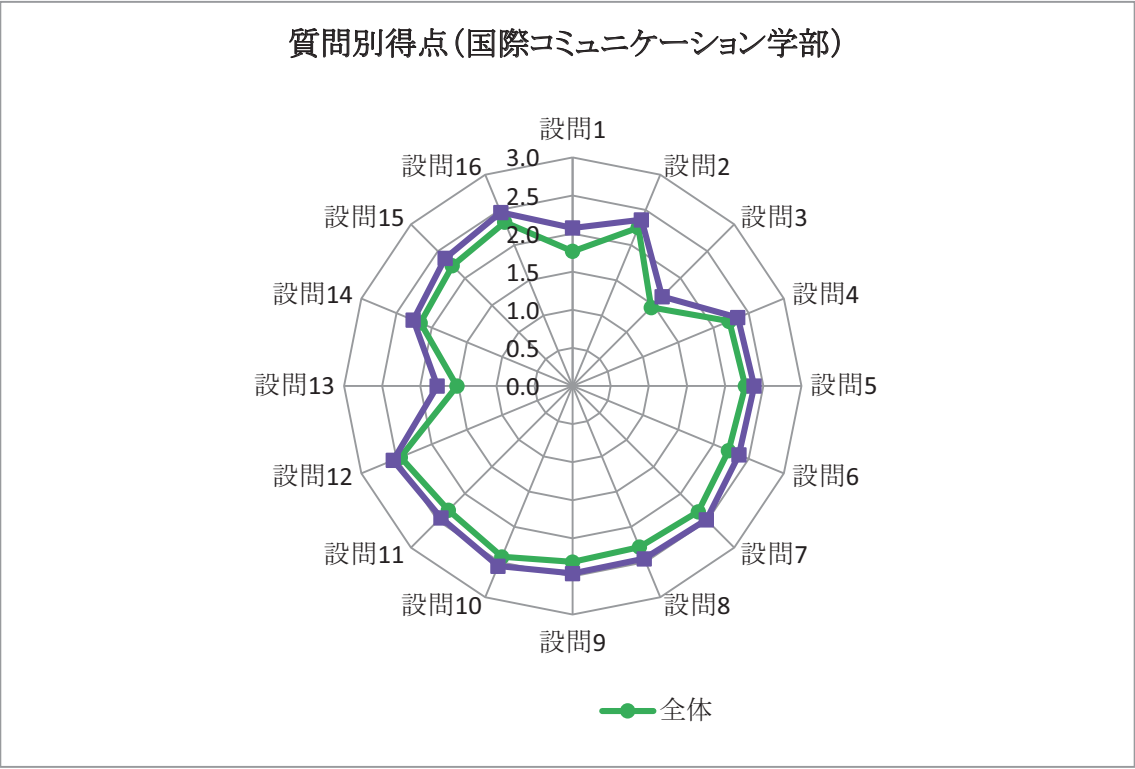


図 1 8 平均スコアとの比較 (国際コミュニケーション学部)

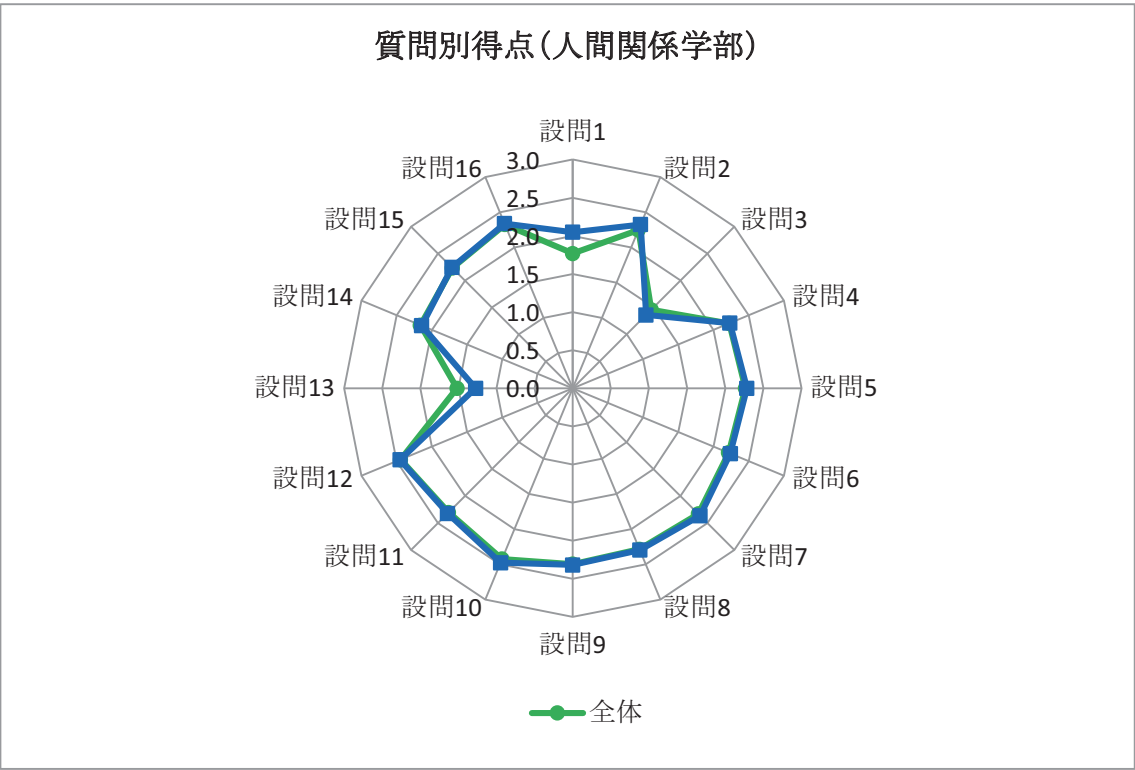


図 1 9 平均スコアとの比較 (人間関係学部)

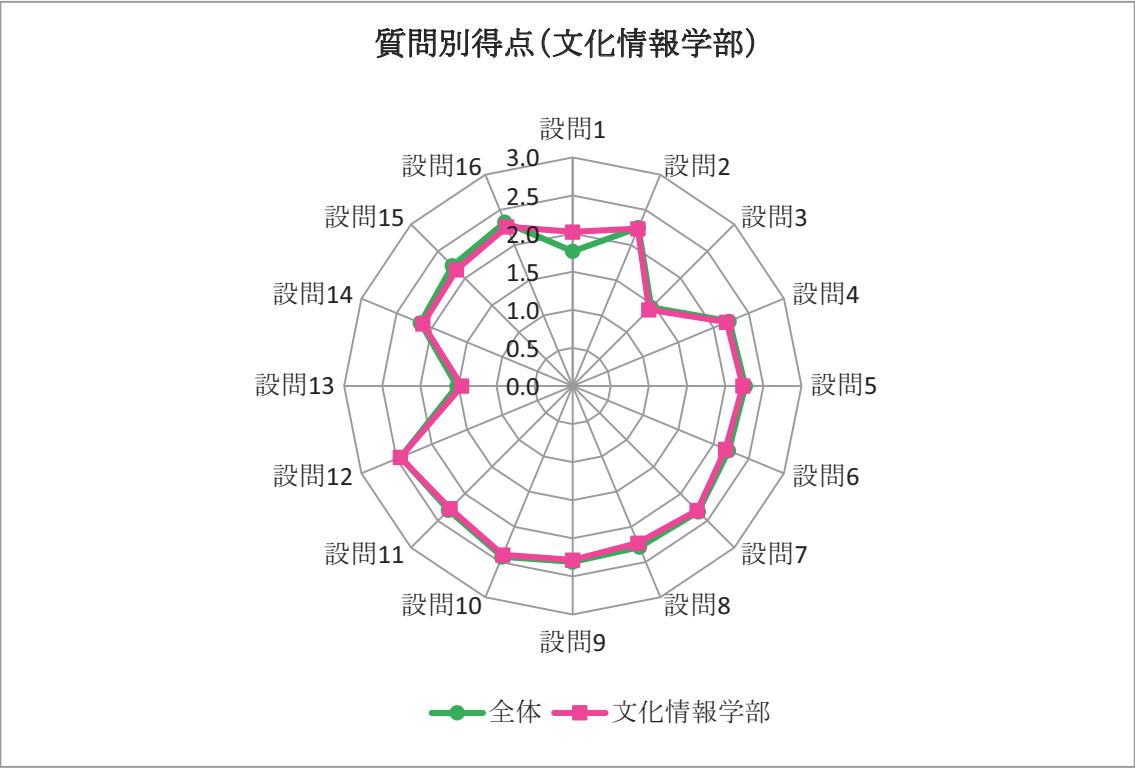


図 2 0 平均スコアとの比較 (文化情報学部)

質問別得点(現代マネジメント学部)

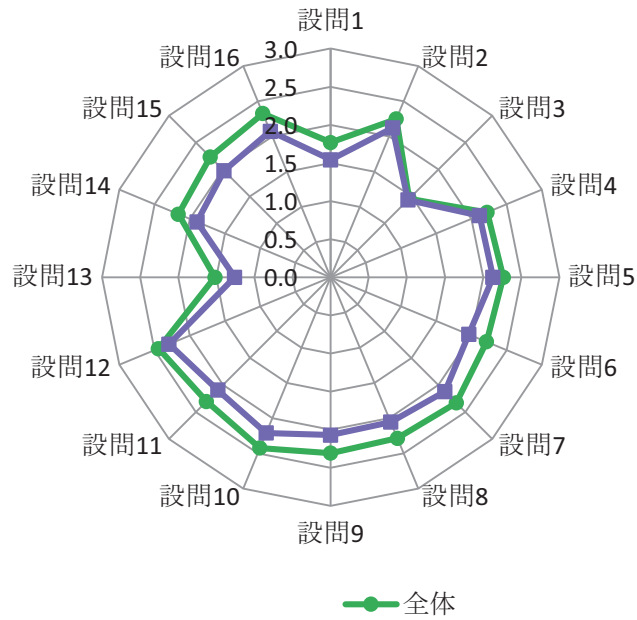


図 2 1 平均スコアとの比較 (現代マネジメント学部)

質問別得点(教育学部)

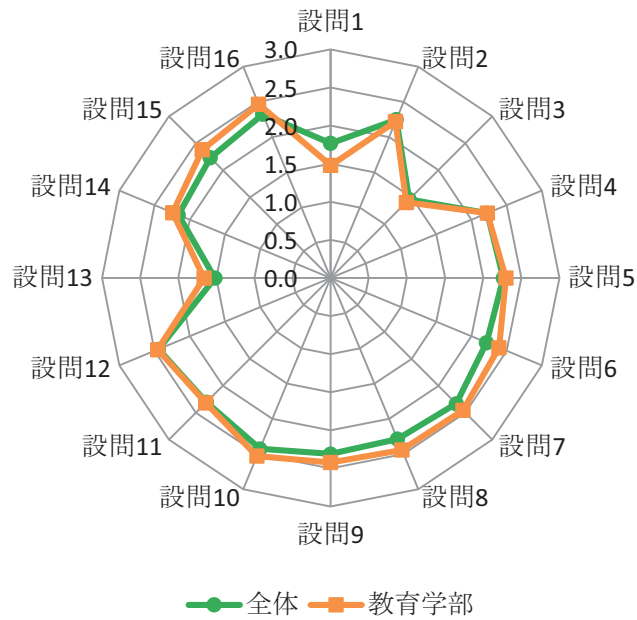


図 2 2 平均スコアとの比較 (教育学部)

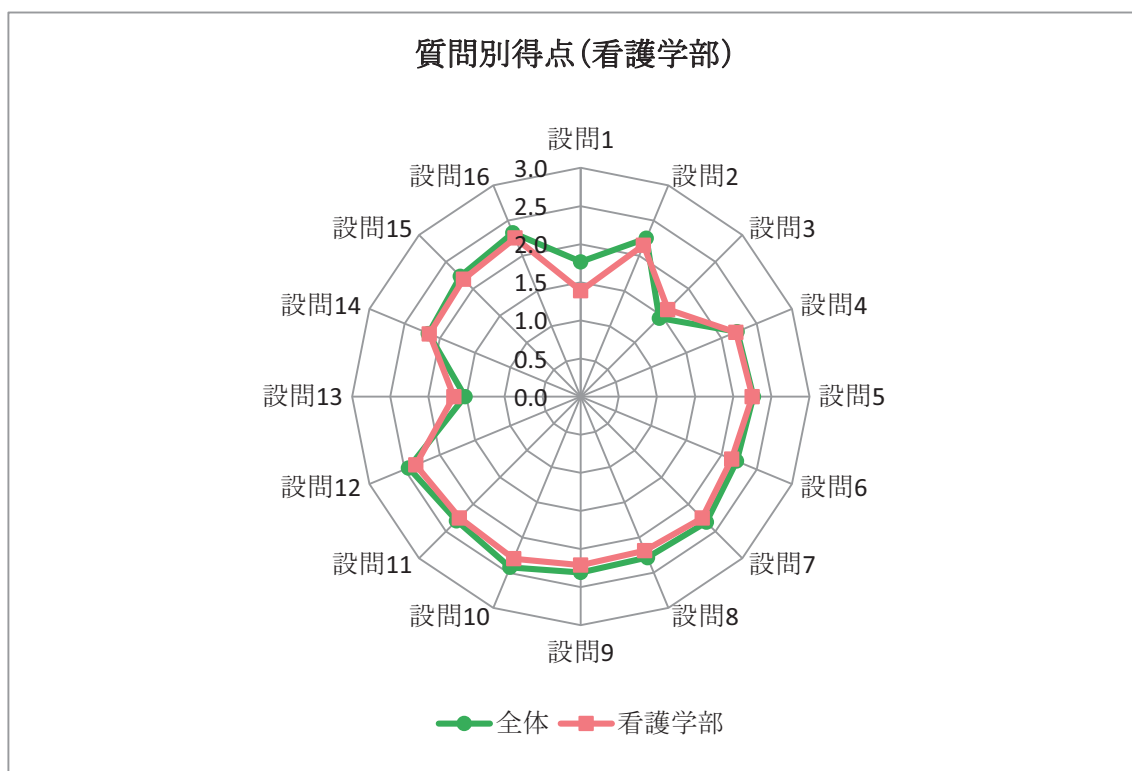


図 2 3 平均スコアとの比較 (看護学部)

2.3 設問 15 と他の設問との相関係数

設問 15「この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。」と他の設問 1~14 の平均スコアとの相関係数を図 24 に示す。相関係数には「ピアソンの積率相関係数」を用いた。ピアソンの積率相関係数を適用するには、データが正規分布に従うことが条件となるが、平均スコアは 0~3 の範囲で分布し、考慮すべき異常値は含まないため、この条件を満たすと考える。また、相関係数は 2 つの設問間の類似性の度合いを表し、1 に近いときは正の相関が強く、-1 に近いときは負の相関が強いことを意味する。

いずれの設問も設問 15 とは正の相関を示すことが読み取れる。その中でも、設問 6「この授業は理解しやすかった。」が 0.820、設問 7「この授業の進度は適切であった」が 0.801、設問 8「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。」が 0.817 と相関が高く、“学生の理解度”が意識の変化を促す大きな要因と考えられる。

また、設問 9「板書や資料（配布資料・映像など）の提示方法は適切であった。」が 0.784、設問 10「教員の話し方（声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など）は適切であった」が 0.753、設問 14「あなたから見て受講者はまじめに参加していた」が 0.761 と、設問 6、7、8 に次いで高く、“授業環境の整備”も重要な要因と読み取れる。

一方で、設問 1「受講にあたって、この科目のシラバスを読んだ。」や設問 3「この科シラバスの主要内容を覚えている。あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認し受講している」は設問 15 との相関は低く重要ではない。事前に定めたシラバスに従って厳密に授業を進めるよりも、受講者の学習状況に配慮しながら、柔軟に授業内容を修正する方が効果的であるように思える。また、設問 14「予習や復習など、自主的な学習を行なった」の正の相関ではあるものの、他と比べ相関が低いことは留意すべき点である。

受講者は自主学習を“負担”もしくは“やらされている”と感じている可能性が高く、充実感には繋がらないことが分かる。充実感を高めるためには、授業中に無駄な時間を受講者に与えず、常に集中して取り組むことができるような課題を与えることが効果的かもしれない。

教員が担当科目に高い興味と情熱を持ち、受講者目線で展開する授業が学生の意識改革を促すと考えられる。



図 2-4 設問 15 との相関係数（全科目）

2.4 設問 16 と他の設問との相関係数

設問 16「総合的にみて、この授業は充実していた。」と他の設問の平均スコアの相関係数を図 25 に示す。相関係数には前節と同じ「ピアソンの積率相関係数」を用いた。

いずれの設問も設問 16 とは正の相関を示すことが読み取れる。その中でも、設問 6「この授業は理解しやすかった。」が 0.910、設問 7「この授業の進度は適切であった」が 0.884、設問 8「教員は学生が理解

しやすいように授業を工夫していた。」が0.920と相関が高く結果となった。これは、前節の設問15との相関関係と同じ傾向であり、相関の度合いはさらに高い結果となった。また、設問9「板書や資料（配布資料・映像など）の提示方法は適切であった。」が0.866、設問10「教員の話し方（声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など）は適切であった」が0.862、設問14「あなたから見て受講者はまじめに参加していた」が0.826と、設問6、7、8に次いで高い結果となることも、前節の設問15との相関関係と同じ傾向である。このことから、授業の充実度は、“学生の理解度”と“授業環境の整備”が強く影響していると考えられる。

上記の結果から、教員の授業改善に対する努力は、学生の意識改革や充実感に確実に繋がるといえる。研究や学内業務への貢献も求められるなか、授業改善への取り組みは困難な事ではあるが、着実な積み重ねで学生の成長を促すことが重要であろう。



図2-5 設問1-14との相関係数（全科目）

2.5 設問 17 の回答数の割合

設問 17「この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください」は、他の設問とは異なり、「知識・理解」「思考・判断」「態度・志向性」「技能・表現」の多肢選択形式となっているため、本節で独立して分析を行う。図 26 は全体、図 27~33 は各学部の結果である。ここで、横棒グラフに記載されているラベルは、“割合”ではなく“回答数”であることに注意して欲しい。

図 26 が全体の結果である。科目区分が「講義」や「語学」においては、「知識・理解」が高まったと感じることが多いようである。一方、「演習」や「実験実習」においては「技能・表現」の成長を感じていることが分かる。

図 27 は生活科学部での結果である。「講義」「実験実習」における「知識・理解」の割合が非常に高く、国家資格である「管理栄養士」取得することが第一の目標となっていることが読み取れる。一方で、「思考・判断」「態度・志向性」に関して修得することはあまり期待できない。

図 28 は国際コミュニケーション学部の結果である。全体の結果と類似しており、4つの能力を満遍なく学習することができている。この傾向が、他学部に比べて平均スコアの高い要因の一つと考えることもできる。

図 29 と 30 は人間関係学部と文化情報学部の結果である。平均スコアと同様、育成する能力も非常に類似している。国際コミュニケーション学部と同様、4つの能力をバランス良く修得できることが特徴である。

図 31 は現代マネジメント学部の結果である。人文系であるにも関わらず、人間関係学部や文化情報学部とは傾向が異なっており、理系要素の強い生活科学部に類似していることが特徴的である。「知識・理解」の割合が非常に高く、「技能・表現」の修得の割合は比較的低い。アクティブ・ラーニングの導入により、学生の主体的な学習を積極的に導入することも検討して欲しい。

図 32、33 は教育学部と看護学部の結果である。資格取得を中心に据えつつも、4つの能力をバランスよく修得することができている。

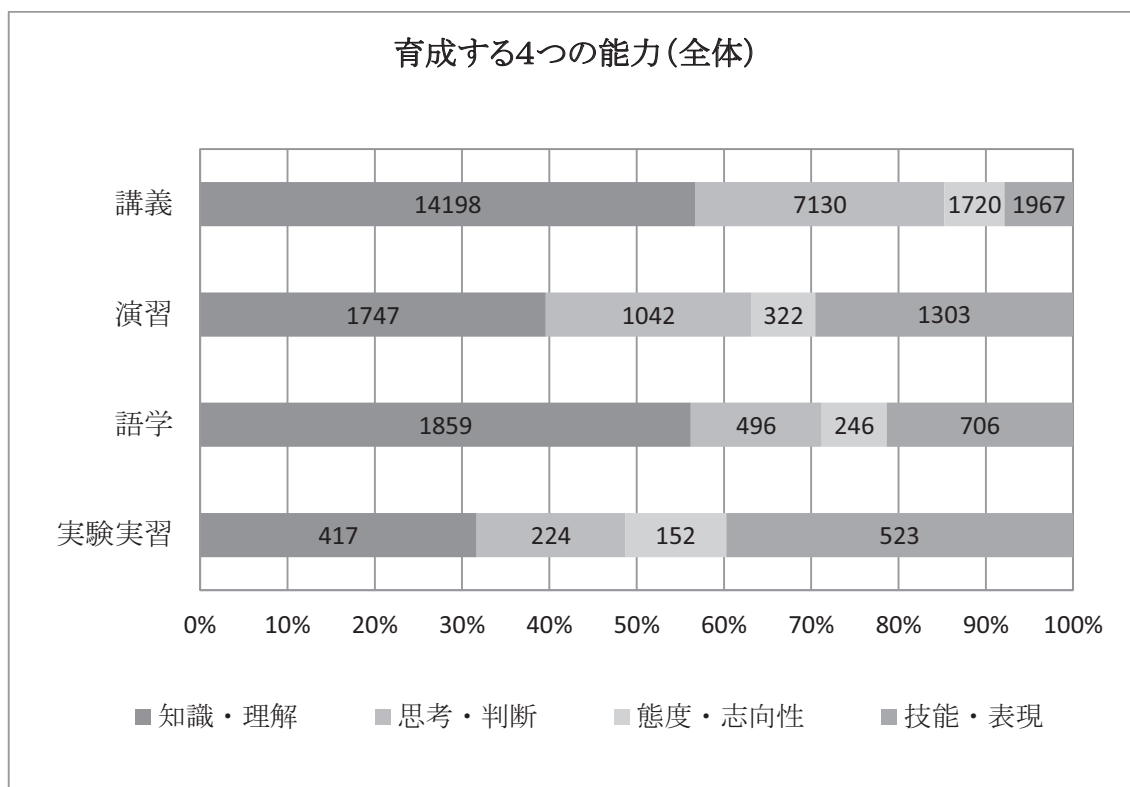


図 2 6 育成する 4 つの能力 (全科目)

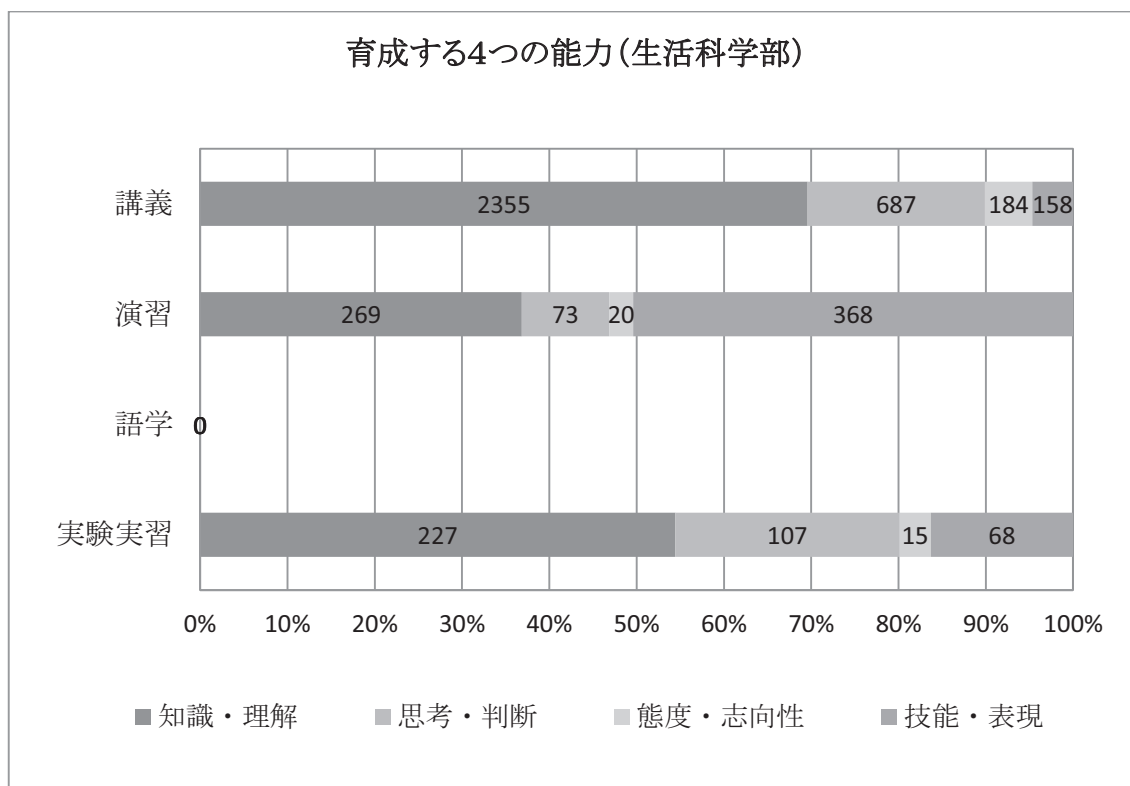


図 2 7 育成する 4 つの能力 (生活科学部)

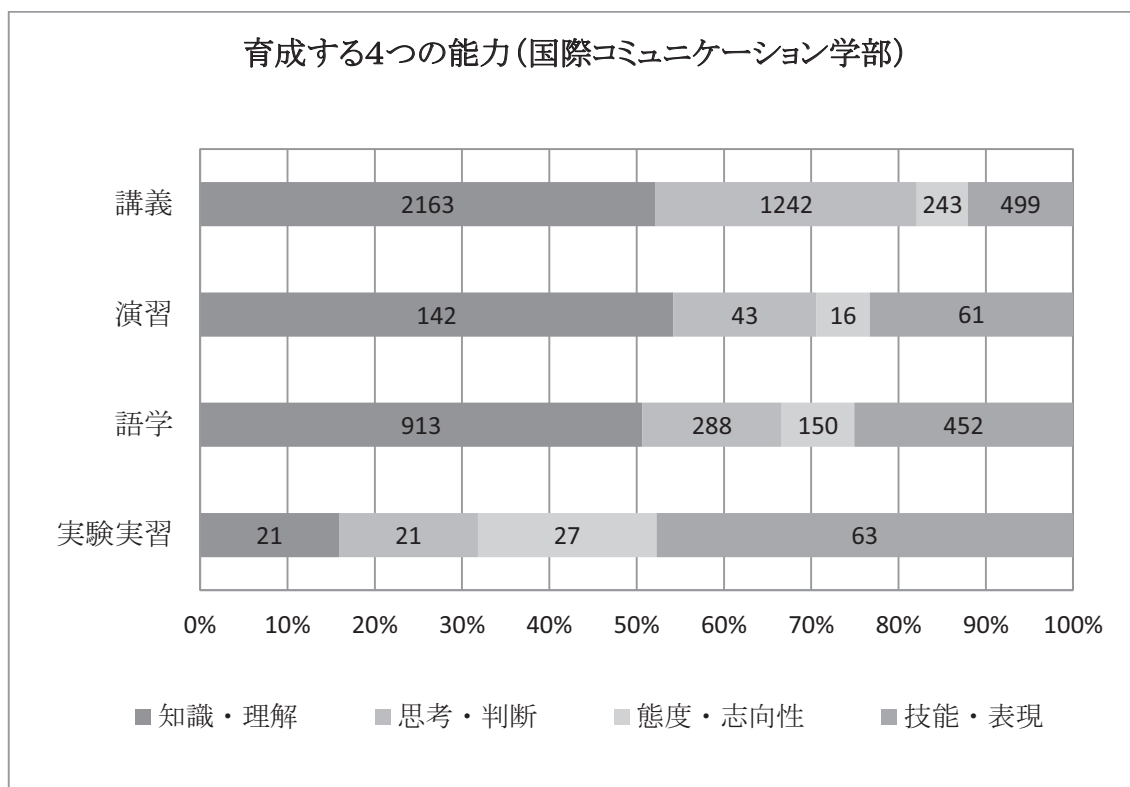


図 2 8 育成する 4 つの能力 (国際コミュニケーション学部)

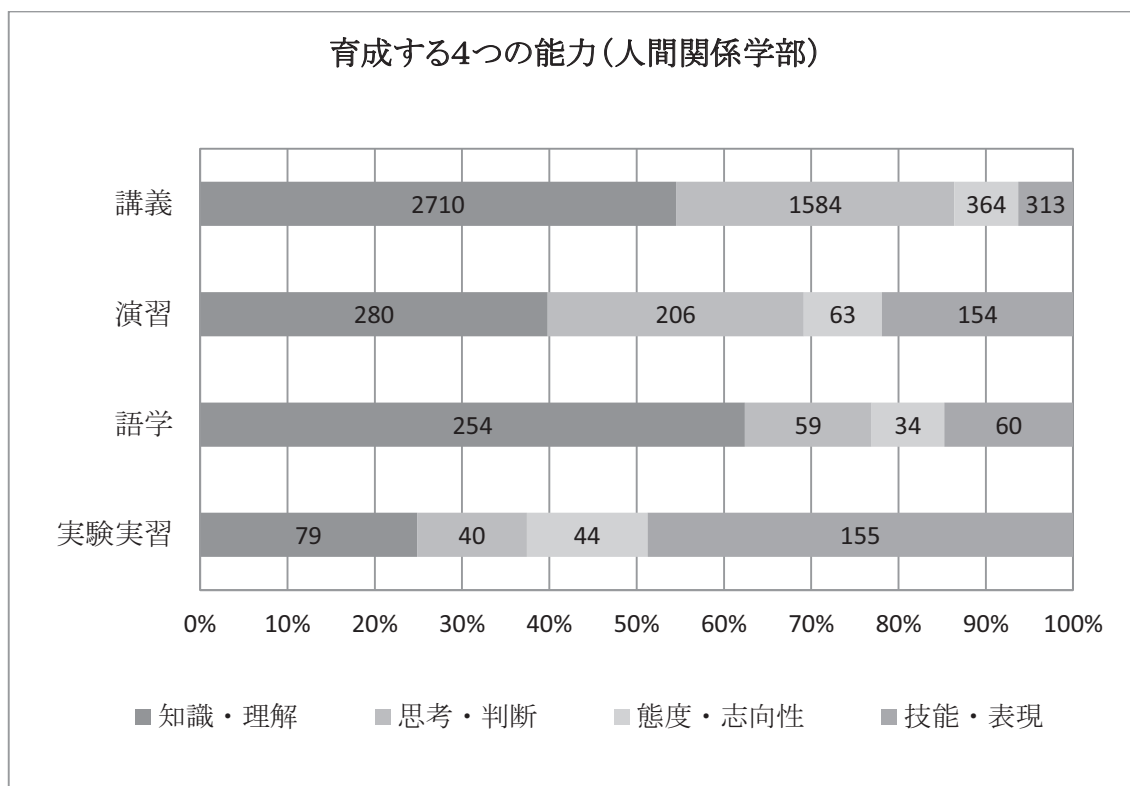


図 2 9 育成する 4 つの能力 (人間関係学部)

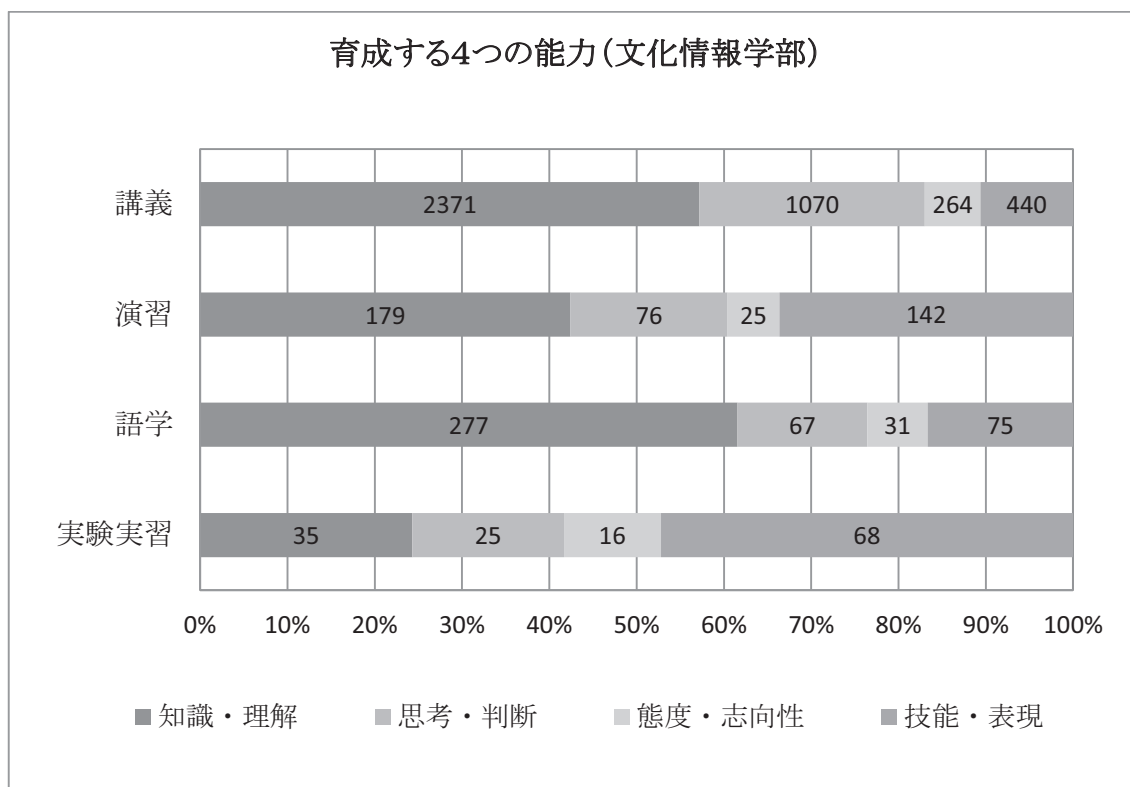


図30 育成する4つの能力(文化情報学部)

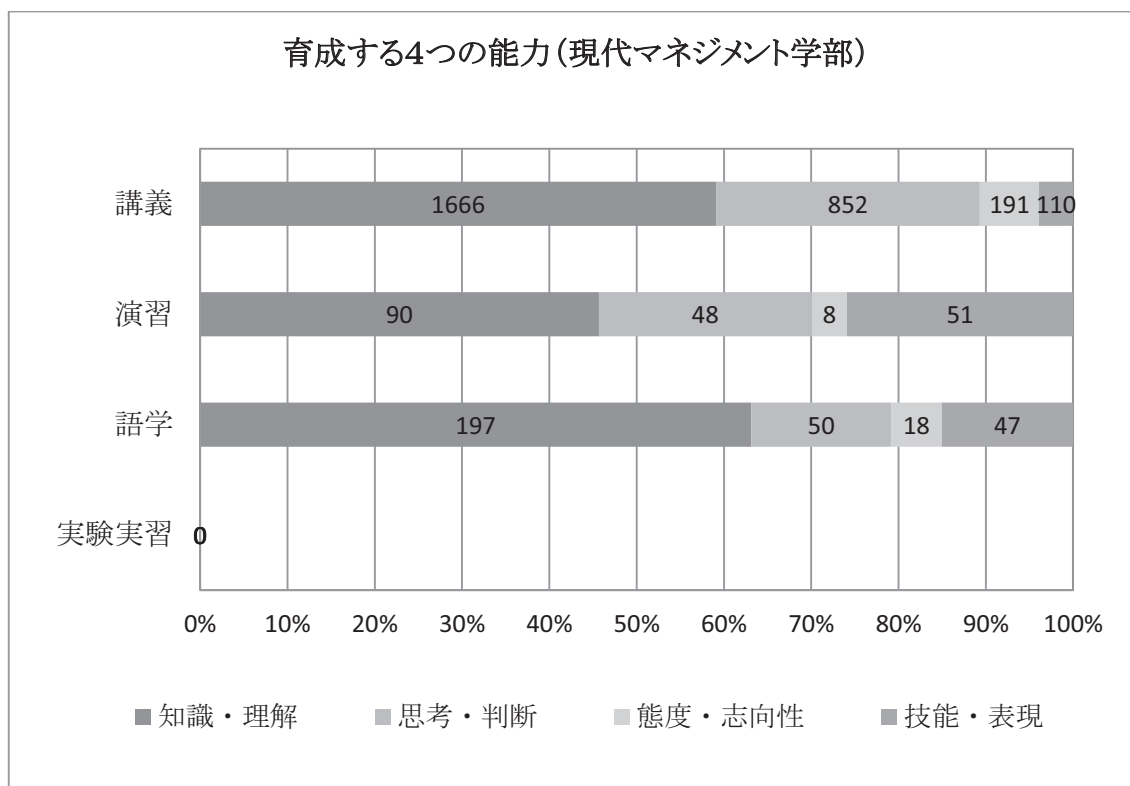


図31 育成する4つの能力(現代マネジメント学部)

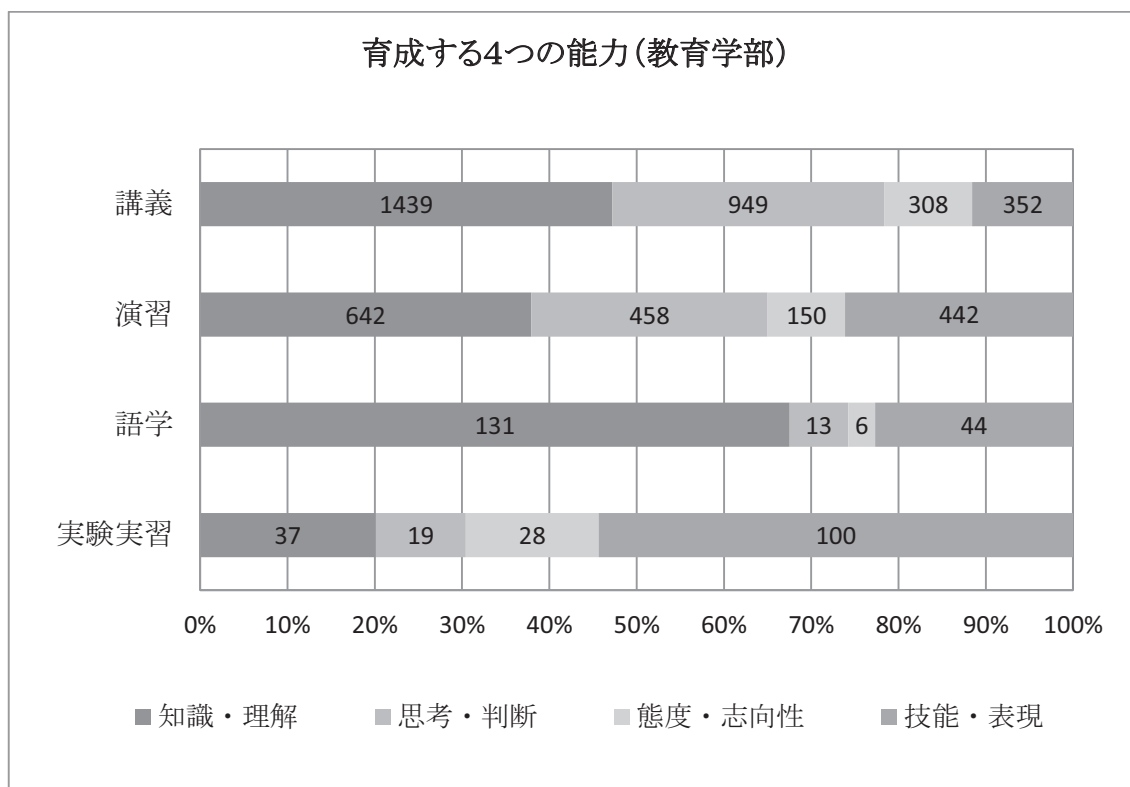


図 3 2 育成する 4 つの能力 (教育学部)

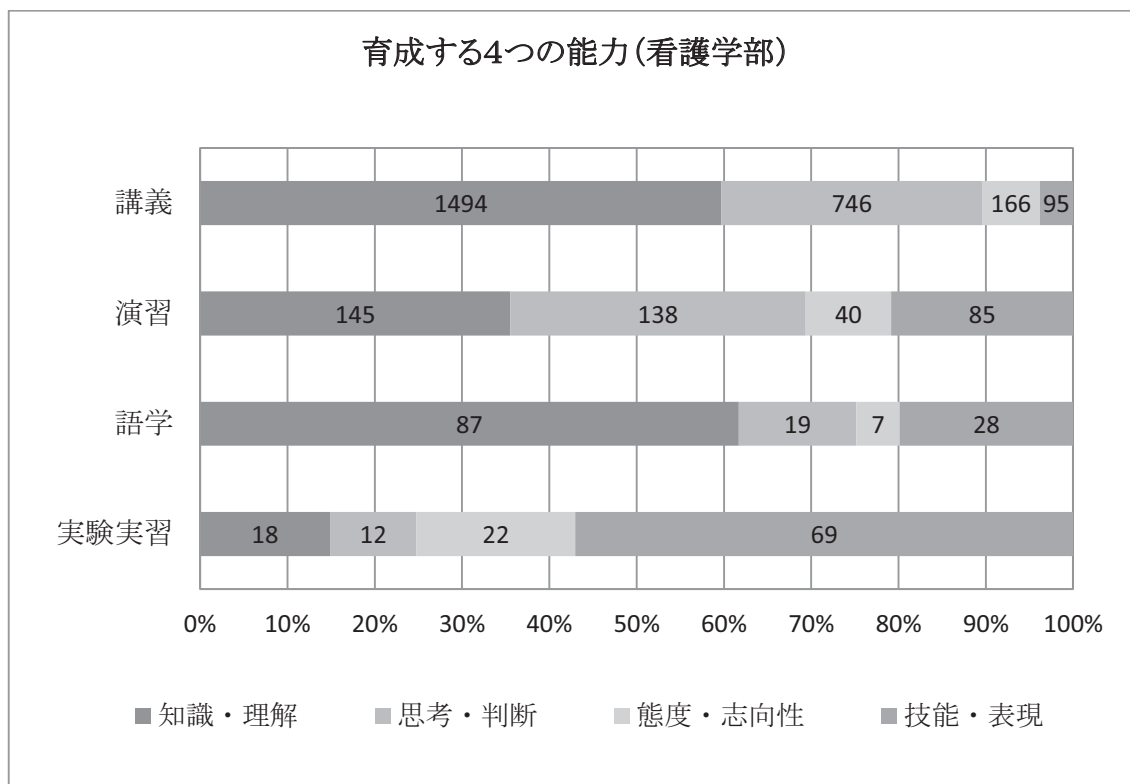


図 3 3 育成する 4 つの能力 (看護学部)

3. 授業評価アンケート調査に係る資料

1. 平成 27 年度後期 授業アンケートの実施要領
2. 平成 27 年度後期 授業アンケートの実施について（学生への案内）
3. 学生用 授業アンケート調査
4. 教員用 授業アンケート調査
5. 「授業アンケート調査」結果に関して（依頼）
6. 「授業アンケート調査」実施に関する意見書
7. 平成 27 年度後期 授業アンケート 実施状況
8. 平成 27 年度後期 リフレクション・ペーパーの提出状況

1. 平成 27 年度後期 授業アンケートの実施要領

平成 27 年度 後期 授業評価アンケートの実施要領

全学 F D 委員会

1. 実施の目的

学生による授業評価はアンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とします。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでの F D を推進するための資料として活用します。

2. 実施時期

実施期間	平成 28 年 1 月 5 日（火）～1 月 23 日（土）
実施予備期間	平成 27 年 12 月 17 日（木）～12 月 26 日（土）

3. 対象科目

平成 27 年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究、集中講義及び受講者数が 10 名未満の科目を除く全ての授業科目から、2 科目以上選択してください。

※4 年間で全ての担当科目を網羅できるよう、対象科目は計画的に選択してください。

※マークシートによる授業アンケートとは別に自由記述用紙のみで実施することも可能です。この場合は、担当教員の必要に応じて随時実施することができます。（自由記述用紙の必要枚数を教務課 F D 担当までお知らせください。）

4. 実施方法

＜作業の流れ＞

- (1) 全学 F D 委員会から学生へ授業アンケート実施のお知らせを、S * m a p のジャーナルで送信します。
- (2) 授業アンケート用紙等の各教員への配布：対象科目ごとに封入された調査用袋を、各学部事務室のメールボックスに配付します。
＜12 月 16 日（水）から配布＞
- (3) 対象科目ごとの調査用袋に同封されているのは、
 - ① 学生用アンケート用紙（受講登録者数プラス予備の枚数、A 4 用紙に調査項目とマークシートが印刷されています）
 - ② 教員用アンケート用紙（A 4 用紙に調査項目とマークシートが印刷されています）
- (4) 教室での実施手順：2 ページに記載
- (5) 実施済みのアンケート用紙等は、学部事務室・日進キャンパス事務課までご提出ください。

アンケート回収最終日：1 月 23 日（土）13:00

5. 集計結果

集計結果は、2 月上旬に先生方にお届けする予定です。（非常勤の先生方へは郵送します。）

6. 「リフレクション」（授業アンケート結果を踏まえた自己点検・授業評価）

「リフレクション」については改めてご依頼し、3 月 4 日（金）までにご提出いただく予定です。

7. 授業アンケート集計結果の学内開示

質問項目ごとの全体の傾向、学部ごとの傾向及び科目ごとの結果をリフレクションとともに学内に開示いたします。

＜教室での実施手順＞

1. 受講生には、アンケート実施について以下のようにご説明ください。

これから、授業アンケートを実施します。この調査は個々の授業及び学部学科・大学全体のカリキュラムの質的向上のために行うもので、その他の目的には使用されませんので、協力してください。なお、誰がどのような回答をしたかは特定できないように十分な配慮をして実施しますので、思うところを率直に記入してください。マークシートはコンピュータで統計的に処理されます。自由記述は、私（授業担当者）が直接読んで、今後の授業の質的向上のための参考にしますので、率直な意見をできるだけ書いてください。回答時間は約15分です。

2. アンケート用紙を配布してください。
3. 配布したアンケート用紙の回答方法について、お伝えください。
 - ・シートを折ったり丸めたりしない
 - ・鉛筆かシャープペンシルを用いる
 - ・自由記述欄があることに触れ、そちらにも回答するように伝えてください
4. 教員による独自の設問項目欄を設けてあります。必要に応じて、ご自身で作成した項目を追加してください。
5. 学生がアンケートに回答している間は、回答者の匿名性が保たれるよう、十分に御配慮ください。教室内の巡回なども御遠慮ください。また、この間に、教員用アンケート用紙にご記入ください。
6. 学生の記入が終了したところで、アンケート用紙を原則学生に回収させてください。回収を学生に依頼した場合は、回答済み学生用アンケート用紙、及び教員用アンケート用紙を配布された時と同じ封筒に封入し、確実に封をして糊付けしたうえで、未使用のアンケート用紙とともに、各学部事務室まで提出するよう指示してください。

実施科目や実施方法などについてのご質問は、教務課または日進キャンパス事務課教務係までお尋ねください。

＜連絡先＞ 教務課 電話：052-781-6466（直通）
質問用メールアドレス：kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp

2. 平成 27 年度後期 授業アンケートの実施について（学生への案内）

学生の皆さんへ

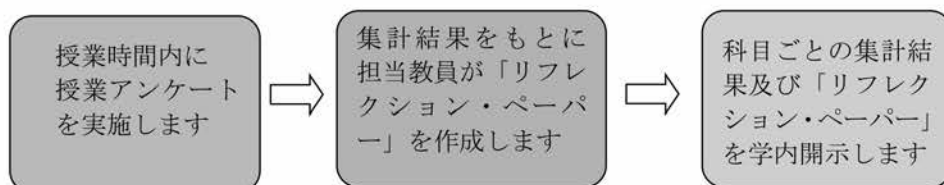
平成 27 年度後期 授業アンケートの実施について

全学FD委員会

●授業アンケートについて

平成 27 年度後期の授業についてアンケートを実施します。授業アンケートは、平成 28 年 1 月 5 日（火）～1 月 23 日（土）の週に授業時間内に行います。（授業の都合等により、実施期間前の平成 27 年 12 月 17 日（木）～12 月 26 日（土）にて実施の場合があります。）このアンケートは、授業が学生の皆さんにどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とします。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用します。その他の目的には使用しませんのでご協力ください。なお、アンケートは無記名で個人が特定されないように十分な配慮をいたします。

●授業アンケート調査実施の流れ



●授業アンケート実施について

1. 授業アンケートは個々の教員の授業の質的向上や大学の組織的教育改善のために行うもので、その他の目的には使用されませんので、協力してください。なお、誰がどのような回答をしたかは特定できないように十分な配慮をして実施しますので、思うところを率直に記入してください。
2. 回答時間は15分から20分です。（授業時間内に行います。）
3. 記入は鉛筆かシャープペンシルを使用してください。
4. 項目ごとに必ず回答欄を○印で囲ってください。
5. マークシートはコンピュータで統計的に処理されます。自由記述は、授業担当者が直接読んで、授業の質的向上のための参考にしますので、率直な意見をできるだけ書いてください。
6. 担当教員の指示により回答する項目や、担当教員による独自の設問項目がある場合は、板書または口頭で提示があります。
7. マークシートは折ったり丸めたりしないように注意してください。

3. 学生用 授業アンケート調査

授業アンケート調査

このアンケート調査は、全学の教育の改善・充実を図るために、調査結果を統計的に分析するものです。
自由記述欄の記載事項は先生方にご覧いただき、先生方ご自身が学生の意見を把握し、今後授業の充実・改善の参考にしていただくものです。
以下の項目にご回答をよろしくお願いいたします。

回答例 (1) (②) (3) (4)
※必ず、1つを選択してください

設問項目

設問 1 から 20 まで必ず回答してください

	その通りである	どちらかといえば その通りである	どちらかといえば そうではない	そうではない
設問 1. 受講にあたって、この科目のシラバスを読んだ。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 2. この科目を履修登録する上で、シラバスの内容は役立つ。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 3. このシラバスの主な内容を覚えている。 あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認し受講している。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 4. この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 5. シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 6. この授業は理解しやすかった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 7. この授業の進度は適切であった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 8. 教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 9. 板書や資料(配布資料・映像など)の提示方法は適切であった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 10. 教員の話し方(声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など)は適切であった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 11. 私語など、不真面目な学生に対する教員の対応は適切であった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 12. 授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 13. 予習や復習など、自主的な学習を行った。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 14. あなたから見て受講者は真面目に参加していた。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 15. この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 16. 総合的にみて、この授業は充実していた。	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 17. この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください。 (この設問のみ複数選択可)	知識・理解 (1)	思考・判断 (2)	態度・志向性 (3)	技能・表現 (4)
設問 18. (教員による独自の設問項目)	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 19. (教員による独自の設問項目)	(1)	(2)	(3)	(4)
設問 20. (教員による独自の設問項目)	(1)	(2)	(3)	(4)

自由記述欄

この授業について、より良い授業としていくために、次の点について意見や考えがあったら記入してください。
※外国人教員が授業担当者の場合、できるだけ担当者がわかる言語で書いてください。

1. この授業で、よかったと思う点がありましたら、記入してください。

2. この授業で、改善すべき点がありましたら、記入してください。(授業内容、授業レベル、授業方法、授業形式、学生の姿勢、教員の言動など)

4. 教員用 授業アンケート調査

教員用 授業アンケート調査

このアンケート調査は、全学の教育の改善・充実を図るために、調査結果を統計的に分析するものです。
自由記述欄の記載事項は先生方にご覧いただき、先生方ご自身が学生の意見を把握し、今後授業の充実・改善の参考にさせていただくものです。
個別的授業や個別的教員の評価・査定をするものではなくしてあります。
以下の項目にご回答をよろしくお願いいたします。

回答例 (1) (②) (3) (4)
※必ず、1つを選択してください

設問項目

1. この授業の科目について、該当する番号にマークしてください。

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| ① 講義科目(教養科目、専門科目すべて含む) | |
| ② 外国語科目(専門科目の外国語は、演習科目等を含む) | (1) (2) (3) (4) |
| ③ 演習科目等(教養科目、専門科目すべてを含む) | |
| ④ 実験・実習科目(体育関係科目(実技)を含む) | |

2. 本学専任か非常勤か、該当する番号にマークしてください。

- | | |
|-----------------|-------------|
| ① 本学専任 ② 非常勤 | (1) (2) |
|-----------------|-------------|

この科目の授業に関して、以下のような項目について、もっともあてはまると思われる番号にマークしてください。

- | | その通りである | どちらかといえば
その通りである | どちらかといえば
そうではない | そうではない |
|---------------------------------------|---------|---------------------|--------------------|--------|
| 3. 学生は熱心に授業に取り組んでいた。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 4. 学生による積極的な発言があった。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 5. このクラスでは、私語はほとんどなかった。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 6. このクラスの教室サイズは適切だった。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 7. 授業はシラバスにそって計画通りにできた。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 8. 学生は授業の内容を理解できたと思う。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 9. 学生の理解度に配慮した工夫をした。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 10. 学生に新しい技術や知識を与え、問題意識や関心を高めることが出来た。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 11. 学生に、受身の学習から、自ら学ぶ意識をもたせることができた。 | (1) | (2) | (3) | (4) |
| 12. 総合的にみて、この授業をうまく進めることができた。 | (1) | (2) | (3) | (4) |

5. 「授業アンケート調査」結果に関して（依頼）

各 位

平成28年2月

嵯山女学園大学
全学FD委員会

「授業アンケート調査」結果に関して（依頼）

平成27年度後期分の「授業アンケート調査」にご協力いただきまして、ありがとうございました。授業に対する学生の意見が、今後の授業の質的向上に役立つことを期待すると同時に、意見を寄せた学生に対する教員側のフィードバックもまた重要なコミュニケーション手段になると期待されます。

平成15年度後期調査分より、教員によるリフレクション・ペーパーの学生への公開を、授業の質的向上を目指す方策のひとつとして取り入れました。今回もまた授業アンケート結果を踏まえての、先生方の授業に対する自己点検・授業評価を、リフレクションという形式でお書きいただき、集計結果とともに学生にフィードバックしたいと考えております。

つきましては、同封の「授業アンケート調査」結果及びアンケート用紙の自由記述欄をご覧ください、以下の項目に言及して、ご担当授業についての自己点検・授業評価を、授業科目ごとに「様式1」（S*mapのジャーナルにて様式を添付）にまとめ、平成28年3月4日（金）までに下記のアドレスにデータにて提出いただきますようお願い申し上げます。

1. 結果としてよかった点
2. 改善されるべき点
3. 今後の改善点、その他

記述の形式は自由としますが、以下の点にご注意いただきご記入をお願いします。

1. 数値による結果や、学生の自由記述内容などを引用して、できるだけ具体的にお書き下さい。
2. お書きいただいた「リフレクション」は、集計結果とともにそのままPDF化されますので、データでのご提出をお願いします。
3. 「リフレクション」はアンケートを実施されたすべての科目について授業科目ごとにお書き下さい。

「様式1」により提出された自己点検・授業評価は、集計結果とともに完成原稿としてPDF化され、学生に対するフィードバックとして、S*mapのライブラリを利用した学生への公開を行う予定ですので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、全学的FD活動の一環として実施された「授業アンケート調査」はその意義や方法などについて継続的に検討し総括していく必要がありますので、毎度のお願いとなってまことに恐縮ですが、（1）調査実施の是非について、（2）アンケート調査項目について、（3）実施時期や方法についてなど、ご意見のある方は、「授業アンケート調査」実施に関する意見書「様式2」に、具体的にお書きいただき、リフレクションとあわせてデータ提出用メールアドレスまで提出いただきますようお願いいたします。

※ 「リフレクション（様式1）」及び「意見書（様式2）」は、S*mapのジャーナルに添付しておりますので、ご確認ください。

< 連絡先 >

学務部教務課 電話：052-781-6466（直通）
質問用メールアドレス：kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp
データ提出用メールアドレス：rp@sugiyama-u.ac.jp

6. 「授業アンケート調査」実施に関する意見書

様式 2

「授業アンケート調査」実施に関する意見書

1) 「調査」実施の是非について

2) アンケート調査項目について

3) 調査時期について

4) その他

7. 平成27年度後期 授業アンケート 実施状況

平成28年3月22日
全学FD委員会【資料2】

平成27年度後期 授業アンケート 実施状況

1. 実施概要

- ・実施期間：平成28年 1月 5日（火）～ 1月23日（土）
平成27年12月17日（木）～12月26日（土）（予備期間）
- ・実施対象科目：平成27年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究、集中講義及び受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、2科目以上選択。

2. 実施科目数及び実施率

学部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
生活科学部	73	64	87.7%	9
国際コミュニケーション学部	157	145	92.4%	12
人間関係学部	136	129	94.9%	7
文化情報学部	129	115	89.1%	14
現代マネジメント学部	70	65	92.9%	5
教育学部	87	82	94.3%	5
看護学部	34	33	97.1%	1
計	686	633	92.3%	53

※参考：平成26年度前期授業アンケート実施率 95.8%（1173/1224 科目）

※授業（7.5回）がアンケートの実施前に終了した科目、担当者が交代した科目は、対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問16）回答

学部	その通りである	どちらかといえば その通りである	どちらかといえ ばそうではない	そうではない
生活科学部	41.4%	50.2%	6.9%	0.9%
国際コミュニケーション学部	54.1%	38.0%	5.7%	1.2%
人間関係学部	46.2%	41.8%	9.2%	1.8%
文化情報学部	40.0%	46.9%	10.3%	2.0%
現代マネジメント学部	26.8%	55.7%	13.5%	3.0%
教育学部	53.8%	39.6%	5.2%	1.0%
看護学部	39.8%	46.8%	10.1%	2.4%

5. 今後の予定

3月28日（月） 集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

8. 平成 27 年度後期 リフレクション・ペーパーの提出状況

平成 28 年 3 月 22 日
全学 F D 委員会【資料 2】

平成 27 年度 リフレクション・ペーパーの提出状況

●学部別提出率（平成 28 年 3 月 22 日現在）

学部	アンケート 実施科目数	リフレクション・ペーパー 提出科目数	リフレクション・ペーパー 提出率
生活科学部	64	46	71.9%
国際コミュニケーション学部	145	91	62.8%
人間関係学部	129	83	64.3%
文化情報学部	115	83	72.2%
現代マネジメント学部	65	44	67.7%
教育学部	82	61	74.4%
看護学部	33	24	72.7%
全学部 (昨年度実績)	633	432 (885)	68.2% (75.4%)

●「授業についてのアンケート調査」実施に関する意見書提出状況について

年 度	総提出枚数
平成 27 年度後期	75 枚
平成 26 年度前期	122 枚
平成 25 年度前期	127 枚
平成 23 年度前期	120 枚
平成 22 年度前期	112 枚
平成 21 年度後期	82 枚
平成 20 年度前期	87 枚

Ⅱ. 2 授業改善小委員会の活動記録

授業の改善と工夫

授業改善小委員会

(1) 活動の趣旨

各教員の日頃の授業において行われているアクティブラーニングの内容や、改善について工夫されていることや取り組まれている内容を共有し、今後の推進活動に活用する。

(2) 方法

研修での授業改善のレクチャーや公開授業での取り組みをとおり、各授業者が工夫と改善に取り組み、その内容を下記のアンケートにおいて集約した。

○対象者：全学部専任教員

○手立ての分類

A：発問の工夫 B：評価・振り返り C：展開の工夫 D：討議・ディベート E：プレゼンテーション F：グループワーク G：eラーニング H：PBL（課題解決型学習）・課題研究 I：調査・情報収集 J：図書館やインターネットの活用 K：映像や資料の活用 L：反転授業 M：ワークショップ N：実験 O：制作 P：フィールドワーク Q：その他

○内容：授業において改善、工夫している内容の具体的な記述

(3) 内容の共有と活用

①前期授業について

平成 27 年度前期の授業において、取り組んだこと、工夫したことを全学部において集約し共有できるよう一覧とした。（＊別紙「授業の改善と工夫（2015 年度・前期授業）」）

②後期授業について

後期の授業の中から 1 科目を取り上げ、予定している改善の方法や取り組まれている内容について記述し、その内容の一覧を各学部で集約、共有し、公開授業などに活用した。

<事例：T 教員（専門「数学」）>

分類	内容	科目名（形式）
K	・CG を用いて、3 次元イメージを伴う 2 変数関数の理解を促す	微分積分学Ⅲ（講義）
D	・他受講生の模擬授業に対する評価を通して、自らの模擬授業を再評価し、次なる課題を自分たちで見つける	模擬授業演習（演習）
E,F	・グループワークを通じて総括した内容を、プレゼンテーションを通じて全受講生と共有する	模擬授業演習（演習）
C	・本時の課題（振り返り）に次時のテーマを包含させ、各回に学ぶ内容へのスムーズな接続を図る	数学の指導法Ⅲ（講義／演習）
Q	・受講生の反応をもとに、講義資料やパワーポイントを毎時修正	現代数学入門 B（講義）
H	・本講義で学んだ内容が、小・中・高等学校で学んだ知識とどのような関連があるのかについて、各自が課題を設定して検討する場面を頻繁に設ける	現代数学入門 B（講義）

(4) 結果一覧

授業の改善と工夫 (20115・前期授業)

A：発問の工夫 B：評価・振り返り C：展開の工夫 D：討議・ディベート E：プレゼンテーション
F：グループワーク G：eラーニング H：PBL（課題解決型学習）・課題研究 I：調査・情報収集
J：図書館やインターネットの活用 K：映像や資料の活用 L：反転授業 M：ワークショップ
N：実験 O：制作 P：フィールドワーク Q：その他

分類 A

分類	内容	科目名 (形式)
A	身近な材料にもとづいた発問	プロダウデザイン論Ⅰ・Ⅱ (講義)
A	授業内容に沿った発問を行い、回答を考えさせる	住居学 (講義)、住宅計画 (講義)
A	発問を増やし、学生の意見や考えを聞く	基礎栄養学 (講義)
A	本時の授業内容を、問題意識をもって把握できるようにするため、授業時間後半で行う「ミニレポート」の課題を事前に示す	日本文学史 (近代) (講義)
A	なるべく全員あてる	日本語学概論 A (講義)
A	現代日本語をもとに、過去の日本語について考えさせる	日本語の歴史 A (講義)
A	講義で扱っているテーマについて、自分で考えるように質問をして答えさせる	心理療法Ⅰ (講義) ケースメソッドⅠ (演習)
A	コンビニ等の新たな事業展開 (マイバスケッ・eat-in・セブンミール) を異なるビジネスモデルの競合関係から発問を促した。	福祉サービスの組織と経営 (講義)
A	発問をより具体的にすることと、増やすこと	人間関係論Ⅲ (講義)
A	対象化する事象が、何故に、いかなる意味において、問われるべきなのかを、明らかにする。	「教師の世界」 (講義)
A	自身の身近な問題・経験としてイメージさせる発問	ジェンダー・セクシュアリティ論Ⅰ (講義) ケースメソッド (演習) 教育 (講義) ライフスタイルと人間関係 (講義)
A	毎回授業の初めに、学生の生活実態に合わせて中国語会話を練習する。	実践中国語 2 (講義)
A	学生の日常生活の視点からの講義内容の理解	メディア応用心理学
A	発問の工夫：レポートの書き方練習になる	ファーストイヤーゼミ (演習)
A	学生の理解を促す発問と課題提供	国語 (書写を含む。) (講義)
A	時候、ニュースからひろう	統合看護 (講義)
A	学生の子どものとの接触経験にもとづいた初発問	母子支援看護学概論 (講義)
A	学生が事例にどのように対応するか尋ねるとともに、学生間のさまざまな意見を共有する	看護健康教育論 (講義)
A	・クリッカーを用いた質問を発問とし、その内容についてグループまたは個人で思考した後、解説をするようにした。	母子支援看護学概論
C,D, E,F	オープンノートを活用してのグループ討論と発表	人間論、経済学入門 A (1-130)、国際経済論 A (講義)

C	・新聞記事等の時事問題の活用	卒業研究Ⅰ以外の全授業 (講義、演習)
D	実験データをもとにグループ内で考察を重ねる	栄養学実験 (実験)
F	グループで実験データをまとめたポスターをつくる	栄養学実験 (実験)
N	実験により、知識の定着や確認を行う	栄養学実験 (実験)
E	各自が調べた内容を用紙にまとめ、発表する	住居学 (講義)
J	インターネットや図書館を活用して、各自の関心に沿った資料を収集する	住居学 (講義)、住宅計画 (講義)
K	映像や資料を提示して、授業の理解を深める	住居学 (講義)、住宅計画 (講義)
K	材料サンプルの提示	プロダウデザイン論Ⅰ・ Ⅱ (講義)
P	身近なプラスチック材料の調査	プロダウデザイン論Ⅰ(講義)

分類 B

分類	内容	科目名 (形式)
B	講義ごとに講義内容に関する小テストを実施し、理解度の把握を促す	生活環境と設備 (講義)
B	講義ごとに講義内容に関する小テストを実施し、理解度の把握を促す	居住環境学Ⅱ (講義)
B	取り組んだ内容についてレポート作成を課し、評価した	繊維材料学実験Ⅰ (実験)
B	毎回授業最後に質問・感想を書かせ提出させる。 その次の授業冒頭で、寄せられた質問や感想にコメントする。	西洋建築史
B	単元ごとに小テスト	アパレルデザイン論(講義)
B	毎時間、授業内容を整理して理解を促す	服装史 (講義)
B	前回の講義内容の要約をプリントで配り、復習時間を設けている 講義5回に一度30分ほどのテストを行い、それまでの講義内容の確認を行っている	染色加工学 (講義)
B	前時の「ミニレポート」の学生の回答 (の一部) をプリント化し、 自分がどのような思考をしたのか振り返り、また、他の学生がどの ように思考しているのか知ることによって、自分の思考を相対化し つつ、授業の内容の理解を深めていく	日本文学史 (近代) (講義)
B	ほぼ毎回「課題トライアル」を行い、学生自身が到達度を知る 15回目の授業で総復習を行い、定期試験のための模擬問題を解く	日本語学概論 A (講義)
B	授業最終回にこれまで学んだことの総復習を行い、同時に定期試験 のための模擬問題を解く	日本語の歴史 A (講義)
B	授業最終回にこれまで学んだことの総復習を行い、同時に定期試験 のための模擬問題を解く	日本語文法 A (講義)
B	和歌を実際に作ってもらい、それを紹介し解説	和歌文学 (講義)
B	レポートないし筆記試験を、中間、期末の2回行う	歴史
B	「課題トライアル」を行い、学生自身が到達度を知る	日本語表現法 (文章表現) (講義)
B	毎時「振り返り」を提出させ、教員からのコメントを付け返却する ことによって疑問点を明らかにする	スポーツ実習 A (実習)
B	授業時の説明やテーマや配布資料に対する振り返りレポート	女性とライフステージ(講義)

B	毎回の授業の終わりに小レポートを書かせる	心理療法Ⅰ（講義）ケースメソッドⅠ（演習）
B	受講生が期末試験の問題を考える	女性と職業生活Ⅰ（講義）
B	毎回、学んだこと理解したことを提出させた	児童福祉論（講義）
B	8回目に前半部分の理解を問う小テストを行った	ソーシャルワークⅡ,Ⅳ（講義）
B	毎回授業内容を踏まえた課題を提示してコメントを書かせ、次回でフィードバック	認知心理学Ⅰ（講義）
B	ビジネスモデルキャンパス作成の小テスト	福祉サービスの組織と経営（講義）
B	論文講読を卒論執筆につなげられるよう、最終回に研究論文の「問題と目的」の各段落の見出しを抽出した。	演習Ⅰ（演習）
B	授業冒頭で前回の授業を振り返る。	社会福祉論Ⅰ（講義）
B	前時の授業について小テスト	外国語（フランス語ⅠⅠ）
B	講義内容をふまえて毎回ワークを実施	心理（講義）
B	講義内容のレポート形式でのまとめとその添削	データ収集法
B	制作した課題作品を授業の中で披露し、他者の作品から次回の制作のヒントを見つけさせる	画像制作（演習）
B	授業の前半部分を振り返るためのテストの実施	国際関係論Ⅰ（講義）、国際協力論（講義）、日本政治論（講義）
B	大福帳（出席カード）やループリックによる振り返り	卒業研究Ⅰ以外の全授業（講義、演習）
B	課題について、繰り返し演習を実施	簿記論、税務会計論
B	講義開始時における小テスト（前回の振り返り）	経済（講義）、財政政策論（講義）、公共経済学Ⅰ（講義）
B	講義開始時、本日の内容についてレポート、学ぶ目的の明確化、確認 講義終了時、もしくは講義外の時間にて、本日の振り返り、疑問点の確認	経済（講義）、財政政策論（講義）、公共経済学Ⅰ（講義）
B	授業の内容に関する演習	数理の世界（講義）
B	振り返りシートで、自らの実践をふりかえり、次の実践への課題を見つける。フィードバックシートを実践者にわたし、評価結果から実践をふりかえられるようにした	模擬授業演習（演習）
B	前回の学習内容を取り入れた発表と学生による相互評価	日本語表現法基礎（講義）
B	前時の内容に関する演習を実施し、その解答とともに発展的内容の解説につなげる（数回実施）。	線形代数学Ⅰ（講義）
B	毎時コメント用紙を配布・前時の課題について小テスト	保育実習指導（演習）、保育指導法（（環境）演習）、子どもの保健Ⅱ（演習）
B	本時までの内容について小テストを実施	微分積分学Ⅰ（講義）
B	授業内容についてのリアクションペーパー	カリキュラム論、教育本質論
B	毎時コメント用紙を配布・前時の課題について小テスト	保育実習指導（演習）、保育指導法（（環境）演習）、子どもの保健Ⅱ（演習）

B	授業内容についての小テスト	療養支援看護論演習Ⅰ（成人期）（演習）
B	講義中の内容について、講義の最後に小テストを実施	療養支援看護論演習Ⅰ（講義）
B	前時の授業内容の復習・確認	看護管理学（講義）
B	前回の授業内容に関する小テストの実施	公衆衛生・保健統計（講義：看護）、 子どもの保健ⅠB（講義：教育）
B	毎回小テスト（事前学習の確認）+講義+演習	フィジカルアセスメント（講義+演習）
B	当日の課題などに関するレポートの提出	子どもの保健Ⅱ（実習：教育）
B	毎回の授業について教員と意見交換する用紙を作成	在宅・精神看護学概論（講義）
B	フィードバックシートをランダムに選んで次回 ppt や印刷物で紹介	心理（講義）、教育（講義）、 人間論（講義）
B	授業後のリフレクションペーパーに記載された質問やコメントについて、次の授業の冒頭で説明して学生にフィードバックした（これを前回の授業の振り返りとして活用した）	母子支援看護学概論
B	毎講義の終了時に、小テストを行った。	感染予防学（講義）、生体防御学（演習）
B	レポートは実験結果から考察できるような形式にした	感染予防学演習（演習）
B	国家試験過去問題から重要性和出題傾向を把握させる	在宅看護学概論
D,E, F,L	授業内容に関連する演習問題を事前に配布し、授業では各自が成果発表するだけでなく相互に意見交換した。	数学教材研究 A（講義）
F,H	オープンノートシステムを用いた、具体的設例にかかるグループワーク	経済法 A
E	各自が評価し合ったことを討議し次時の課題を自分たちで見つける	基幹演習、展開演習
C	授業の始めに前回の重要点の復習	全て
K	前回のリフレクションを受けた振り返りを行う 教育におけるメディア活用の実際を映像によって提示	視聴覚教育メディア論（講義・人間関係学部） 博物館情報メディア論（講義・文化情報学部）
K	テキストにはできるだけ図やイラストを多用するようにしている	染色加工学（講義）
N	実験内容のイラストで他の人に伝えられるように、イラストを中心に、 操作メモ、注意メモ、観察メモを記入するように指導している	アパレル整理学実験
N	実験課題について6～8名のグループで取り組んだ	繊維材料学実験Ⅰ（実験）
F	取り組んだ内容についてレポート作成を課し、評価した	繊維材料学実験Ⅰ（実験）
K	写真資料を必ず毎回使用して視覚的に理解を深めてもらう	西洋建築史
D	学生と話し合いながら制作を進める	インテリア実習Ⅱ
F	5-6人/グループでひとつの作品を設計する	インテリア実習Ⅱ
K・F・J	2回のグループワークによる理解、ネットでの資料収集の方法の指導を行う。	空間設計論Ⅱ

分類 C

分類	内容	科目名（形式）
C	DVD 画像、オリジナルイラストの活用した展開の工夫	調理学（講義）
C	オープンノートを活用し、冒頭で示した課題の解答を発表させる	文学（人関）（講義）、日本文化論（講義）
C	授業のテーマについて、コメントカードで、受講生の意見（無記名）をきく。次回、その一部について、再コメントをおこなう	人間論（講義）
C	毎回の資料に基づいた受講者のテーマ選択	日本文学史（講義）
C	関心を喚起し、立ち入って考えてみようという意欲をかき立てることのできる教材を、選び取る。	「教師の世界」（講義）
C	授業時の様子や「振り返り」をもとに、学生の状況を把握し、授業の展開を工夫、進度を調整	スポーツ実習 A（実習）
C	授業テーマに関連したゲストスピーカーを招聘	ライフスタイルと人間関係（講義）
C	内容をさらにシンプルにする	社会の理論（講義）
C	プログラミングを取り入れた実習	人工知能
C	重要事項については説明を繰り返す	卒業研究 I 以外の全授業（講義、演習）
C	専門用語やグラフを記入するワークブックの活用	経済学入門 A (1-130)（講義）
C	授業の冒頭で時事問題を取り上げて、経済理論と関連付けて説明する	経済学入門 A (1-130)、経済情報処理 A、国際経済論 A（講義）
C	音楽理解とコミュニケーションの方法としての存在価値を見つける	ピアノ概論（講義）
C	PDCA サイクルを意識できるようにした。（ワークシートの工夫）	模擬授業演習（演習）
C	知識の拡大・深化と技能の向上に併せた作業課題の提供	ケースメソッド I（演習）
C	具体例や模式図により講義内容の直観的理解を促す努力をしているが、残念ながら未だ不十分。	線形代数学Ⅲ（講義）
C	各パートを全員が歌唱可能にする。合唱曲を指揮することで作品の全体を把握する	合唱 I
C	本時の課題（振り返り）に次時のテーマを包含させ、各回に学ぶ内容へのスムーズな接続を図る	数学の指導法Ⅲ（講義/演習）
C	講義の 2 週前に授業資料を配布し、予習させる	療養支援看護論演習 I（成人期）（演習）
C	測定機器を用いて実際にグループで測定を実施した	産業看護学
C	高齢者体験セットをつけて高齢者の理解を促す、介護食を実際に食し、食支援の介入をイメージ化する	療養支援看護論演習Ⅱ（演習）
C,K,O	授業の映像から記述で記録をとり分析、次にその内容をモデル授業において模擬体験し展開と方法の視点を整理、次に子どもの表現内容を映像と記述から分析し、指導の理解を子ども/教師の相互から深める。	図画工作科指導法（演習）、保育内容指導法（表現 A）
B・Q	授業最後に確認プリントの実施。一般論への理解を促すために具体例を多用。・学生の学力を考慮した自作テキストの作成。	代数学基礎（講義）解析学基礎、（講義）微分積分学Ⅱ、（講義）解析学統論（講義）

B,F, H,I	学生が立てた授業（調理実習）計画を、実際に実験実習の実施後に検討会。教科書通りの計画を立てさせたり、実習をするのではなく、学生たちに計画を立てさせ、授業として妥当か実験。実習計画、反省、改善案計画はグループごとに立てさせ指定の指導内容と費用を提示し、学習できる指導案を考え、実際に行い、改善を検討。実験実習を伴う授業計画の中に、小学生にさせる事前・事後学習を設定、実際に調べ、発表。写真の活用。	家庭科（講義）、家庭科の指導法（演習）
A	冒頭で課題を示し、聞きながら解答をまとめさせる	文学（生活）（講義）
A	オープンノートを活用し、冒頭で示した課題の解答を発表させる	文学（人関）（講義）、日本文化論（講義）
B	前時の課題について練習問題	言語（生活）（講義）
H,I, J,P	早い段階で定期試験用レポート課題を示す。選択する課題によって、フィールドワークが必要になる。	文学（生活）（講義）、文学（人関）（講義）、日本文化論（講義）
K	映像や図を用いてイメージを伴う理解を促す	文学（生活）（講義）、文学（人関）（講義）、言語（生活）（講義）日本文化論（講義）
Q	学生の反応をもとにパワーポイントとテキストを毎時修正	同上
A	経験実態に応じた発問の工夫	調理学（講義）

分類 D

分類	内容	科目名（形式）
D	授業内容が一段落したところで、その内容について隣接学生と確認を行う	食品学Ⅱ（講義）
D	グループで類義語分析を行い、結論をまとめる	日本語学概論 A（講義）
D	発表者の発表に対して質疑応答を行う	日本語表現研究Ⅰ A（演習）
D	テーマを設定して、6人で討論する	ファーストイヤーゼミ（演習）
D	障害者（当事者）側からのラディカルな主張を取り挙げて、討議へと誘うきっかけづくりに力を入れる。	ケース・メソッド—障害と共に生きる（演習）
D	グループ発表の後に全体討議を行う	ケースメソッド（演習）
D	ディベートの手法の学びと実践	演習Ⅰ（演習）
D	ワークシートを用いた文献講読	ケースメソッドⅢ（演習） 演習Ⅰ（演習）
D	前回の授業内容を思い出させ、発表、さらに今回の課題を討議	ケースメソッドⅠ（演習）
D	学生の発表が終わった上で、発表のテーマについて討論する	ケースメソッドⅠ（演習）
D	学生の発表内容を素材に小グループで討論	演習Ⅰ（演習）
D	実習の事後指導として、地域別実習報告会を行った。実習の報告を地域別で行うことで、近隣地域の保育の現状が把握できるようにした。	事前・事後指導（演習）
D	グループ討論とクラス全員による意見交換	ケースメソッドⅠ（演習） 国語（書写を含む。）（講義）日本語表現法基礎（講義）

D	グループで討論をし、発表をする	ケースメソッドⅠ
D	各自が作成した指導案を評価し合い、各自の課題を見つけさせる	算数指導法（演習）
D	自分達で作成した指導案で行った模擬授業を行い、その内容について視点に沿って討議する。	音楽の指導法（演習）
D	グループで討議し、内容で大切と考えることをキーワードで短くまとめるよう指導した。	特別支援教育Ⅰ（演習）
D	他受講生の模擬授業に対する評価を通して、自らの模擬授業を再評価し、次なる課題を自分たちで見つける	模擬授業演習（演習）
D	学生同士による問題の理解	健康科学（講義）
D	各学生が提示した論文について討議した	原書講読・研究序論
D	実験では学生を5～6名のグループに分け、結果についてグループ内で討議した	感染予防学演習（演習）
E,J	研究計画書作成のために意見交換を毎時行った	原書講読・研究序論(演習)
B,E,F	前時までに学習した内容が理解できているか、毎回小テストを実施した。講義で当たった問題を黒板で解説させ、意見や疑問点を全員で出し合うことで、数学力だけでなく講義能力の向上も図った。問題演習のため各自解答時間・共同作業（相談・討論）時間・発表時間が毎時ある。	数学演習Ⅰ（演習）解析学演習Ⅲ（演習） 代数学・幾何学演習Ⅰ(演習)
L	前の回に課題を提出しておく（課題レポートとして回収、評価）。当該の回に各自のレポートに基づいて発表、討議し、最後にまとめるを行う	数学科指導法Ⅰ
F	道徳のモデル授業を実施。学生はグループになって討議し、グループワークすることにより、意見の多様性に触れ、理解を深めることができた。道徳の授業の魅力と多様な方法論について知ることができたと思う。	道徳の指導法（初等）
E	ボランティア先別の分科会を設け、直面する課題や工夫している点について討議するとともに、他の受講生に自分たちのボランティアの内容を紹介し、学んだことを報告する報告会を持った。	ふれあい実習Ⅱ（参加）
E, F, I, J	・グループによる資料検索を通しての、レポート・レジュメの作成	ファーストイヤーゼミ(演習)
H	・困難な組織・集団の事例に対する、問題解決的ディスカッション	ケースメソッドⅠ（演習）
B	授業の開始時に、前回学習した講義内容の小テストを実施するとともに復習を行う	食品学Ⅱ（講義）
K	食品素材の実物を回覧したり、捕捉説明を行いたい資料を配布する	食品学Ⅱ（講義）

分類 E

分類	内容	科目名（形式）
E	外部講師を呼んで講評プレゼンを行った	建築設計実習Ⅱ（実習）
E	グループ検討結果を発表させ、次の課題に進む	栄養教育論実習Ⅱ
E	卒業論文の中間発表をする	日本語表現研究Ⅰ A(演習)
E	一人ずつ、絵本の読み聞かせをしてもらい、みんなの感想をメモにし本人に渡す	ファーストイヤーゼミ(演習)
E	グループで類義語分析を行い、発表する	日本語学概論 A（講義）
E	各自の関心や調査結果を発表させる	ファーストイヤーゼミ（演習）演習Ⅲ（演習）ケースメソッド（演習）

E	プレゼンテーションする	現代フランスの社会と文化（講義）
E	文献他の資料探索と発表	演習Ⅰ（演習）
E	最終発表でパワーポイントを用いたプレゼンテーションを実施	展開演習（演習）
E	上記グループワークの結果を、発表する。	インターネット論
E	自己発見レポートに基づいた興味を持った職業・職種の発表	ファーストイヤーゼミ
E	与えられたテーマについてペアー又はグループで英語で話し合い、結果（結論など）をプレゼンテーションの形で発表する	Advanced English Communication（参加型）
E	各自が評価し合ったことを討議し次時の課題を自分たちで見つける	経営組織論、基幹演習、展開演習
E	簡単な対話（英語）をペアでさせる	外国語（英語 A・B）
E	各自で資料を作成してプレゼンテーションを行う	基幹演習Ⅰ（演習）、展開演習Ⅱ（演習）、卒業研究Ⅰ（演習）
E	プレゼンテーション：My 25 【グループ内・全員】	
E	できるだけパワーポイントを用いず、毎回詳細なプリント資料をワードで作製し作成して配布。プリントには図を多く取り入れ、わかりやすく。講義は指定教科書と連動させ、教科書の図表を丁寧に説明。毎回の授業後に小テストを行い、学生に記述させるとことで理解度を高めた。プリント資料をファイル整理して保存することを強く指導した。	生化学、生体防御学、栄養治療論
E	テーマに沿って各自がプレゼンを実施した	看護研究（卒業論文）
E	各自関心のある文献をもちより、プレゼンテーションを行い、文献の読解力を高める	原書講読・研究序論（講義）
E	論文の中間発表では資料を用い、最終発表会では学生各自 PPT を作成発表する（成人、老年領域で共同発表）	看護研究
E	事例に対する社会資源活用方法をグループごとに検討	社会資源活用論（講義・演習）
H,I,J	課題研究とパワーポイントによる発表	基幹演習Ⅰ（演習）
F,I,O,P	常滑市の観光まちづくりを視察し、それ以外の講義の内容を参考にしつつ、「常滑観光まちづくりプラン」を数人のグループごとに作成、プレゼンテーションした。優秀チームには常滑市長賞を授与した。	現代マネジメント実務研究 A（地域・公共） *オムニバス形式
J	課題にそって個別発表をした	入門演習（演習）
D	各自のデータをグループで検証・討議する	栄養教育論実習Ⅱ
F	与えられた課題についてグループで話し合い、発表する	ファーストイヤーゼミ（演習）
F	ペアを組んで相手と役割を交代して学修を進める	栄養教育論実習Ⅱ
A,H,I,M,O,P	設計実習において、再生課題を含めた	建築設計実習Ⅱ（実習）
D、F	エスキースをグループで行った	建築設計実習Ⅱ（実習）
K	映像の活用	建築構法計画

分類 F

分類 F	内容	科目名 (形式)
F	共同課題をグループで討議し、発表する 課題をグループで仕上げ、実践に移す	栄養教育論実習Ⅱ (実習)、 応用栄養学実習 (実習)
F	類義語分析を行う	日本語学概論 A (講義)
F	与えられた課題についてグループで話し合い、発表する	日本語文法 A (講義)
F	2人・3人組によるセリフ劇作成	小説創作 (講義)
F	協同での学習や発表を通して主体的な学びを促す	演習 (演習)
F	グループで調査テーマを決め、発表させる	ケースメソッド (演習)
F	グループで調査テーマを決め、発表させる	演習Ⅲ (演習)
F	質問した内容についてグループで話し合わせて発表させる	心理療法Ⅰ (講義)
F	テーマを与え、3～4人のグループを構成し共同で調査させる。	ケースメソッド (演習)
F	3人で調査を行い、その成果を発表する	展開演習 (演習)
F	グループ単位で、興味ある技術の調査を実施し、講義内容の習熟を図る。	インターネット論
F	与えられた英語圏のメディア関係の現象の例について意見交換をしたり (現象によって) 問題解決方法を考えたりする	英語圏メディア事情 (講義)
F	グループ毎の作業進行による学び合い	アパレル CAD Ⅱ
F	グループワーク : My 25 【4～5人グループ分け】	
F	グループワーク	英語の授業 (全て)
F	伴奏、アンサンブルの役割として、聞き役の立場と全体構造理解力を客観的にとらえる	ピアノ伴奏法 (演習)
F	課題の理解と学生による学生への教授	体育 (講義)
F	指定された活動分野および教材で、経験の再構成をコンセプトとした音楽科基礎理論を基にグループで学習指導案を作成する。	音楽の指導法 (演習)
F	ペアごとの身体診査の結果およびアセスメント記録の担当制 (教員7名) によるチェックとフィードバック	フィジカルアセスメント (講義+演習)
F	模造紙で発表媒体を作成し、グループでの検討内容をプレゼンする	社会資源活用論 (講義・演習)
F	事例を読み、グループで看護過程展開をグループワーク, 上記のグループワークの成果を発表, それに基づき学生達が演習のレクチャーを行い臨地実習にむけて課題等を明確にする	療養支援看護論演習Ⅱ (演習)
F	看護系著書の中から関心ある内容を各自選択、発表し看護の意味を探究する	ファーストイヤーゼミ
F	事前課題についてグループワーク実施	療養支援看護論演習Ⅰ (演習)
F	模擬の健康教育をグループで実施した	健康教育指導論
F	グループで課題を学習後、発表をして学びを共有する 演習内容により看護者役、子ども・母親役を演じて発表	母子支援看護論演習Ⅰ (演習)
F	子どもが病気になったときの家族の気持ちを、全員が聴取して講義に望み、グループで話し合い、発表をして小児おける家族看護について理解を深める	家族看護学 (講義)

F	母性看護過程の各ステップをグループワークで取り組む	母子支援看護学演習Ⅱ(母性)
F	成人期の健康障害のある対象者の看護過程をグループワークで取り組む	療養支援看護論演習Ⅰ(成人期)
E	与えた課題についてグループで話し合い、結果をプレゼンテーションさせる	子どもの保健Ⅱ(実習:教育)
F	主要な事例を多く取り上げグループワークで指導	在宅看護学演習
B,C, D,E, I	受講者が3~4人で班を組み調べ学習をもとに発表する。必要があれば実験する。最後に20分間の討議を行い。内容の定着を目指す。	環境の科学,理科の指導法,理科,生活科,保育指導法(環境)
E	課題に関する発表	日本語表現法基礎(講義)
E	グループワークを通じて総括した内容を,プレゼンテーションを通じて全受講生と共有する	模擬授業演習(演習)
E	討議の中でまとめた内容で大切な点をキーワードにまとめ、それに基づきクラス全員の前で発表し、自己表現力を高める場とした。	特別支援教育Ⅰ(演習)
K	株式投資ゲームによる人生と社会や経済の関係の理解	人間論(講義)
H	株式会社をつくろうによる起業体験と職業理解	人間論(講義)
H	課題(調べる、アイデアをまとめる)を提示し、その回答をもちより、グループでディスカッションをしてグループの意見をまとめる	
H	事例分析を通しての問題の発見と解決	展開演習2(演習)
H, I, K, O, P	人間関係学部のプロモーション映像づくり	デジタルコンテンツ制作(演習)
H, J, I, K, O, P	愛知県児童総合センターで展示された愛知トリエンナーレ2016プレイベントのための作品作り	編集デザイン
P, O	グループごとに、フィールドで取材・撮影、映像制作	テレビ制作演習(演習)
P, O	グループごとに、フィールドで取材・撮影、映像制作	卒業研究指導2
D	課題に対して討議し、理解を深める	栄養教育論実習Ⅱ(実習)、 応用栄養学実習(実習)
E	課題内容の気づきなどをまとめてプレゼンテーションする	栄養教育論実習Ⅱ(実習)
I	様々な調査、研究を通して、対象者の特性をとらえる	応用栄養学実習(実習)
J	学生自ら情報を図書館やインターネットから取り入れ、それを課題内容に活かす	応用栄養学実習(実習)
D, E	グループに分かれて決められたテーマについて発表、討論を行った	食品安全学
K	より詳しい参考書を用いて理解を深めた	公衆栄養学Ⅱ
N	実験結果についてグループで話し合い、考察した	食品衛生学実験
K	映像を活用し理解を促した	健康とスポーツの科学
O	シーチングを用いた立体裁断によるパターン制作	ドレーピング
C	服飾業界紙の最新ニュースから教科書の内容を繋げた展開	アパレル消費科学
K	映像や資料を活用し、理解を促す	アパレル消費科学
K	映像や資料を活用し、理解を促す	伝統衣服論

分類 G

分類	内容	科目名（形式）
G	Glexa による小テストの実施と資料配付・質問の受付	心理学概論 I（講義）対人関係の心理学（講義）ケースメソッド II, III（演習）
G	Glexa で小テストを実施した	情報資源組織論（講義）
G	オープンノートを利用した学生意見の公開	文化情報論
G	Glexa を利用した IT パスポートの問題集	展開演習 2
G	Glexa にて復習の講義ビデオを作成し、分からない部分は何度も視聴し、復習ができるようにした	療養支援看護論演習 I（成人期）
G	毎授業後、e ラーニングによる小テストを実施	教育の方法と技術（初等）（講義）
L,F	事前に資料を配布し、Glexa にて一般的な内容の講義ビデオを 10 分～15 分でいくつかに分けて作成し、課題として視聴してきた後に、講義内容をもとに症例の検討などグループワークをし、発表した	療養支援看護学概論 I（成人期）
K	・授業中に図や写真を見せるとともに、授業後に当該資料をホームページに掲載し、自主的に見られるようにした	人類学（講義）人間と科学技術（講義）生命の科学（講義）

分類 H

分類	内容	科目名（形式）
H	カウンセリング事例を毎回ロールプレイし、課題抽出と解説	栄養カウンセリング論（講義）
H	課題ごとに各自取組をプレゼンし、課題解決を学習	ファーストイヤーゼミ
H	学習した解決方法にそって事例問題に取り組んだ	ソーシャルワーク II, IV（講義）
H	指導案を作成し、模擬授業を行う。	情報科の指導法 I
H	課題について議論	基幹、展開ゼミ
H	my 25（学生本人の 25 歳の将来を 1 枚のシートに描かせる）	ファーストイヤーゼミ
H	オープンキャンパスの来場者を増やすアイデアを考えることで課題解決能力の育成と少子化による社会的変化等の理解	人間論（講義）
H	My 25 Plan の作成による人生設計とその達成のための方法の検討	ファーストイヤーゼミ（演習）
H	課題を与えてレポートの作成。コンテスト形式で優秀作を表彰した	観光経済学
H	ワークシートを配付し、課題に対する回答を求め、次時に代表的な回答や特徴的な回答を紹介する	消費者行動論 A
H	ワークシートを配付し、課題に対する回答を求め、次時に代表的な回答や特徴的な回答を紹介する	消費者問題論（講義）
H	先輩の看護研究（卒業論文）が論文掲載されたものを用い、文献のクリティークを行った。看護研究の理解を深めるとともに、卒業時までどのレベルまで追求できるか、看護研究の可能性や視野を広めることに役立てた	原書講読・研究序論（講義）4 名
LP	星ヶ丘三越のデパ地下の調査	人間論等の受講者のうちの希望者
LP	LIXIL の見学によるトイレの調査	基幹演習 I（演習）

I,J	学外の論文コンクール等への応募	基幹演習 I (演習)
E,J	当日の授業内容について学生が質問を出し、担当学生がインターネット、図書館で調べて、次の授業で発表する	公衆衛生学 II (講義)
K	テーマに即した、実物調査用紙・資料、映像の活用	公衆栄養学 II (講義)

分類 I

分類	内容	科目名 (形式)
I	レポート内容に、身の回りにあるものを新たな視点で見つめ直す調査・情報収集をさせる	感性デザイン論 (講義)
I	インテリア空間の調査	インテリアデザイン論
I	グループでの資料調査、インタビューの実施	展開演習 (演習)
I	授業内容で興味のある技術や事柄について、個人別に調査を行い、講義内容の習熟を図る。	通信ネットワーク論
I	相山歴史文化館の見学による自校史理解と学習目標の明確化	ファーストイヤーゼミ (演習)
I	課題について各自で調査・情報収集を行う	基幹演習 I (演習) 展開演習 II (演習)
I	図書館を利用した事前調査あるいは課題のための調査	日本語表現法基礎 (講義) ケースメソッド I (演習)
I	実習計画を立てるに当たり、市場調査を行わせる。	家庭科 (講義)、家庭科の指導法 (演習)
H	各自関心のあるテーマにもとづき、研究を進める	看護研究
K	人数も多いため、映像を活用し、関心を持たせた	健康とスポーツ
C	教育実習の事前に、教職実践演習でのインタビューの説明もしておき、教職という仕事を実習の中でも客観的にみられるようにし、調査の足掛かりを作っておくよう指導する	事前・事後の指導、教育実習、教職実践演習 (中・高)
D,E	受講者全員に、教員にインタビューを行わせ、教員インタビューを発表・討論をし、知識を共有する	教育実践演習 (演習)
J	課題本を講読し、グループで発表する	演習 I (演習)
P	日常的な人間行動の観察に関する調査を東山動物園で行い、報告書を作成した	ケースメソッド II (演習)
P	現地調査	インテリア実習
E	制作した課題について、まとめてプレゼンテーションをさせる	建築設計実習 III (実習)
Q	学生の理解、関心を基に、パワーポイントを毎時修正	給食経営管理 II
J	課題として関心のある分野を論文検索や資料作成をすることで意識を高める	ファーストイヤーゼミ
J	ネットで情報収集させる	First Year ゼミ
J	インターネットによる統計情報の収集とその活用	経済情報処理 A (講義)、 基幹演習 I (演習)
J	図書館ガイダンスによる資料収集の方法の修得	基幹演習 I、ファーストイヤーゼミ (演習)
J	パソコンによる資料整理やレポートの作成	基幹演習 I、ファーストイヤーゼミ (演習)

分類 J

分類 F	内容	科目名 (形式)
J	図書館におけるレポートをサポート講座	ファーストイヤーゼミ(演習)
J	グループで選んだ課題について先行研究を収集する	日本語表現法(文章表現) (講義)
J	発表のための参考文献探しを行う	日本語学概論 A (講義)
J	インターネットによる情報の検索と収集	ケースメソッドⅢ(演習) 演習 I (演習)
J	図書館のラーニングコモンズを使用し、研究に必要な資料の検索方法のレクチャーを受ける回を設ける。	展開演習 2
J	図書館利用のための授業と課題	ファーストイヤーゼミ
J	図書館でネットの資料を収集して小論文を書いた	ファーストイヤーゼミ
J	大学における学習の仕方について、一連の流れでおこなう	ファーストイヤーゼミ (講義・演習)
J	課題に沿って図書館利用やネット検索を実施した	ファーストイヤーゼミ
J	大学における学習の仕方について、一連の流れでおこなう	ファーストイヤーゼミ (講義・演習)
E	課題に関する資料の検索と収集、結果のまとめの発表	展開演習 2 (演習) ファーストイヤーゼミ(演習)
K	インターネットや配付資料を用いて最新の事例を提示する	消費者問題論 (講義)
K	課題に関する資料の検索と収集、映像の活用	助成とライフコース(講義) 教育社会学 (講義)

分類 K

分類	内容	科目名 (形式)
K	源氏絵など絵画資料の活用	源氏物語精読 (講義)
K	あらかじめファイルや表、試料等を用意して理解を促す	繊維材料学実験Ⅰ・Ⅱ(実験)
K	教科書とは別に、理解しやすい資料を活用	臨床医概論 (講義)
K	映像や資料を活用	認知心理学Ⅰ (講義)
K	映像や図を用いてイメージを伴う理解を促す	ジェンダー・セクシュアリティ論Ⅰ(講義)教育 (講義) ケースメソッド (演習) ライフスタイル と人間関係(講義) 身体 としての人間 (講義)
K	心理療法場面の絵画や箱庭作品の映像や資料を示して解釈させる	ケースメソッドⅠ(演習)
K	テーマにそった DVD 視聴による制度やサービスの理解を促した	児童福祉論(講義) ソー シャルワークⅣ (講義)
K	ビジネスモデルキャンパスを用いて視覚的筋道の理解を深めた。	福祉サービスの組織と経営 (講義)
K	映像から階級の再生産や生徒文化について理解を促した。	青少年論Ⅰ (講義)
K	講義内容に関わる映像の利用	人間形成の歴史Ⅰ(講義) 高等教育論 (講義)

K	教科書に説明のない専門用語の解説を別紙で配布。	社会福祉論Ⅰ（講義）
K	映像を用いてイメージを伴う理解を促す。	ケースメソッドⅡ（演習） 演習Ⅱ（演習）
K	映像・資料を用いての体験的理解	心理（講義）
K	講義に関連する映像資料から批評能力を養う	メディア文化（講義）
K	映像資料を用いて、イメージを伴う理解を促す	情報サービス論（講義）
K	映像や資料を用いて説明し理解を促す。	芸術（講義）
K	映画に表現された心理学・社会学的意味に関する評論	展開演習2
K	映像を用いて、イメージを伴う理解を促す。	インターネット論（講義）、 情報セキュリティと倫理 （講義）、通信ネットワー ク論（講義）
K	理解を深めるための実例を映像資料で見せる。	博物館概論、博物館展示論
K	映像や写真資料を用いてイメージを伴う理解を促す。	博物館概論、博物館展示論、 ファーストイヤーゼミ、文 化情報論、基幹演習、展開 演習2
K	映像を用いて英語圏の生活ぶりなどについての理解を促す	ホームステイ・イングリ ッシュ（講義） 海外言語文化事情B（講義）
K	映像や図を用いてイメージを伴う理解を促す	経営管理論A 経営組織論
K	書画カメラを使用し、理解を促す	租税法A
K	PPTにおいて画像、アニメーションを用いた講義	経済（講義）、財政政策論 （講義）、 公共経済学A（講義）
K	映像を用いて理解を促す	経営学入門A（講義）
K	映像や図を用いてイメージを伴う理解を促す	経済法A
K	映像や図を用いてイメージを伴う理解を促す	商法A
K	パワーポイントや配付教材の活用と学生の理解状況に応じた見直し	卒業研究Ⅰ以外の全授業 （講義、演習）
K	練習問題の配付 映像や資料の活用：ポスター作り	経済学入門A（1-130）、 経済情報処理A、 国際経済論A（講義）
K	ビデオ（映像や図）による理論や知識の裏付け	教育の方法と技術（初等） （講義）
K	新旧の小学校音楽科の授業映像を見て、子どもや教師の様子から、 それぞれにおいて何が学力の対象とされているかについて考える。	音楽の指導法（演習）
K	DVD映像を活用し、イメージを膨らませながら、かつ理解しやすい 学びの場面を用意した。	特別支援教育Ⅰ
K	CGを用いて、3次元イメージを伴う2変数関数の理解を促す	微分積分学Ⅲ（講義）
K	映像教材を通して性的マイノリティについて学んだ後、性同一性障 害をもち、現在、小学校で男性教諭として働いている卒業生を招い ての講演会を行い、性的マイノリティに対する理解と支援の方法に ついて考えることができた。	人間論

K	画像を用いたイメージの理解	健康科学（講義）
K	育児、高齢者、カビ・ダニ、教育実習など想像しにくいものを映像で現状をみせ、説明する。	家庭科の指導法Ⅰ、家庭科
B	各自の授業の様子をDVDで映像化し、各自自身で評価させる	模擬授業演習（演習）
F	・同じ映像をみて、グループで作品をつくる	ケースメソッドⅠ（演習）
B	授業終了時に、確認テスト	臨床医概論（講義）
B	・各自の授業の様子をDVDで映像化し、各自自身で評価させる	模擬授業演習（演習）
B	前時までの内容の理解をするための小テスト	アパレル素材学（講義）
B	家族に関する映画を3本鑑賞し、それぞれについてレポートを作成させる	ファーストイヤーゼミ（演習）

分類 L

分類	内容	科目名（形式）
L	当日の実験授業内容を学生が学生に解説する	食品学実験Ⅱ
L	各自、分担部分の「学習指導要領解説」を読んできて、班の仲間にその部分の内容を分かりやすく解説する。	道徳の指導法（初等）
B	予定授業終了後、実施事項の確認と小テスト	食品学実験Ⅱ

分類 M

分類	内容	科目名（形式）
M	人間関係トレーニング	ケースメソッドⅠ（演習）
M	作業手順を発表、討議	ケースメソッドⅠ（演習）
M	おはなしの実演家を招聘し、おはなし会ワークショップを開催した	読書と豊かな人間性（講義）
M	ワークショップ: My 25	経済学入門 A（1-131）、 経済情報処理 A、 国際経済論 A（講義）
M	My 25 のワークショップを行われた	ファーストイヤーゼミ
M	「布ちょっぴんワークショップ」を通して、発展途上国の社会や保育の現状について知ることができた。	人間論
F,P	NPO と連携し子どもと宿泊・生活を共にしながらワークショップを展開、記録、分析。村の園・学校と協力しその地において参加型ワークショップを計画、展開し、その展開と内容を記録し討議し分析。	ケースメソッドⅠ（演習）
F,E	グループを組ませ、手遊び交流会を行い、学年を越えた交流を行い、手遊びを発表する。実習前に行うことで、手遊びのレパトリーを増やせるようにした。	事前・事後指導（演習）

分類 N

分類	内容	科目名（形式）
N	授業内で小実験や課題を行って現象を体験させ、日常生活の問題に結びつけさせる	認知心理学Ⅰ（講義）
N	授業内で小実験や課題を行って現象を体験させ、日常生活の問題に結びつけさせる	心理統計Ⅰ（講義）
N	心理検査の実施と分析	心理学実験（演習）

N	調理実習と被服実習を材料や分量、指導内容の検討として実験的に行う。教科書に載っている事項や、知らなければならない事項に関し、できるだけ実験や実物提示で行う	家庭科（講義）、家庭科の指導法（演習）
N	グラフ用紙上に実際に具体的な図を描かせる	幾何学要論

分類 O

分類	内容	科目名（形式）
O	図学の作図課題を模型制作により確認	基礎製図（実習）
O	自分自身の絵画や箱庭作品を作成し分析させる	ケースメソッド I（演習）
O	古典の臨書を示範したり、学生にも練習させたりして、書の美を解析する。	芸術（講義）
O	自分の撮った写真を使い、課題（CD ジャケット等）を制作	画像制作（演習）
O	映像分析とインタビューの実践による映像制作	テレビ制作演習（演習）
O	制作の必要な電子課題を出す	コンピュータと情報 I
O	説話を題材とした絵巻または紙芝居のグループ制作	ケースメソッド I（演習）
O	実際に調理実習や小物制作実習を行う	家庭科（講義）、家庭科の指導法（演習）
O	発表した内容、他のグループの発表から学んだことなどを A 3 用紙に手書きでまとめ、分かりやすくまとめるよう指導した。	特別支援教育 I（演習）
B	前時の課題についての評価（コメント）	基礎製図（実習）

分類 P

分類	内容	科目名（形式）
P	社会見学	女性と社会 II（講義）
P	受講者の身近にいる老人から、記憶話を聞きとらせ、生活史を考えさせる。	演習（演習）
P	地元の公立図書館のレファレンスサービスを各自で見学しレポートをまとめる	情報サービス論（講義）
P	社会教育主事の職務に関する調査実習	社会教育演習（演習）
P	相山歴史文化館の展示を見学し、ワークシートを作成する。	博物館概論
P	博物館など施設を見学し、実物を通して学ぶ機会を授業の中で設ける。	展開演習 2
IE	各自「日豪比較」できるテーマを持ち、現地で調査やフィールドワークを行い、研修の最後に関地でお世話になったスタッフや先生方を招き、英語で報告会を行う。その報告をもとに報告書を作成する。	海外教育研修 II
M	現地の保育園・幼稚園・小学校で 1 週間の実習を行う。また現地の日本語補習校において授業実習を行う。	海外教育研修 II（実地研修）
F	KJ 法実技	社会調査法（講義）
H	アンケートの企画と作製（実技）	社会調査法（講義）
I	住み方・使い方調査（調査レポートの作成）	社会調査法（講義）
O	線の練習、住宅コピー、模型制作など	基礎製図（演習）

分類 Q

分類	内容	科目名（形式）
Q	授業開始時に復習し理解できたかの確認をする	臨床栄養学（講義）
Q	次週の実習に関する課題提供をする	臨床栄養学実習 I
Q	エクセルやワードの演習課題をとくための基本操作をデモする	栄養情報処理演習（演習）
Q	小学校で絵本の読み聞かせを選抜メンバーが実施し、次週にその報告会をして、読み聞かせの意義を共有する	読書と豊かな人間性（講義）
Q	ゲストスピーカー（実務者）による事例等実務情報の提供	ビジネスと情報（講義） キャリアデザイン（講義）
Q	授業終了時に、質問・コメントを学生に記入してもらい、次回の授業時に全員に対してフィードバックを行う。	全科目
Q	研究成果をもとに、試験問題を学生に作成させる	都市計画（講義）
Q	課外授業（施設訪問）	基幹演習 I（演習）、展開演習 II（演習）
Q	リフレクティブ・ラーニング（reflective learning）	英語の授業（全て）
Q	スモールステップからの理解と上達	体育の指導法（演習）
O	パン、うどん、こんにゃく、福神漬けなどをつくる実習のため、事前にデモしてみせる	食品学実習（実習）
L	15 回分のパワーポイントを事前に公開	都市計画（講義）
H,F,D	1 回目に 6 つの課題を明示し、このうちの 3 課題をグループワークで研究するよう指示	都市計画（講義）
E	研究結果を全員の前で発表させる	都市計画（講義）

Ⅱ. 3 教員研修小委員会の活動記録

(任期：平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日)

教員研修小委員会報告 2015

全学 FD 委員会は、2014 年度に委員会内に教員研修小委員会を設置したが、この小委員会は、2015 年度は北岡崇（国際コミュニケーション学部）、石井雅治（現代マネジメント学部）、及川佐枝子（生活科学部）の三名で構成された。

2015 年度の計画は下記の①②③④⑤、計 5 項目からなっていたが、①⑤の 2 項目以外の項目、つまり②③④の三項目は「大学改革アクションプラン 2015」【資料 3】にも課題として記載されていたものである。各項目に即して、2015 年度実施計画／検討・実施スケジュール案、ならびに実際の実施結果は次のようなものであった。【資料 1・資料 2】

①研究を深化、発展できるよう科学研究費・学園研究費取得のための研修会等を行う。／教員が大学に集まりやすい日として、健康診断（午前）が行われる 9 月 10 日（木）の午後に実施する。

——予定通り実施。31 名の教員が参加した。

②組織人としてのモラルを高めるために、服務規律などの研修を教職員に義務づける。／組織人としての責務の自覚を高めるための、服務規程等の研修律などの研修。【対象】全教職員を対象に毎年開催するが、初年次のみ全員参加。その後の年度は、当該年度に新たに就任した教職員、及び 4 年度前に研修を受けた教職員のみを対象とする（服務規程等の変更は多くはないので、4 年に 1 度研修を受ける）。【時期】時期は教員が集まりやすい 9 月に、他の研修会と連続して実施することが望ましい。ただし、初年度は、実施可能な時期に適時実施。【内容】まず、学長に、組織人としての責務の自覚を持つことの大切さ、また服務規程等を十分理解することによって、この自覚がいかに高まるかを、事例を交えながら説いていただく(15 分)。次いで、総務部長に、服務規程等について重要事項等を、実務上の取り扱いや、よくある違反事例、罰則の適用例を含め、解説していただく。その際、特に、組織人としての責務の自覚と具体的に結びつく部分を、明確にしてください(60 分)。最後に、③質疑応答(15 分)（計 90 分）。

——2016 年 3 月 8 日に「組織人の責務に関する教職員研修」を開催した。ただし時間配分については、学長が 10 分間で、総務部長が 20 分間で上記の内容に即した要点を解説し、さらに戸部学長補佐が上記の内容を補足するものとして研究倫理に関する解説を行った(20 分間)。10 分間の質疑応答の時間を含め、60 分間の研修であった。なお、この研修会には 108 名の教職員が参加した。【資料 4 と資料 5】

③ FD 専門家を活用し、教員のスキル養成（外部研修会への派遣、学内 FD 研修会の実施）を推進する。／【外部研修会】毎年 3 月に京都で実施予定の研修会や、その他外部で行われる FD 関連の研修会の情報を集める。【内部研修会】名古屋大学高等教育研究センターから講師を招き、本学教員全員を対象にした研修会を行う。研修テーマは未定。戸部学長補佐に講師との交渉を依頼する。「ハラスメント研修」「Glexa 研修」と合わせて 9 月 11 日（金）に実施するのが望ましい。

——外部研修会については、教職員に各種研修会に関する情報を適宜、伝達し参加を呼びかけた。毎年のように行われる八王子セミナーハウスでの研修会に 2015 年度は 2 名派遣した。内部研修会については、計画通り実施した。9 月 11 日、講師として名古屋大学高等教育研究センター所属の中島英博准教授を招き、研修会を開催した。研修会のタイトルは「発問で思考を促す授業をつくる」であった。なお、この研修会には全教員 239 名中 177 名が参加した。また、「Glexa 研修」（「Glexa 活用のための実技講習」）にも 12 名の参加者があった。

④ FD-SD の合同研修会等を実施し、先進的大学の活動情報を収集し、共有化を図る。／本学活性化経費予算で行われる SD 活動の報告会や研修会への参加を教員にも呼びかける。

——この計画の実施は、上述のスケジュール案通りのものではなかったが、上記の②の実施と重なるところが多く、計画②の実施をもって代えることにした。

- ⑤外国語での教授法に関する FD 研修会／6 月 30 日に実施予定。テーマは「英語で専門科目を教えるためのワークショップ」。

——予定通り実施した。参加者は 13 名であった。【資料 6】

最後に、上記の活動に関わる資料の名称は下記の通り。

- 資料 1. 平成 27 年 FD 委員会教員研修小委員会(WG 3) 計画書
- 資料 2. 平成 27 年度 FD 委員会教員研修小委員会(WG 3) ③-2 計画書
- 資料 3. 椋山女学園大学改革アクションプラン 2015 【全体】（中間検証シート）
- 資料 4. 組織人の責務に関する教職員研修
- 資料 5. 研究倫理に関する責務と心構え
- 資料 6. 英語で専門科目を教えるためのワークショップ

北岡 崇

【資料1】平成27年 FD委員会 教員研修小委員会（WG3） 計画書

	平成27年度実施計画	検討・実施スケジュール案
③-1	各教員が学術研究を深化、発展できるよう科学研究費・学園研究費取得のための研修会等を行う。	教員が大学に集まりやすい日として、健康診断(午前)が行われる9月10日(木)の午後に実施する。
③-2	組織人としてのモラルを高めるために、服務規律などの研修を教職員に義務づける。	時期は教員が集まりやすい9月に、他の研修会と連続して実施することが望ましい。ただし、初年度は、実施可能な時期に適時実施。
③-3	FD専門家を活用し、教員のスキル養成(外部研修会への派遣、学内FD研修会の実施)を推薦する。	外部研修会：平成28年3月に京都で実施予定の研修会に参加、その他にも外部で行われるFD関連の研修会の情報を集める。 内部研修会：名古屋大学高等教育研究センターから講師を招き、本学教員全員を対象にした研修会を行う。研修テーマは未定。戸部先生に講師との交渉を依頼する。「ハラスメント研修」「Glexa研修」と合わせて9月11日(金)に実施すべく努力中。
③-4	FD-SDの合同研修会等を実施し、先進的大学の活動情報を収集し、共有化を図る。	本学活性化経費予算で行われるSD活動の報告会や研修会への参加を教員にも呼びかける。
③-5	外国語での教授法に関するFD研修会	6月30日に実施予定。テーマは「英語で専門科目を教えるためのワークショップ」。

【資料2】平成27年度 FD委員会教員研修小委員会（WG3） ③-2計画書

2015/7/24
石井（雅）

平成27年度実施計画

組織人としての責務の自覚を高めるための、服務規程等研修。

検討・実施スケジュール案

対象：基本的に全教職員。ただし、毎年開催するが、初年度のみ全員参加。その後の年度は、当該年度に新たに就任した教職員、および4年度前に研修を受けた教職員とする（服務規程等の変更は多くないので、4年に1度研修を受ける）。

時期：教員の集まりやすい9月に、他の研修会と連続して実施することが望ましい。ただし、初年度は、実施可能な時期に適時実施。

内容：①学長に、組織人としての責務の自覚を持つことの大切さ、また服務規程等を十分理解することによって、この自覚がいかに高まるかを、事例を交えながら説いていただく(15分)。②総務部長に、服務規程等について重要事項等を、実務上の取り扱いや、よくある違反事例、罰則の適用例を含め、解説していただく。その際、特に、組織人としての責務の自覚と具体的に結びつく部分を、明確に説いていただく(60分)。③質疑応答(15分)（計90分）。

以上。

【資料3】 梶山女学園大学改革アクションプラン 2015

相山女学園大学中期計画			中期計画第1期 【H26年度～H28年度】 最終目標(達成ビジョン)	実施計画 平成27年度	関係会議	
大分類	中分類	小分類				
0 「相山女学園大学」の個性・魅力の明確化と明示	1 育成する人材像の明示		相山女学園大学の学生として卒業時に身につけていることが期待される能力として「相大学生コンピテンシー」(仮称) (「●つの力」(仮称))として整理し、今後の教育改革や教育・学生支援の指針とする。	平成28年度に向けて、学部学科の目的、学部学科のディプロマポリシー、社会において求められている能力なども踏まえた上で、「相大学生コンピテンシー」(仮称) (「●つの力」(仮称))に向けた具体的な検討を行う。	大学運営会議 (大学IR室)	
	【重点項目】 2 「人間になろう」の教育理念を共有・展開する。		学生及び教職員が教育理念「人間になろう」の意味を理解し、学修、教育・学生支援など、学生・教職員がそれぞれの日々の活動の中で、教育理念を意識しながら行動できるようにする。	教育理念「人間になろう」をわかりやすく伝えるためのキャッチコピーを策定する。 「人間になろう」の現代的解釈に基づき、「人間論」の教授内容、授業計画、実効的運営方式等を設定する。 教育理念「人間になろう」の意味や「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」などに対する相山としての基本方針を定めた「相山女学園大学憲章」(仮称)をわかりやすくまとめ、教職員・学生等に周知する。	大学運営会議 人間論WG 人間学研究センター運営委員会 大学運営会議	
	【重点項目】 3 7学部を有する総合大学としての強みを形成・強化する。		学部・学科の枠組を越えた教育・学生支援の仕組み、共同研究、共同プロジェクトを推進する仕組みを構築する。	中期計画第2期に向けて、本学の現状と特性を分析し、総合大学としての強みについて再整理する。 学部・学科の垣根を越えた学生の学びの支援、学生間の交流・共同活動事業、教員間の共同事業を推進する仕組みをつくる。	大学改革審議会 大学運営会議 (大学IR室) 大学運営会議 全学教務委員会 全学学生委員会	
	【重点項目】 4 伝統ある女子大としての魅力を明示する。		相山の魅力を再検証し、学生・教職員の間で共有するとともに、学外にも分かりやすくPRする。	大学IR室を中心に学内外の各種調査結果等も踏まえた相山の魅力の再検証を行い、明確化する。 大学広報戦略ワーキンググループを中心に広報戦略を立案し、学内外に分かりやすくPRする。	大学IR室 大学広報戦略WG	
	5 保育園・幼稚園から大学院までを有する総合学園としての強みの形成と強化		学園の各校(園)がそれぞれの個性を活かしつつ、相互の連携を密にし、教育プログラム、各種行事の合同実施など、女子総合学園としての魅力、強みを活かした活動ができる仕組み・体制を構築する。	学園連絡会議、学園所長会議等の学校間の協議の場を活用し、総合学園としての強み、弱みの再検討を行うとともに、各学校・園との連携強化に向けた具体的施策について協議し、推進する。 併設各校(園)との連携協力事業、相互教育プログラムを計画し、平成27年度中に実施可能なものについては実施する。(併設中高との教育課程連携事業(キャリア教育)、学校間連携海外研修プログラム等)	大学運営会議 学園連絡会議 学園所長会議 大学運営会議 全学教務委員会 全学学生委員会 国際交流委員会	
I 教育・研究の質的転換	1 教育理念等の共有	(1) 掲げられた目標を確実に達成する共通の使命感を持つ。	「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」などについて、相山としての基本方針を定め、教職員が共通認識を持つ。	「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」などに対する相山としての基本方針を定めた「相山女学園大学憲章」(仮称)を策定する。(課題0-2と連動)	大学運営会議	
		教育理念・ビジョンの全学的な共通理解と認識を持つ	教職員が相山の現状を正確に把握するとともに、「相山女学園大学中期計画」「改革アクションプラン」など相山の改革方向性について、共通認識の下、全学を挙げて教育改善・改革活動に取り組む。	「中期計画」「改革アクションプラン」など、相山の改革の方向性をわかりやすく伝えるためのリーフレットを作成する。 相山の置かれている現状を客観的かつ正確に把握するための「IRレポート」(仮称)を作成し、学内で共有する。	大学運営会議 大学IR室	
	2 魅力ある学部・学科・専攻づくり	【重点項目】 (1) 教育課程の体系性を点検し、改善の方向性を明確にする。	教育課程の体系性を再検証し、学部の目的や3つのポリシーに基づいた体系的な教育課程を構築する。	全学的視点で、教育課程の体系性について再検証を行う。 カリキュラムの体系性に基づき、関連授業科目を明確にし、ナンバリング及びカリキュラムフローを作成する。	大学運営会議 全学教務委員会 大学運営会議 教育内容検討会議	
			【重点項目】 (2) 教育科目を整理・統合する。	学部・学科の目的や3つのポリシーを具現化するための、より魅力的な教育課程を実現する。	大学運営会議の下に「全学カリキュラム検証部会」(仮称)を設置し、全学的視点で客観的に検証する。さらに、学部・学科の体系性に沿わない科目を各学部「教育内容検討会議」において整理・統合する。	大学運営会議 教育内容検討会議 全学カリキュラム検証部会(仮称)
		充実した教育内容を持つ魅力ある学部・学科・専攻をつくる。	【重点項目】 (3) 学部の垣根を超えた連携強化による魅力づくりをする。	学部・学科を超えた魅力ある授業連携等が可能なかを模索する。	学部・学科を超えた魅力づくりのための授業連携や企画等を模索する。	大学運営会議
		(4) シラバスを充実する。	学生が自主学修へ転換する効果的なシラバスとなるよう内容を検証し、確実に活用されるための仕組みを構築する。	シラバス内容の検証・改善を行い、充実したシラバスが作成できる要綱を提示する。 初回の授業でシラバスを用いた授業概要等の説明を必ず実施する。	全学FD委員会 全学FD委員会	

相山女学園大学中期計画			中期計画第1期 【H26年度～H28年度】 最終目標(達成ビジョン)	実施計画 平成27年度	関係会議
大分類	中分類	小分類			
Ⅰ 教 育 ・ 研 究 の 質 的 転 換	3 教職員の実質向上	(1)専門領域における 学術研究を深化し発展 させる。	科学研究費・学術研究費に申請する 教員を増やし、研究活動を活性化 する。(10(2)と連動)	各教員が学術研究を深化、発展できるよう科学研究費・学 術研究費取得のための研修会等を行う。(10(2)と連動)	全学FD委員会
		(2)授業改善、授業支援 及びアクティブラーニング を推進する体制をつくる。	組織的な授業支援・改善(アクティ ブラーニング、PBL、ICT等新たな 教育手法に関する研究・全学的な 推進など)、教職員の人材育成 (FD・SD)等を専門的に行う「教育 支援センター」(仮称)を設置する。	①組織的な授業支援・改善(アクティブラーニング、PBL、 ICT等新たな教育手法に関する研究・全学的な推進など)、 教職員の人材育成(FD・SD)等を専門的に行う体制を構築 する。 ②先進的授業方法の情報共有を促進する。 ③授業評価アンケートの内容を改善し、実施する。 ④授業評価結果を開示し、授業改善に活用する。(ベスト ティーチャーによる授業公開、評価の低い教員への助言や 改善) ⑤授業改善の組織的PDCAサイクルを確立する。(学部FD 委員会、教育内容検討会議で授業方法の検証、改善提案 を行う。学期末に授業改善のための振り返り週間を設定す る。) ⑥ラーニングコモンズを活用した学修支援プログラムの充 実と、学生への浸透と定着を図る。	全学DF委員会 学部FD委員会 教育内容検討会議 図書館運営委員会
		【重点項目】 (3)FD・SD活動を活性 化し、推進する。	教員、事務職員、学生が連携し、F D・SD活動を通じてスキルアップを 図る。	0 組織人としてのモラルを高めるために、服務規律など の研修を教職員に義務づける。 ①FD専門家を活用し、教員のFDスキル養成(外部研修会 への派遣、学内FD研修会の実施)を推進する。 ②FD・SDの合同研修会等を実施し、先進的大学の活動情 報の収集し、共有化を図る。 ③成績評価(GPA)、ルーブリック評価の活用方策等につい て検討する。	全学FD委員会 学部FD委員会 教育内容検討会議 SD委員会
	4 高大接続、社会連 携、国際連携の強化	(1)入学前教育を確立 し、改善する。	相山にとって必要な入学前教育の 内容を整理し、「相山入学前教育プ ログラム」として確立する。	入学試験合格者に対するモチベーションの維持・向上、入 学者の定着率のアップにつながるよう入学前教育(スクー リング)を12月、1月、3月に実施する。(実施内容の見直し、 支援体制の整備)	大学運営会議 入学基本事項検討委員会
		【重点項目】 (2)併設校のみならず 特定高校との連携を深 める。	併設校・連携協定校と教育・研究、 入試、キャリア形成の連携イベント を実施する。	「入学前教育検討WG」(仮称)を設置し、入学試験合格者 に対する基礎学力の向上や学習習慣を身につけるための 教材開発を行う。	大学運営会議 入学基本事項検討会議 教育内容検討会議
				「入学前教育検討WG」(仮称)を設置し、高校生対象の授 業、講座等の単位化に向けた調査・検討を行い、単位認定 制度を整備する。	大学運営会議 入学基本事項検討会議 教育内容検討会議
		【重点項目】 (3)地域及び企業連携 並びに国際連携を拡充 する。	併設校以外の高等学校との連携を 5校に増やす。	連携協定校の増加を図る。(学部学科、専門課程などの連 携も含む。家庭科、商業科との連携など)	大学運営会議 入学基本事項検討会議
				①「高大連携協議会」を通じて、併設校との高大連携事業と して、入試、教育、キャリア教育のための合同事業を行う。 ②併設校以外の連携協定校とは、大学見学会、模擬授業、 図書館等の優先利用などを通じて連携強化を図る。 ③高校生に対して祝日の授業日をオープン授業日とし、休 暇受講イベントの実施を検討する。	大学運営会議 入学基本事項検討会議 キャリア育成センター運営委員会
	5 在学生へのサポート 体制の充実	【重点項目】 (1)学生の主体的学習 意欲向上を喚起する仕 組みを構築する。	「地域・社会貢献センター」(仮称) を設置し、地域や企業からの要請 に対応できる体制を整える。	①「地域・社会貢献センター」(仮称)の設置に向けての調 査、検討を行う。 ②地域や企業からの委託研究・講演・講座等の状況をデー タベース化し、公開する。 ③地域や企業による外部評価を行う仕組みを整備し、評価 結果を公開する。 ④学生ボランティア体制を整備し、地域・企業との協働事業 に参加させる。 ⑤本学の強みを活かした国際連携について調査・検討を行 う。	大学運営会議 エクステンション運営委員会 全学学生委員会
				「学修・生活指導教員制度」を実質化し、学生の主体的学習 を支援する。	全学教務委員会
				学部毎に様々な「学生・チャレンジ目標」を設定し、学生に チャレンジさせ、教員が支援する。	大学運営会議
				科目ごとに「学生アドバイザー・ピアサポーター」制度を設 け、学生の相互支援、学習意欲の向上を図る。	全学教務委員会
		【重点項目】 (2)学生の資質・適性に 合ったキャリア育成体制 を確立する。	「入口(入学)」から「出口(卒業)」、 さらには「卒業後」までを含めた支 援体制を構築するとともに、キャリ ア教育とも連動させ、「トータルライ フデザイン教育」を実質化する。	教員・学生への説明会の開催、ハンドブック作成などにより 、学修ポートフォリオの活用を促進する。	キャリア育成センター運営委員会
				図書館におけるラーニング・コモンズの有効利用・自主学習 の浸透を図るため、利用マニュアル等を整備し、利用ガイド ンス、図書館ツアー等を充実する。	図書館運営委員会
				キャリアアップの仕組みやプログラム(学生支援プログラ ム)を設定する。	キャリア育成センター運営委員会
				学生にとってキャリアアップの仕組みやプログラムがわかり やすくなるようなパンフレット・資料等を整備する。	キャリア育成センター運営委員会
	6 在学生へのサポート 体制の充実	【重点項目】 (3)学生の資質・適性に 合ったキャリア育成体制 を確立する。	「入口(入学)」から「出口(卒業)」、 さらには「卒業後」までを含めた支 援体制を構築するとともに、キャリ ア教育とも連動させ、「トータルライ フデザイン教育」を実質化する。	キャリア育成センターの教育、支援内容、結果等について検証 する。	キャリア育成センター運営委員会
				就職内定者等による就活サポーターの制度を創設し、就活 に活用する。	キャリア育成センター運営委員会
				キャリア・カウンセラーの育成を支援・推進する。	キャリア育成センター運営委員会
				学生の就職状況を確実に把握し、就職活動停滞学生を早期 発見し、適切な指導ができるようS*mapと連動した「就職 状況把握システム」を導入する。	キャリア育成センター運営委員会

相山女学園大学中期計画			中期計画第1期 【H26年度～H28年度】 最終目標(達成ビジョン)	実施計画 平成27年度	関係会議
大分類	中分類	小分類			
Ⅰ 教育・研究の質的転換	6 教養教育、キャリア教育、生涯学習等の充実 魅力ある多様な教育を提供する女子大学を目指す	(1)教養教育の開放化・実質化・充実化を進める。	教育理念「人間になろう」を具現化するための教養教育カリキュラムを再構築・充実させる。	教養教育科目のカリキュラムマップあるいはナンバリングを作成する。 領域7「女性とキャリア」科目の充実と学年配当の流れを検討する。 教養教育科目の時間割と開放化・実質化のルールを検討・整備する。	全学教務委員会 全学教務委員会 全学教務委員会
		(2)初年次教育を充実させる。	学生の主体的・自立的学習を促す初年次教育を開発する。	地域・企業と連携して、答えのない問題の解決法をグループで提案する演習科目等の設定を検討する。 ファーストイヤーゼミの授業内容・方法を全学的に見直し、共通化する。	全学教務委員会 全学教務委員会
		(3)専門教育の開放化・共通化を進める。	学生が自分の専門分野以外に関心のある分野を一定程度体系的に学べる制度を構築する。	各学部の自由選択科目を見直し、他学部他学科の科目履修を卒業要件に組み込む。 学部をまたぐ、または共通の専門基礎的科目の共通化・開放化・共同開講を模索する。	全学教務委員会 全学教務委員会
		(4)キャリア教育を見直し、一層充実させる。	相山におけるキャリア教育の目標を明確にし、その目標を達成するためのカリキュラム及び支援体制を確立する。	領域7「女性とキャリア」科目を学生のニーズに合わせ、キャリア育成センターと連携して充実させ、その体系化を図る。 キャリア教育専門家の助言を参考に、各学部で設定しているキャリア教育を吟味し、キャリア教育専門科目コースなどのコースを設定、履修証明などの制度を設ける。	全学教務委員会 キャリア育成センター運営委員会 全学教務委員会、 キャリア育成センター運営委員会
		(5)卒業生・社会人の学び直し、生涯学習の機会と場を提供する。	女性の様々な人生段階における「学びのニーズ」を的確に把握し、「女性の一生を支援する大学」にふさわしい学びの場を提供する。	卒業生に対するアンケート調査を実施し、卒業後の学びのニーズを的確に把握する。 オープンカレッジ講座や履修証明制度を活用し、卒業生、社会人のニーズに合った学びの場・プログラムを提供する。 全学において履修証明プログラムを設定し、併せて学部横断的な履修証明プログラムの検討を行う。	大学運営会議 大学IR室 エクステンションセンター運営委員会 全学教務委員会
	7 マネジメント体制の確立 新たな課題に迅速かつ的確に対応する	(1)全学的なマネジメント体制を確立し、さらにガバナンスを検討する。	学長のリーダーシップの下、全学を挙げて、魅力ある大学づくり、教育の質の保証を行う体制を構築する。	中期計画、改革アクションプランを推進するため、大学運営会議の下に課題ごとの部会(WG)を設置し、教職協働で改革を推進する体制を構築する。 全学的なマネジメントをサポートする職員の職能開発(SD)を促進し、教職協働を更に推進する。	大学運営会議 SD委員会
		(2)学部におけるマネジメント体制を確立し、さらにガバナンスを検討する。	学部長のリーダーシップの下、学部を挙げて、魅力ある学部・学科づくり、教育の質の保証を行う体制を構築する。	学部長のリーダーシップの下、各学部に設置された「教育内容検討会議」を中心に、PDCAサイクルに基づく学部運営や将来計画等戦略プランニングを行う体制を構築する。	教育内容検討会議 学科会議
		(3)リーダー層の資質向上を進める。	大学のマネジメントを担うリーダー層が、全学的な課題意識を持ち、課題解決に向けて主体的に行動できるようにする。	外部の研修会等の情報を積極的に収集・提供し、学部長・主任等リーダー層が研修会に参加する機会を増やす。(新任の学部長・主任は必ず1度は参加する。) 学内で学部長・主任等リーダー層向けの研修会を実施する。	大学運営会議 大学運営会議
		(4)PDCAサイクルを確立する。	PDCAの各段階における実行組織及び役割を明確にし、それを実行した後、本学の取り組みに対する客観的な評価・検証をするための仕組みを構築する。	各課題別にPDCAの各段階における実行組織及び役割を明確する。 評価運営委員会の役割を見直して内部評価を行う委員会と位置付け、認証評価の評価基準に従った取り組みが行えているかチェックする。 中期計画第1期の最終年度となる平成28年度に外部委員会を含めた評価委員会を設置し、これまでの本学の取り組みに対する客観的な評価・検証を行い、その結果を中期計画第2期の課題設定に反映させる。	評価運営委員会 大学運営会議
		8 教員組織の確立 教員組織の機能化を図る	【重点項目】 (2)教員に求める能力・資質などの基準を明確化する。 (3)教員の教育研究活動・業績評価についての基準を明確化する。	相山女学園大学の教員像を確立するために、教員に求める能力・資質などの基準を定め、教員に周知する。 相山女学園大学の教員像を確立するために、教員の教育研究活動・業績評価についての基準を定め、教員に周知する。	教員に求める能力・資質に対する基準を定めるとともに、「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」における教員の果たすべき役割を明示する。 「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」について、教員の果たすべき役割を明文化する。
Ⅲ 質的転換 教育環境の	9 教育環境の整備 学びの環境を魅力化する	(1)在学生・卒業生等から意見聴取をし、環境整備に反映させる。	在学生や卒業生をはじめとするステークホルダーから意見聴取する仕組みを整備し、寄せられた意見を真摯に受け止め、教育環境の整備・改善に積極的に活用する。	在学生・卒業生を対象とした満足度調査や一般の方からの意見聴取等を計画し、実施する。調査実施に当たっては関連する部署間で連携を図り、調査の効率化及び調査結果の有効活用を図る。 在学生・卒業生と大学トップとの教育環境(施設設備、教育制度など)に関する意見交換会や、在学生と職員の協働による大学の環境整備に関するWG・プロジェクトの立ち上げにより、学生自身の意見を学内環境整備に反映させる。	全学学生委員会 図書館運営委員会 大学IR室 大学運営会議 全学学生委員会

相山女学園大学中期計画			中期計画第1期 【H26年度～H28年度】 最終目標(達成ビジョン)	実施計画 平成27年度	関係会議
大分類	中分類	小分類			
Ⅲ 教育環境の質的転換	9 教育環境の整備 学びの環境を魅力化する	(2) 自主学修システムを整備する。	授業時間外における学生の自主学修を促進させるため、E-learningシステム等のサポート体制が整備され、その全学的な活用が進み、平成26年度に比べて学生の自主的な学修時間が増加している。	SUCCESS・Glexaの更なる活用に向けてあらゆる方策を検討、実施しつつ、新たなE-learningシステムの開発についても検討を開始する(新たなシステム導入を行う場合は、必要な予算措置をした上で、システム開発に向けた調査・研究を進める)。 予習・復習を課すだけではなく、反転授業の導入などにより、学生が自主的に学修する授業への転換を促す。全学FD委員会は、学生の学修時間が確保されているかどうかの検証を行う。	全学FD委員会 大学情報教育開発センター運営委員会
		(3) 組織・制度面における教育環境を整備する。	教員及び事務職員の意識を「学生の管理」から「学生の学びの支援」へと転換し、学生の学びを支援する立場に立った組織体制を整備するとともに、学生同士が共に支え合い、学び合う「ピアサポート」制度を導入する。	「学生支援センター」(仮称)を設置し、学生課を「学生生活支援課」、教務課を「学修支援課」へ改組するとともに、業務内容を「学生を支援」する立場から整理・改善を行う。 現行の教務上の諸制度(GPA制度、キャップ制、他学部履修、転学部・転学科など)について、「学生の学びを支援」する観点から再点検・再構築し、必要に応じて制度の見直しや新たな制度の導入を行う。	全学教務委員会 全学学生委員会
		(4) 施設・設備面における教育環境を整備する。	大学のビジョン、中長期計画と連動した「キャンパスマスタープラン(仮称)」を策定する。アクティブラーニングに対応した施設・設備の更なる整備や既存施設の充実・高機能化を進める。	「キャンパスマスタープラン(仮称)」の策定に向けた全学的なプロジェクトを始動する(財政計画の策定も含む)。 アクティブラーニングや学生の自主学修を行うために必要な施設・設備について調査・研究する。また、学生の意見も取り込み、学生の福利厚生施設や各学部棟の施設設備の改善・充実を図る。 学部・学科を越えて学生同士が交流できる場所である「学生ステーション」(仮称)及び学生生活全般と学修活動を支援するための「学生支援センター」(仮称)を整備する。(3～9(3)と連動)	大学運営会議 全学FD委員会 大学IR室 全学教務委員会 全学学生委員会
Ⅳ 財務の質的転換	10 安定した財政基盤の整備 学園の未来へつながる安定した財政基盤を構築する	(1) 学納金、寄付金の見直し等により、財政基盤を健全化する。	寄付金の税額控除の団体指定を受けること。 事業収入を増加させる。	相山女学園教育振興基金及び古本募金の普及に努める。HP等でのPRを促進する。 学納金のみに寄らない多様な収入源を確保するため、学校法人が行うことができる収益事業について検討する。	
		(2) 補助金、科学研究費等の外部資金獲得の向上を図る。	大学として、新たな補助金を獲得する。科学研究費補助金額で100位以内を達成する。 受託研究費、寄付研究費を増額する。	現行の制度を維持しつつ、外部資金獲得意欲向上の仕組みを作る。(例)外部資金獲得者而非獲得者間で研究費の増減幅を拡大する。 「地域・社会貢献センター」(仮称)が中心となり、受託研究を推進する。	大学運営会議
		(3) 厳選した人事により人件費を適正化する。	人件費が全国平均を下回るよう必要な対策を行う。	大学運営会議の下に「全学カリキュラム検証部会」(仮称)を設置し、各学部・学科の適正科目数を検討する。	
		(4) 適正な経費支出(研究費の見直し、冗費の削減)を進める。	経常費の1割削減を達成する。	他大学の研究費の支給状況等について調査を行い、金額の改定等を含めて、研究費のあるべき姿について検討する。	
中期計画期間を通しての課題	11 相山女学園大学の未来に向けて	(1) 女子大としての教育内容、並びに多様な学び	女子大の存在意義を再認識し、学生、社会人等に女子大ならではの教育内容、学びの機会を提供できるよう、大学としての基本方針を定めるとともに、実施に着手する。	女子大の存在意義、教育上のメリット等について教職員が共通認識を持つとともに、学外に対しても広く周知し、女子大の魅力を積極的にPRする。 教養教育科目の領域7「女性とキャリア」科目を活用し、初年次からキャリアを重視した教育を行う。 エアラインスクール等、女子大ならではの教育内容、学びの機会を充実させ、共学校との差別化を図る。また、履修証明制度等、社会人の学び直しの機会を提供する。	
		【重点項目】 (2) 入試の在り方・新たな方策について検討する。	「高大接続実行プラン」など、国の政策動向を踏まえつつ、教学と経営が一体となって相山の入試制度を検討し、今後の入試改革プランを策定する。	学部共通定員枠の設定、AO選抜・自己推薦入試の改修など、既存の入試制度の改善・改修を進める。 「入学基本事項検討委員会」を大学運営会議の下におき、入試制度改革ビジョンを策定する。	入学基本事項検討委員会 大学運営会議 入学基本事項検討委員会 大学運営会議
		(3) 学部・学科再編の可能性	教学と経営が一体となって全学的な視点で学部・学科の再編等も含めた今後の学部・学科の在り方及び定員の在り方を検討する場を設置し、様々な可能性を探る。	大学運営会議の下に、「学部・学科の在り方検討部会」(仮称)を設置し、ビジョンを策定する。 (例:人間関係学部の星が丘キャンパスの移転、文系4学部の学部再編等) ※競合他大学との比較・分析、学部・学科のニーズ調査等を大学IR室と連携して行うなど、確かなデータに基づいて進める。	学部・学科の在り方検討部会
		(4) 高校生への広報の強化、また、提供する情報の精選	相山としての「広報戦略」を策定し、着実にイメージアップ、志願者アップにつながる広報を展開する。	大学広報戦略ワーキンググループで今後の広報の在り方を検討し、相山としての「広報戦略」を策定する。 入試広報、大学説明会、オープンキャンパス、(教職員・学生による)高校訪問、高大接続等の戦略を見直し、本学を戦略的にアピールすることで、本学の認知度を高める。	大学広報戦略WG 入学広報実施委員会 大学広報戦略WG

相山女学園大学中期計画			中期計画第1期 【H26年度～H28年度】 最終目標(達成ビジョン)	実施計画	関係会議
大分類	中分類	小分類		平成27年度	
中期計画期間を通しての課題	11 相山女学園大学の未来に向けて	(5)時代の潮流に即したグローバル教育	教育のグローバル化に対する教職員の理解を促進するとともに、相山にとって必要なグローバル教育とは何かを検討する場を設置し、大学としての基本方針を定め、グローバル教育を推進する。	大学運営会議の下に、「グローバル化検討部会」(仮称)を設置し、グローバル化に対するビジョンを策定する。	大学運営会議 グローバル化検討部会(仮称)
				全学的に英語教育を強化する。(TOEIC等外部テストの活用、単位認定、英語による授業の拡大)	教養教育運営委員会
				国際交流ボランティアとして、通訳や学習サポート、イベント運勢など目的に応じた人材バンクへの登録を呼びかけ、各人の持ち味を活かせる人材活用を計画する。	国際交流委員会
				国際交流スペースの開放(ネイティブの教員・学生と日本人教員や学生が自由に交流できるスペースを設ける。セルフアクセスセンターの拡大版)。	国際交流委員会
				教員の持つネットワークや学部団体などを利用して、留学先拡充の可能性を探る。	国際交流委員会
			学園創立110周年(平成27年度)を機に、上記の課題等を踏まえた10年間の長期ビジョンを策定する。	大学運営会議において長期ビジョンを策定する。	大学運営会議

【資料4】組織人の責務に関する教職員研修

組織人の責務に関する教職員研修

服務規程について 本日の内容

- ・はじめに～コンプライアンスの重要性等～
- ・コンプライアンス・・・学園（組織人）と社会の関係
- ・就業規則・・・個人と学園の関係
- ・事例
- ・おわりに～相談窓口など～

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

コンプライアンス

学園HPでは・・・

- ・研究費等の管理・監査ガイドライン
- ・大学の研究活動の不正行為対応規程

大学HPでは・・・

- ・学術研究倫理憲章、学術研究倫理ガイドライン
- ・研究費等の管理・監査ガイドライン
- ・ハラスメントに対する取組み
- ・相山女学園個人情報保護方針、相山女学園個人情報保護規程
- ・相山女学園特定個人情報保護方針、相山女学園特定個人情報等取扱規程
- ・ソーシャルメディアポリシー

就業規則は・・・個人と学園の契約、約束

組織人としては、社会を意識する必要がある
コンプライアンスやモラルとは、組織人として社会を意識した行動規範

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

相山女学園就業規則

学校法人相山女学園は「人間になろう」という理念にとづき、女性に高度の教育を受ける機会を創き、もって文化の創造と人類の福祉に貢献することを目標としている。本学園に勤務するものは、この目標のもとに誠意を全うするよう努めなければならない。

（目的）

第1条 この規則は、本学園の職員に適用する勤務の基本を規定するものである。

（2 略）

（規則遵守の義務）

第2条 職員は、この規則及び本学園の定める規則、規程などを守り、その職務を誠実に遂行しなければならない。

（略）

（服務の基準）

第20条 職員は、本学園の目標のもとに、教育の使命を自覚し相互に敬愛協力して職務を遂行し、学園の総合発展に努めるものとする。

（法令、規程及び職務命令に従う義務）

第21条 職員は、職務を遂行するにあたり、関係法令、本学園の規則、規程などを守り、所属長の職務上の命令に従うものとする。

（服務規律）

第22条 職員は、常に環境を整え、職務遂行に支障のないように努めなければならない。

2 職員は、本学園の信用を傷つけるような行為をしてはならない。

3 職員は、本学園の施設、設備を許可なく使用してはならない。また、本学園の構内において許可なく集会、講演、演説、放送し、又は文書等を所定以外の場所に張り紙、掲示、配布する等の行為をしてはならない。

4 職員は、本学園の構内、施設内で許可なく政治に関する活動及び選挙運動をしてはならない。

5 職員は、本学園の許可なく、本学園以外の学校又は職場に勤務したり、あるいは営業等をしてはならない。

6 職員は、火災その他の災害予防に努めるものとする。もし火災が発生したときは、学生生徒等及び職員の見守りや火災の発生を知らせるべきである。

7 職員は、職務に關し事故を起こしたり、又は使用上の機器、備品等を失失又は損傷したときは、速やかに所属長に報告し指示を受けるものとする。

8 職員は、セクシュアル・ハラスメント等の人材侵害に当たる行為をしてはならない。

9 職員は、業務上個人情報を取り扱う際、個人情報保護法（平成15年5月30日法律第57号）に則し、在職中又は退職後においても本学園が保有する個人情報等を第三者に提供したり、利用目的を超えて取り扱い、又は漏洩ししてはならない。

10 職員は、番号法に基づき、本学園の個人番号の提供の求め及び本人確認に協力しなければならない。また、正当な理由なく本学園の業務上重要な秘密（番号法上の特定個人情報ファイルを含む。）を提供して本学園に損害を与え、又は業務の正常な運営を妨害してはならない。

（守秘義務）

第22条の2 職員は、職務上知ることのできた秘密をほかにもしてはならない。その漏れを避けた後も同様とする。

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

2012年3月23日制定

相山女学園大学学術倫理憲章

相山女学園大学（以下「本学」という。）は、教育基本法及び学校教育法に基づき、本学園の教育理念「人間になろう」にのっとり、真理を探究し、水準の高い研究成果を生み出すことにより、新たな知を創造する学術研究の拠点としての使命を誠実に果たす。すなわち、本学の学術研究は、高い知性と豊かな情懷を兼ね備えた人間を育成し、社会の調和的発展及び人類の福祉に貢献する。本学は、学問の自由の理念の下、本学の学術研究に関与するすべての者に学術研究活動の自由を保障するとともに、その学術研究が社会からの信頼と負託を前提に成り立つことを真摯に受け止め、我が国の高等教育機関としてふさわしい責任意識をもってなされるべきであると考え、

よって、本学は、本学の学術研究に関与するすべての者が遵守すべき基本となる学術倫理として相山女学園大学学術研究倫理憲章をここに定め、全学に周知徹底する。また、本学の学術研究に関与するすべての者は、この憲章を遵守することを誓うものとする。

- 1 本学は、学術研究を通じて社会の調和的発展や人間と自然の調和を実現するために、現代社会の諸問題に取り組み、それら諸問題の解決及び新たな文化の創造に寄与する。
- 2 本学は、学術研究の公正性、透明性を重視し、その成果を中立性、客観性をもって適切に発信することにより、時代や社会の信頼に応え、社会との対話に積極的に参加する。
- 3 本学は、学術研究に関与するすべての人々の尊厳を重んじ、基本的人権を尊重し、個人情報の保護に努める。また、動物愛護にも配慮する。
- 4 本学は、国際的規範、国内外関係諸法令及び学内諸規定を遵守し、社会的良識をもって学術研究を遂行する。
- 5 本学は、学術研究を進めるにあたり、思想、国籍、人種、性別、地位等による差別やハラスメント行為が生じることがないよう努める。
- 6 本学は、学術研究に係る資金が多くの人の期待と信頼の下に社会から負託されたものであることを認識し、学術研究資金の適切な管理及び運用に努める。
- 7 本学は、研究倫理に関わる教育・研修、研究環境の改善・整備及び安全管理等に努め、社会からの信頼に応える環境づくりに努める。

附則

この憲章は、2012年4月1日から施行する。

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

◆コンプライアンスとは

法令遵守、説明責任、CSR→USR (University Social Responsibility)
ハラスメント、個人情報、安全管理、リスクマネジメント、公益通報など
違法行為→訴訟や行政処分→損害賠償発生→信用失墜

◆コンプライアンスの重要性

リスクマネジメントの側面→損失をなくす、損害を食い止める
イメージアップの側面→組織としての取組み、社会的責任

◆背景

規制緩和とセット？
設置基準大綱化→自己点検・評価、認証評価
自己責任体制を整備せよ、との考え
大学情報公表の義務化
認証評価の基準項目：「教職員の資質向上、FD、SD」
「研究倫理を遵守するための必要な措置」
「内部質保証システム」
規程整備、学内体制や審査機関整備、
コンプライアンス意識徹底

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

服務規程について

・就業規則

前文：学園の目標のもとに職責を全うするように努める

1条 目的

2条 規則遵守の義務：規則等を遵守し、職務を誠実に遂行

20条～41条の2 服務

・（服務の基準）教育の使命を自覚し相互に敬愛協力

・規則等の遵守義務

・信用失墜行為の禁止、兼業禁止、人権侵害禁止

・守秘義務

・勤務時間、休日、休暇ほか

・安全衛生

・懲戒規程（就業規則第48条～49条、懲戒規程）

・学園の名誉、秩序、職員の規律保持のため

規律違反、秩序を乱した場合、職務怠慢、セクハラ等人権侵害ほか

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

相山女学園就業規則

（懲戒）

第48条 職員が、次の各号の一に該当するときは、所属長の指導性及び職員の自覚と前提とし、学園の名誉及び秩序並びに職員としての規律を保持するために、やむを得ず懲戒を行うことがある。

（1）規則等に違反したとき。

（2）大学及び高等専門学校等の秩序を乱したとき。

（3）正当な理由なく職務を怠ったとき。

（4）重要な職務を怠るなど不正な方法により採用されたとき。

（5）セクシュアル・ハラスメント等の人権

（6）正当な理由なく本学園の業務上重要な秘密（番号法上の特定個人情報ファイルを含む。）を提供して本学園に損害を与え、又は業務の正常な運営を妨害したとき。

（7）その他、前各号に該当する程度の不都合な行為があったとき。

2 懲戒事由は、懲戒について懲戒委員会に諮問する。

第49条 懲戒は、免職、諭旨退職、停職、減給及び戒告の5種とし、そのうち1種又は2種以上をあわせて、任命権者がこれを行う。

（1）免職 24時間以内に解雇の通知を行う。

（2）諭旨退職 退職勧奨を要するよう勧告を行う。

（3）停職 6月以内出勤を停止し、その期間の給与を支給しない。また、その期間は、勤務時間の通算から除外する。

（4）減給 1回につき平均賃金の半日以内、総額においてその月の総収入の10分の1以内の額を減ずる。

（5）戒告 戒告を要する。

2 前条及び本条に定めるもののほか、職員の懲戒について必要な事項は、別に定める。

（罰則等）

第49条の2 第48条による懲戒処分が必要がない事項についても、服務を厳正にし、規律を保持する必要があるときは、訓告又は厳正注意を文書又は口頭により行うことがある。

相山女学園懲戒手続規程

（懲戒）

第1条 この規程は、学校法人相山女学園就業規則（昭和52年規程第1号、以下「就業規則」という。）第48条第2項の規定に基づき、就業規則第48条及び第49条に規定する職員の懲戒の手続に関し必要な事項を定める。

（懲戒の原則）

第2条 懲戒処分は、懲戒委員会の賛成に基づき、理事長の議を経て、理事長が決定するものとする。

2 懲戒処分は、就業規則第48条第1項各号の1のいずれかに該当する事由（以下「懲戒事由」という。）に該当する行為でなければ、これを行うことはできない。

3 懲戒処分は、同一の行為に於いて、重ねて行うことはできない。

4 懲戒処分は、懲戒事由に違反した程度が同一の場合、就業規則第49条第1項各号に掲げる懲戒の種類及び処分程度の程度が異なっているものではない。

5 懲戒処分を行うにあたっては、対象となる職員に対し、書面又は口頭により弁明する機会を与える。ただし、対象となる職員の所在を知らることができない場合はこの限りではない。

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

相談窓口

- ・公益通報
- ・研究費関係
- ・研究行為不正
- ・個人情報
- ・ハラスメント

- 監査室
- 財務経理課
- 企画課
- 総務課
- 相談室、相談員

相談窓口は、倫理保持体制の安全弁
規程や体制を整備されていること自体で実際に通報等がなかったとしても、
倫理保持を重視する組織であることを対外的に示すことができる。
万一通報があった場合には、早期発見、損失を最小限に食い止める。
気軽に相談でき、疑問が話題になり、違反行為を未然に防止できるような
風通しの良い職場となることが重要。
規則や禁止事項でがんじがらめになる意図ではなく、
こういうことがない職場を目指しています。毅然とした態度でのぞみます、という姿勢を示すことが重要

Sugiyama

Sugiyama Jogakuen University

【資料5】研究倫理に関する責務と心構え

研究倫理に関する責務と心構え

岡山女学園大学研究倫理委員会
統括管理責任者 戸部栄一

1. 文部科学省等における責任ある研究活動等のガイドライン
 - 1-1. 科学者の行動規範
 - 1-2. 研究活動における不正行為とは
 - 1-3. 論文投稿時に気を付けるべきこと
 - 1-4. 研究費の不正使用等の具体的類型
 - 1-5. 文科省「研究活動における不正行為への対応等の関するガイドライン」目次
 - 1-6. 「ガイドライン」の理解のためのe-ラーニングの勧め
2. 「岡山女学園大学研究活動における不正行為への対応等に関する規程」から
 - 2-1. (趣旨)
 - 2-2. 第2章 不正防止のための体制
 - 2-3. 告発の受付～関係者の取扱い
3. 研究活動・論文執筆にあたって留意すべき事項
 - 3-1. 研究の流れと一般的留意事項
 - 3-2. 研究費の確保と共同研究の推奨
 - 3-3. 研究と教育の統合へ

1. 文部科学省等における責任ある研究活動等のガイドライン

文部科学省、国立研究開発法人 科学技術振興機構、日本学術会議等は、不正行為の続発を受けて、責任ある研究活動のためのガイドライン等を提示・啓蒙している

1-1. 科学者の行動規範

(科学者の基本的責任)

1 科学者は、自らが生み出す専門知識や技術の質を担保する責任を有し、さらに自らの専門知識、技術、経験を活かして、人類の健康と福祉、社会の安全と安寧、そして地球環境の持続性に貢献するという責任を有する。

(科学者の姿勢)

2 科学者は、常に正直、誠実に判断、行動し、自らの専門知識・能力・技芸の維持向上に努め、科学研究によって生み出される知の正確さや正当性を科学的に示す最善の努力を払う。

日本学術会議『声明 科学者の行動規範－改訂版－』(平成25年)

1-2. 研究活動における不正行為とは

＜特定不正行為＞

捏造・改ざん・盗用

＜その他の不正行為＞

二重投稿、不適切なオーサーシップ等

国立研究開発法人 科学技術振興機構
「研究者のみなさまへ～責任ある研究活動を目指して～」より

不正行為の説明

① 捏造

存在しないデータ、研究結果等を作成すること。

② 改ざん

研究資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。

③ 盗用

他の研究者のアイデア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解もしくは適切な表示なく流用すること。

④ その他

同じ研究成果の重複発表、論文著作者が適正に公表されない不適切なオーサーシップなども不正行為の代表例と考えることができます。

文部科学省「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」(文部科学大臣決定、平成26年8月26日)

1-3. 論文投稿時に気を付けるべきこと

- ☒ 自分が所属する研究機関の倫理綱領の内容を確認していますか？
- ☒ 自分が所属する学協会や論文投稿規定の内容を確認していますか？
- ☒ 再現性があることの確認をして発表していますか？
- ☒ 生データ、実験で得た試料、実験ノートの保存・管理はできていますか？
- ☒ 共著者を含んだものについては、それぞれが寄与した部分を当事者間で確認し、その内容に共同の責任を負うことに合意はとれていますか？
- ☒ 投稿時の二重投稿規定に抵触していないことを確認していますか？
- ☒ 二重投稿や盗用とならないように、既に発表されている著作物の表現や内容については、引用であることを示していますか？

国立研究開発法人 科学技術振興機構
「研究者のみなさまへ～責任ある研究活動を目指して～」より

1-4. 研究費の不正使用等の具体的類型

1. 不正使用

(1) 私的流用

例) 「預け金」による購入・転売

例) 私的旅行・出張に家族等を同伴し、研究費で支払

(2) 私的流用以外の不正使用

例) 「架空請求」 例) 「品名」替え(品転) 例) 「カラ出張」

例) 出張旅費の「水増し請求」 例) 出張旅費の「二重請求」

例) 「カラ謝金」 例) 謝金の「水増し請求」 例) 謝金の「二重請求」

2. 不正受給

例) 他人名義、虚偽の情報をもとに申請し、研究費を受給

例) 投稿中の論文をすでに掲載済みとして申請し、研究費を受給

例) 他人の研究業績を自身の業績と偽って申請し、研究費を受給

国立研究開発法人 科学技術振興機構
「研究者のみなさまへ～責任ある研究活動を目指して～」より

1-5. 文科省「研究活動における不正行為への対応等の関するガイドライン」目次

はじめに	1
第1章 研究活動の不正行為に関する基本的考え方	4
1 研究活動	4
2 研究成果の発表	4
3 研究活動における不正行為	4
4 不正行為に対する基本姿勢	5
5 研究者、科学コミュニティ等の自律・自己規律と研究機関の管理責任	5
第2章 不正行為の事前防止のための取組	7
1 不正行為を抑制する環境整備	7
2 不正行為の発生に際する事業の調査	9
第3章 研究活動における特定不正行為への対応	10
1 対象とする研究活動及び不正行為等	10
2 研究・配分機関における役割・体制の整備及び公表	11
3 特定不正行為の自発的受付け	11
4 特定不正行為の告発に係る事業の調査	13
第4章 特定不正行為及び管理責任に対する措置	20
1 特定不正行為に対する研究者、研究機関への措置	20
2 組織としての管理責任に対する研究機関への措置	21
3 組織内での公表	22
第5章 文部科学省による調査と支援	23
1 研究活動における不正行為への組織的な対応	23
2 履行状況調査の実施	23
3 研究倫理教育に関するプログラムの開発推進	23
4 研究機関における調査体制への支援	24
(参考資料1) 研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン (概略)	24
(参考資料2) 調査結果の報告書に盛り込むべき事項	25

[illegible]

文科省：「標準的な研究倫理教育プログラムや大学間が連携して作成した教育プログラム(CITC Japan)に準じた教育が行われることが望ましい」

- ① CITC Japan Home Page を開き、指定されたユーザー名とパスワードを入れ、ログインボタンを押す。
- ② 「氏名及びEmailの編集」画面を確認。またはメインメニューが開くので、パスワードの変更または「受講コースの選択」をクリック。
- ③ 必須受講コース（責任ある研究行為：基盤編、Stage 1）の受講を開始。
- ④ 8割以上の正解で、修了証が発行される。

1-4.研究費の不正使用とは

(1) 物品等購入費に係る不正

業者との商品購入に係る架空の取引により、研究機関から支払われた金額を、別の用途に流用したりするもの。

(2) 旅費に係る不正

いわゆる公の出張や出張によって不当に旅費を請求し、差額等を不正に取得するもの。

(3) 人件費に係る不正

出勤簿や日報を捏造、改ざんすることなどによって、雇用者給与の誇大請求や未増し請求を行い、実態とは異なる給与を研究機関から受領するもの。

(4) 設備に係る不正

研究機関の経理や保守点検等の役割を実施したことにして、架空請求し研究機関から支払われた金額を、別の用途に流用したりするもの。

<隠ぺい費>

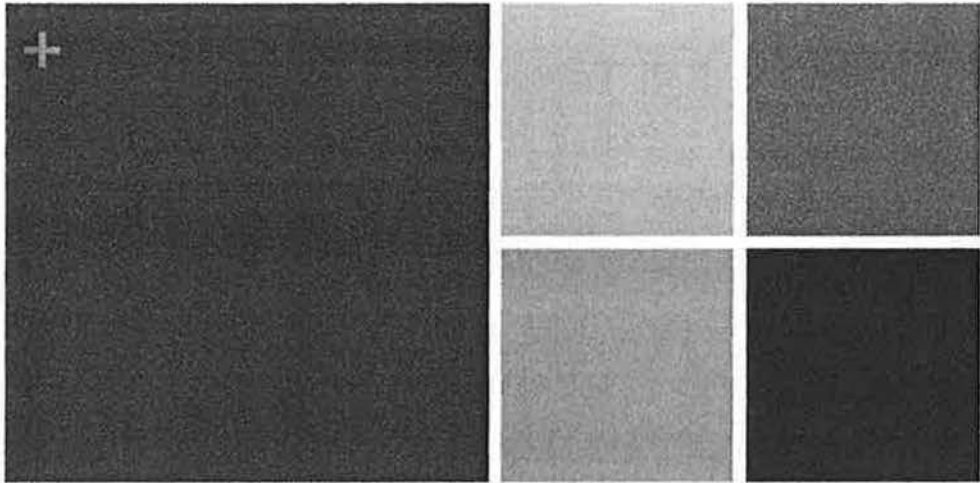
業者が架空取引を指示し、契約した物品等が納品されていないのに報酬を請求し、納品されたとして代金を研究機関に支払わせ、その支払金を当該業者が管理させるもの。

<ブール費>

研究者や研究支援者に係る旅行費や出張・日報を捏造、改ざんすることにより、旅費や旅費を不正に請求して研究機関に支払わせ、その支払金を当該研究者から研究室の運営・管理のためにとして隠蔽して研究費等で管理するもの。

国立研究開発法人 科学技術振興機構
「研究者のみならず～責任ある研究活動を目指して～」より

【資料6】 英語で専門科目を教えるためのワークショップ



English and Communication

Mamoru Tsukada, Fall Term, 2014

+ The Goal and Objectives of the Class



The Goal: to learn an academic discussion and writing

Four Objectives:

1. **Group Discussion:** to express yourself logically
2. **Doing a research:** to analyze a social issue
3. **Individual Presentation:** to make your ideas understood orally in public
4. **Academic Writing:** to write a paper academically and logically

+ Schedule of Fall Term



1. Sept. 25: Introduction
2. Oct. 2: What is a research paper ?
3. Oct. 9: How to write a research paper: to decide on your topic
4. Oct. 16: How to write a research paper: to submit your outline
5. Oct. 23: Group Discussion and Presentation 1
6. Oct. 30: Group Discussion and Presentation 2

+ Schedule of Fall Term



7. Nov. 6: A Lecture on a research paper: an example
8. Nov. 13: Individual presentations (1) : outline and literature review (10 minutes)
9. Nov. 20: Individual presentations (2) : outline and literature review (10 minutes)
10. Nov. 27: Writing a draft and tutorial (1): Discussion
11. Dec. 4: Writing a draft and tutorial (2): Discussion

+ Schedule of Fall Term

- 12. Dec.11:Individual presentation (1)**
- 13. Dec.18:Individual presentation (2)**
- 14. Jan.8:Individual presentation (3)**
- 15. A summary discussion**

+ Requirements of the class

- 1. Discussion participation (20%)**
- 2. Presentation (30%):15 minutes**
- 3. Paper (50%): (1)Due on January 29, 2015**
(2) 5 pages or more

+

My Expectations of YOU



- 1. Go beyond English conversation
- 2. Express yourself in English as well in Japanese
- 3. Enjoy an academic discussion with your friends
- 4. Write an academic and formal writing
- 5. Make use of your experiences aboard
- 6. Do not be afraid of native speakers of English
- 7. Be an owner of English (Professor Shibata)
- 8. Work at a cross-cultural situation in the future

Faculty
Development
Workshop
(June, 30, 2015)
-Learning From Each Other-

Mamoru Tsukada PhD

Today's Topics

- 1) Syllabus on English and Communication of 2014
- 2) Reasons for Starting Class in English as a Japanese faculty
- 3) Two-step Presentations
- 4) Chances to Discuss Social Issues
- 5) Emphasis on Writing
- 6) Problems to Solve about Teaching in English and Merits

Reasons for Starting Class in English by a Japanese

- 1) To give opportunities for students to talk in English, especially those who have experienced study abroad programs
- 2) To give opportunities for students to make presentations in English
- 3) To show how to write an academic paper: I was surprised to see the big gap between speaking ability and writing ability among those who have experienced study abroad programs

Two-step Presentation

- 1) To give a short presentation on any chosen topic of students' choice
- 2) To develop a theme on the topic by narrowing the topic in the second presentation by incorporating other classmates' questions and comments
- 3) To write comments on the presentation draft (Instructor's function)

Chances to Discuss Social Issues: student-centered

- 1) To ask any questions about the social issues which classmates made presentations on
- 2) To talk about the social issues in a group and give different opinions or perspectives
- 3) To summarize opinions or perspectives which are useful to develop the presenter's idea (Instructor's function)

Emphasis on Writing

- 1) To give a several lectures on how to write an academic writing
- 2) To illustrate an example of academic writing paper outline
- 3) To give an instruction about how to collect data or review articles or books at a library
- 4) Individual tutorial time

Problems to Solve about Teaching in English and Merits

- 1) Students are not used to expressing themselves about social issues, not personal matters
- 2) Students have little idea about an academic writing
- 3) Those students who experienced study abroad want to "use their English" in a comfortable and encouraging class atmosphere

Personal Feeling by Teaching Classes in English

- 1) It is challenging
 - 2) I feel just like living in an English speaking world as I experienced as a student in U.S.
 - 3) I enjoy students' active and casual attitude toward me in English
 - 4) It is fun to see that students are more active in English
- ***Final Note: I just enjoy it.***

Introduction to Linguistics

Challenges

It is very difficult to set entry requirements or pre-requisites for students registering for the course. Some students who are education majors want to take this course to prepare to teach English. For that reason, I accepted everyone who applied.

<i>Large class:</i>	<i>Hard to keep track of all the students.</i>
<i>Mixed motivation levels:</i>	<i>Some students are more engaged than others.</i>
<i>Mixed language proficiency levels:</i>	<i>Some students have a very advanced level of English, others are weak.</i>
<i>Complex ideas:</i>	<i>Some of the concepts in a linguistics class are hard to understand even in the students' native language.</i>

Solutions

1. Keep lectures to short bursts in clear and accurate English. Support with strong visuals.
2. Allow time for students to clarify with each other (in Japanese if necessary).
3. Break up lectures with videos, discussion tasks and short readings to activate schemata and prevent sleepiness.
4. Gloss difficult vocabulary and provide plenty of examples.
5. Don't give the students a handout, but provide all the information in advance online.
6. Give online check tests.
7. Allow notes in examinations.

<https://startinginlinguistics.wordpress.com>

<https://cinemasessions.wordpress.com>

Ⅲ大学院教育の質の向上に向けて

- 1 大学院 FD 委員会の活動記録（平成 27 年度）
- 2 平成 27 年度 大学院 FD 活動報告
- 3 平成 27 年度 研究科 FD 活動報告

Ⅲ. 1 大学院 FD 委員会の活動記録

(任期：平成27年5月1日～平成28年4月30日)

(第1回) 平成27年4月28日(火) 18:01～18:30	1 平成26年度FD報告書について 2 その他
(第2回) 平成27年5月26日(火) 18:05～18:30	1 平成27年度大学院FD活動について 2 その他
(第3回) 平成27年6月23日(火) 18:05～18:35	1 平成27年度大学院FD活動について 2 その他
(第4回) 平成27年7月28日(火) 18:00～18:45	1 平成27年度大学院FD活動について 2 その他
(第5回) 平成27年9月29日(火) 18:00～19:00	1 平成27年度大学院FD活動について 2 その他
(第6回) 平成27年11月24日(火) 18:00～18:25	1 平成27年度協同可能な大学院FD活動について 2 その他
(第7回) 平成28年1月26日(火) 18:00～19:25	1 平成27年度協同可能な大学院FD活動について 2 平成28年度シラバスチェック依頼について 3 平成27年度FD活動報告書について 4 その他
(第8回) 平成28年3月2日(水) 10:30～11:25	1 平成28年度大学院FD活動について 2 その他

Ⅲ. 2 平成 27 年度 大学院 FD 活動報告

○ 学生（大学院生）の学修時間アンケート

- a 実施内容：平成 28 年 1 月 16 日（土）～1 月 18 日（月）における学修時間について 3 日間の、授業の時間以外の時間で「準備学修」、「課題、復習」、「授業に関するその他の学習」、「授業以外で関心がある勉強」について何時間学習するか質問した。

実施目的：学生・院生の学習のスタイルを把握し、より価値の高い授業を提供するために実施する。

- b 実施方法：学生支援システムのアンケート機能を利用し、全学生対象に実施した。
- c 開催状況：5, 869 名中 185 名が回答、大学院生は 6 名が回答
- d 実施結果を踏まえた授業改善への取組状況：結果を集計し、自由記述も含めて、各種委員会で報告した。

○ シラバスのチェック

- a 実施内容：各研究科ごとに、シラバス作成要領を作成し、教育目標、C P, D P を明示した上で、各教員にシラバス作成を依頼した。その後、大学運営会議からの求めにより、初校時に、全科目についての第三者チェックを各研究科の F D 委員が実施した。必要項目や内容について確認し、必要に応じて、授業担当者に加筆修正を依頼した。

○ 学生に対する授業評価アンケートの実施状況

- a 実施の有無及び実施時期

大学院生数が少なく、回答者が特定される可能性があり実施しなかった。

Ⅲ. 3 平成 27 年度 研究科 FD 活動報告

2015年度椋山女学園大学 大学院 生活科学研究科FD活動報告

生活科学研究科 FD 委員長 雨宮 勇

生活科学研究科では、2012 年度に FD 委員会を立ち上げ、2015 年度は 4 年目にあたる。2015 年度は、2014 年度と同一メンバーで活動を行ってきた。

上甲恭平（研究科長）

内藤通孝（食品栄養科学専攻世話人）

上甲恭平（生活環境学専攻世話人）

續 順子（食品栄養科学専攻選出委員）

雨宮 勇（生活環境学専攻選出委員）

1. 生活科学研究科での取り組み

生活科学研究科での 4 年目の FD 活動は、大学院の専門領域における現状の把握を行うこととした。これは、「大学院教育の考え方」が 2 年前に確認されており、「大学院教育を達成するために、教員側としては共通した基礎教育をベースに異なった分野の研究状況を共有し、社会の中における自分たちの研究の現状を把握することが必要となる。」とされ、これを具体的に活動に反映させようとしたものである。この背景には 2 つの専攻科が行う研究方法が研究内容によって大きく異なることがある。人を相手にした臨床実験とモノを対象にした化学及び物理学実験とがあること、実験時期、実験期間、実験機器、対象材料、対象人数、対象空間など様々な要素が混在し、その後これに設計・制作の分野が本研究科の研究対象として加わったことで、学生たちにどのような研究方法が本研究科の普遍的な作法であるかの指標を示すことができないでいた。

また、これは他学部の研究に対してはより遠く感ずるものであり、興味の持ちにくさにつながっている。研究の持つ普遍的な作法の存在は認めても、具体的な内容が得られない中では、この面での教員の指導も限界があるというのが現状である。

以上から、平成 27 年度は、学部内での共通の研究作法を得るため、その実態と差異を明らかにするため、大学院教育に関与する教員にアンケート調査を行い、その結果を研究科委員会に於いて結果発表を行った。（次ページに記載）

次年度は、この結果をもとに 2 専攻の研究対象と研究方法についてその内容を明らかにする活動を行うことが期待される。

生活科学研究科の研究対象と必要と思われる FD 活動

食品栄養科学専攻

食品化学領域	研究方法	研究成果内容	必要とされる FD
食品化学分野	(○)実験および分析 (○)調査および分析 (○)文献収集と分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告 (○)著書 (○)製品 (特許)	・研究倫理について ・学会発表とスライド作成法 ・研究論文の作成法
食品機能学分野	(○)実験および分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告	修士課程 2 年間で、専門分野における研究課題の目的、探求、実践、まとめ等を効率よく遂行する為には、絶えず文献等による新しい情報を入手することが重要である。本専攻の学生は、概して英文読解力に欠けており、その向上に努める必要がある。専門分野における英文読解は、研究能力を養成するとともに、その後の将来を保障する可能性も大きい。
生化学分野			

栄養科学領域	研究方法	研究成果内容	必要とされる FD
栄養科学分野	(○)実験および分析 (○)文献収集と分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告	・研究計画の立案 ・バイオ実験の手法とストラテジーの習得 ・データの解析法 ・論文の作成とプレゼンテーションの手法
臨床栄養学分野	(○)調査および分析 (○)文献収集と分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告 (○)著書	論文作成のために、パソコンの利用 データ整理のための統計手法 学会発表のためのプレゼンテーション手法
栄養保健学分野	(○)実験および分析 (○)調査および分析 (○)文献収集と分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告	・実験計画の立案 ・実験の実施と反省 ・実験データの処理・解析 ・口頭発表と討論 (学会・研究会) ・論文作成と学術雑誌への投稿
栄養教育学分野	(○)調査および分析 (○)文献収集と分析	(○)論文 (○)学会 研究会報告	(1)以下の項目を含む社会調査法の修得 ・質問紙作成法 ・インタビュー調査技法 ・統計解析学 (2)研究発表のためのプレゼンテーション技法の修得

生活環境学専攻

	研究方法	研究成果内容	研究のための基礎的指導内容
アパレルデザイン分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 e.文献の収集と分析	a.論文	被服における色や形、素材による感覚と感情の測定方法(心理・生理反応測定) データ分析の検討 論文のまとめ方
アパレル設計・制作分野	a.計測による問題抽出と分析 b.アンケートによる収集と分析 c.現状把握と未来予測 e.文献の収集と分析	a.論文	・計測法の開発 ・データ解析と理論構築のための演習 ・論文の構成とプレゼンテーションのための演習
アパレル材料システム分野	a.測定による実験と分析 b.官能評価による収集と分析 e.文献の収集と分析	a.論文	素材の物性の計測と解析 官能評価、風合い評価と解析 図表と論文のまとめ方
アパレル環境調和分野	a.課題抽出と課題解決のための検証実験 b.消費者要望の技術開発のための基礎・応用実験	a.論文	研究課題は大きく学問的課題と技術開発課題とに分けられる.前者では未だ明確な説明がなされていない課題を選び,その課題の学問的意義と研究背景を把握させるとともに,解決のための研究計画の立て方および実験手法を指導する.後者では,現時点で要望の高い課題を選び,過去の研究動向と最新技術動向を調査を通して,新たな技術開発につながる可能性の高い実験計画および実験手法を指導する.
インテリアデザイン分野	b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成 d.プロダクト作品の制作 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と主意書 c.制作作品と主意書	・立体、及び空間把握能力の基礎的訓練 ・調査手法の基礎的知識と演習授業 ・論文の構成法とプレゼン手法 ・データ分析法の取得
プロダクトデザイン分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成 d.プロダクト作品の制作 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と主意書 c.制作作品と主意書	・物性値の測定と解析 ・官能評価の測定と解析 ・論文の構成と表現 ・設計図書の作図・表現法 ・制作指導
環境心理学分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成 d.プロダクト作品の制作 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と主意書 c.制作作品と主意書	・論文の構成・プレゼン手法 ・調査・実験の実施・分析手法 ・空間の構成・設計手法 ・アイデアの発想手法
福祉環境デザイン分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成	a.論文 b.設計図面と主意書 c.制作作品と主意書	
建築設計分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成 d.プロダクト作品の制作 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と主意書 c.制作作品と主意書	

地域・建築計画分野	a.計測による実証実験と分析 (実地・観察調査等) b.アンケートによる収集と分析 c.設計計画図の作成 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と 主意書	・学位論文執筆に至る研究作法 ・空間設計手法 ・その他
住宅計画分野	b.アンケートによる収集と分析 (聞き取り、観察) c.設計計画図の作成 e.文献の収集と分析	a.論文 b.設計図面と 主意書	・テーマ設定の方法 ・既往研究調べ ・研究方法の検討 ・調査などの企画・実施 ・結果の整理とまとめ方 ・論文などのまとめ方
建築環境工学・ 設備学分野	a.計測による実証実験と分析 b.アンケートによる収集と分析 e.文献の収集と分析	a.論文	研究の立ち位置をレビューによって明確にさせる。 研究内容に応じた実験手法・調査手法・解析手法を計測機器やアプリケーションを用いて解説し、理解させる。 図表の表現方法を解説し、理解させる。 論文作法を解説し、理解させる。

平成 27 年度 人間関係学研究科 FD 活動概要報告

本人間関係学研究科では修士論文に係る学生指導に直接関わる組織として臨床心理学領域、社会学領域、教育学領域の3つの組織編成をおこなっている。そこで平成 27 年度の人間関係学研究科における FD 活動を、研究科全般に渡る活動と各領域別活動に分けて以下に報告する。

1. 研究科全体の FD 活動

今年度は、教員各自が自分の授業を振り返りその省察反省をもとに領域を越えた意見交換をすることを試みることにした。

まず、研究科に所属する全教員が、今年度担当した科目の授業および研究指導に関して「自分が気を付けていること、工夫していること、およびその理由」あるいは「困っていること」についてまとめ、それを領域ごとに集約した。

次に、領域別に意見交換の場を設け、領域内の教員による現状と問題点の共通理解を図った後、2 月研究科委員会終了後に 50 分ほど時間を取って 3 領域代表者からの発表と研究科メンバー全員による話し合いを行った。

各領域共通の問題として「学力の低い院生をどのように指導するか」という指導上の悩みがあることが明らかになった。直ちに解決する問題ではないが、「教員相互の情報交換と連携」「学部授業聴講の勧め」「基礎的な専門文献の紹介」など、いくつかの具体的な方法が紹介されたり提案されたりしたので、来年度以降、少しでも問題の改善がなされることが期待される。

2. 臨床心理学領域 FD 活動について

<研究教育活動>

- ・心理学実験の TA（前後期）：学部 2 年生を対象とした心理学実験の TA として、大学院生 10 名（M1）が 1 年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的支持、統計解析、レポート作成の相談にあたった。
- ・修士論文中間発表会（7 月 31 日）：3 グループに分かれ、1 月に修士論文を提出する予定であった 14 名の大学院生（M2）が発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生（M1,2）が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。
- ・臨床心理相談室紀要『相山臨床心理研究』の発行：教員 2 名が研究論文を執筆し、大学院生（M2）14 名が事例研究を執筆した（3 月 5 日発行予定）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。
- ・卒論発表会（2 月 1 日）：学部 4 年生全員が卒業論文の成果を発表する卒論発表会において、大学院生（M1）5 名が会場の司会（座長）として運営に携わった。
- ・平成 27 年 5 月 30 日、31 日に本学星ヶ丘キャンパス看護学部棟で開催された臨床発達心理士認定運営機構主催の 2015 年度第 1 回指定科目取得講習会にて教員 1 名と M1 が 5 名、M2 が 5 名、修了生 2 名が運営スタッフとして関わった。
- ・東海アセスメント研究会（4 月 26 日・7 月 19 日・11 月 31 日）：人間関係学部棟にて教員 2 名、他大学教員、修了生、大学院生（M2 が 4 名、M1 が 7 名）を含む臨床心理士、学校教諭、臨床発達心理士などが参加した。知能検査や発達検査中心としたアセスメントにより、幼児、児童生徒をどのように理解し支援するかについて検討を行った。
- ・日進市立小学校との連携研究：教員 2 名が関与する小学校との連携研究において、大学院生（M2 が 1

名、M1が3名)がデータ入力・分析を担当し、教育支援研修会にM2の1名が参加した。

- ・組織を考える研究会：教員1名が主催する研究会の特別セミナー(7月18日)に、大学院生(M2が4名、M1が4名)が参加した。

<臨床実践>

- ・相山女学園中学校・高等学校におけるスクールボランティア(生徒に対する相談援助活動)：大学院生(M1,2)が自発的に参加し、スクールカウンセリングを体得する機会となっている。
- ・臨床心理相談室特別講演会(6月20日)：臨床心理相談室の主催で一般の方々を対象に無料で開催しており、今年度は子どもの発達科学研究所主席研究員・大阪大学大学院特任講師の和久田学先生を講師にお迎えし、「いじめへの介入と予防」についてご講演いただき約120名の方にご参加いただいた。臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員(非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生)が一同に会し運営のサポートにあたった。
- ・臨床心理士資格試験の面接への心構えについてのオリエンテーション(11月13日)：教員2名により、臨床心理士資格試験の一次試験に合格した大学院修了生8名に対して全体オリエンテーションを行った。また、一次試験に合格した全員に対して全教員が分担して、面接に対する個別指導を行った。
- ・臨床心理相談室ケース報告会(3月5日予定)：臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員(非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生)が一同に会し、年1回スタッフ会議を行っている。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となっている。
- ・日進市教育委員会との連携事業
発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した(9月10・14日の2日間)。教員7名が保護者24名の相談を受けた。
小中学校への巡回指導：教員7名が市内の13小中学校に前後期の2回出向いて、巡回指導を行った(平成27年7月～平成28年3月)。
- ・日進市学校教育支援学生サポーター
M2が3名、M1が2名、研究生が1名、日進市立小学校に行き、個別支援を必要とする児童のサポートを行った。
- ・名古屋市子ども適応相談センター(なごやフレンドリーナウ)に、M1が2名ボランティアとして心理的な理由によって登校できない小中学生へのサポートを行った。
- ・併設校である相山女学園大学附属小学校において、M1が1名ボランティアとして、個別支援を必要とする児童のサポートを行った。
- ・「子育て支援センターめいとう」において、M1が1名、「子どもを育てにくいと感じているお母さん集まれ」という子育てミーティングに、準備や後片付け、参加者の子どもの対応や話し合いにボランティアとして参加した。
- ・名古屋市立保育園において、M2が3名(9月1日)、M1が1名(2月2日)、教員の巡回相談に同行し、参加観察および事後のカンファレンスを行った。

3. 社会学領域 FD 活動について

社会学領域においてはこれまで、大学院生の自主的研究活動および指導教員の集団的研究指導のための組織として、社会学研究会を設立し組織的活動を続けてきている。組織の運営は基本的に院生が担うものとし、領域代表や他の参加教員の助言等のサポートによって運営されている。メンバーシップについては領域所属の学生・教員のみならず他領域・研究科の学生・教員や研究科を終了したOGにも開いており、オープンな研究および指導活動の場として運営している。活動の意義としては、研究能力の向上を目指す院生たちの相互啓発と研鑽の場となること、院生が多様な視点から教員による指導を受けられること、さ

らに教員間で指導の方法等について学び合う場となることが挙げられる。活動実績としては、平成 27 年度は 4 回（5/23、7/25、10/03、12/12）の研究発表会が行われた。

また、これも毎年のフォーマルな活動として、領域全体で学生の修論作成の進捗状況を確認し集団的に修論指導するための場として領域教員全員が参加する修士論文中間発表会を行っている。平成 27 年度は 10 月 3 日に社会学研究会と同時に中間発表会を行った。

また FD 活動の新たな試みとして昨年度から始めた大学院の授業等についての学生への意見聴取および教員も含めての話し合いを、本年度も修論中間発表会の後に 1 時間程度の時間をとって行った。

さらに研究科全体の FD 活動として本年度に行われた領域を越えた教員の意見交換については、領域においてもまず領域教員の意見を集約し、そこから共通する問題や課題を抽出するという作業を行った。

本年度の社会学領域における FD 活動の総括としては、これまで行ってきた学生の研究発表のための教員参加の研究会や学生相互および教員学生間の交流のための親睦会など学生と教員の授業外での交流活動は領域の教育機能の活性化という観点から見て有効であるということを改めて確認できたこと、授業改善のために教員および学生の間で話し合いを実施することは、教員学生の相互理解の促進という点では効果があると認識できたこと、さらに教員間での授業や研究指導における工夫や抱える問題についての話し合いから学生の基礎学力不足、学術的関心の欠如、人間関係という側面から見た研究環境の不足という共通の問題が浮き彫りになったこと、がその成果として挙げられる。次年度以降はこれらの問題に対する具体的な対策を領域として考え実践していくことが具体的な課題と考える。

4. 教育学領域 FD 活動について

<研究教育活動>

◎5 月 16 日（土曜）および 11 月 21 日（土曜）に、修士論文構想中間発表会を開催した。領域に所属する全員が一二名の学生と六名の教員が一参加して、約 90 分間をかけて行なった。この発表会においては、各々の学生による修士論文への取り組み状況を発表し、それを承けて、参加した他の学生および教員から質問を出しそれに応答したり、論点に関する研究討議を深めたり、というかたちを以って相互の対話を行なうことを通して、それぞれの論文構想の深化を促すことをめざした。

◎11 月 21 日（土曜）に、人間関係学専攻教育学領域 faculty development のための懇談会を開催した。

領域に所属する担当教員六名が集うかたちで、約 60 分間（13 時 30 分～14 時 30 分）をかけて、授業づくりと研究指導についての現状と課題を内容とする FD 懇談会をもち、自由な雰囲気の中で率直に話し合った。主な話題は、次の二つに分類される。ひとつは、[Ⅰ] 授業の方法・内容や研究指導の方法・内容で取り組んでいることおよび工夫していることについてであり、担当者それぞれが報告し、互いに参考にし合うことができた。もうひとつは、[Ⅱ] 授業づくりにおいて、また研究指導において、気になっていること（困っていることや悩んでいること）についてである。これについては、それぞれの思いを率直に出し合いそれに耳を傾けることによって、担当者個々の悩みやこだわりを知る機会になった。さらには、この話題で話し合う中で、気になっていることをすぐさまきれいに解決する仕方を見出すということではできないものの、あらためて授業や研究指導に際しての課題を意識し合うことになり、共有できる課題を対象化することにもなった。

主な話題を内容にもう少し立ち入って挙げると、次のようなものであった。

[Ⅰ] 文献講読を中心に行なうことで、当の文献が取り扱う問題を受講者がともに把握できるようにすること、また、一定のレベルでの議論ができるようになること。

文献講読や映像教材の活用に加えて、フィールドワークなどの学外授業を取り入れることによって、効果を高めること。

取り挙げる文献への、受講者の能動的なアプローチを促すために、「要約とコメント」の作成を課し、それをもとにして授業を組み立てること。

研究指導では、さまざまな研究手法を紹介し、学生の取り組みようとするそれぞれの研究の独自性を明確化するための方法について、基本的な認識を獲得できるように支援すること。

学生の取り組みようとするそれぞれの研究主題に深く関連する先行研究の中から、研究成果の到達点を示すような論文などを探り出すように、試みさせること（そのための時間を取ること）。

〔Ⅱ〕受講学生それぞれにみられる基礎知識の多寡をふまえて、効果的な授業展開をするには、どうすればよいのか？

受講者数はいつも少数（1～3名）なので、文献講読に際して課すレジュメ作成の負担がかなり大きくなる点を、どう配慮するとよいのか？

授業が（なるべく直接的に）論文作成に役立つように、というふうに意識する必要があるか？

一方的な講義スタイルになりがちであり、対話を通じて既存の知をゆさぶり新たな知へと触発するような展開を創り出すのが、容易ではない。どうすれば、そのような展開を創り出せるのか？

それぞれの学生なりに打ち出している研究の＜主題＞や＜問い＞に深く結びつく先行研究を、できればその到達点を示すような論文などを、見つけ出しその意義をつかみとるように要求したいのだが、現状ではその域に遠く及ばない。これは無理な要求だとするか、それとも、求め続けるべきか？

平成 27 年度 大学院現代マネジメント研究科 FD 活動報告

石井圭介

1. 大学院現代マネジメント研究科の設置

平成 26 年 4 月、大学院現代マネジメント研究科（修士課程、定員 5 名）が開設され、本年度が 2 年目となり、修士課程 2 学年の院生が揃った。本研究科では、今日の経済社会において、既存のモノや仕組みに“イノベーション能力”により高度な知識を統合した、これまでになかった新しい価値を生み出すことのできる人材を育成することを目的としている。

2. FD 活動

1) 院生の学会報告

2015 年 11 月 28 日（土）標準化研究学会第 4 回国際大会 於：明道大学（台湾）

- ①「スマートシニア育成プログラムの標準化に関する研究」 高所真理子（2 年）

A study on the standardization of smart senior development program

- ②「CSR の有効な公表方法－消費者視点から考える－」 磯部優香（2 年）

An effective publication method of CSR –think from consumers viewpoint–

2) 院生のスピーチ

2015 年 12 月 2 日（水）現代マネジメント学部就職壮行会

「私の就職活動」

箕浦由里子（1 年）

私は、大学院で学んだ雇用と労働問題を学問ではなく職務として活かしたいという思いで、就職先選びをしました。特に、愛知県庁ではこれらの問題に対して非常にたくさんの取り組みを行っており、入庁後、大学院で学んだことの活かせる仕事が多くあることはもちろん、雇用・労働関係以外の部署にも配属される機会が多くあるため、長く勤める上で様々な分野の業務を経験しながらキャリアを積めるところが入庁を決めた一番の要因です。

就職活動には筆記試験対策の勉強を含め、長い時間を費やしました。4 月からの 3 ヶ月間は 1 日 10～12 時間くらい研究室や図書館で勉強しました。面接では、自分自身のことに加え、具体的な県の施策をどの程度知っているか、そしてその問題点はどこかなど、かなり深く聞かれたことが印象的です。

大きな組織には、さまざまなバックグラウンドを持つ人たちが集まってきます。無理に真面目ぶるよりも、自分らしさを出すようにした方が良い結果が得られます。就職活動が長期にわたると、自信をなくすことや息詰まることも多くあると思います。そこで実際に働く将来の自分を想像しながら、最後まで諦めないことが就職活動を成功させる上で最も大切だと思います。

3. 今後の課題

- ・学内他 3 研究科との連携による教育研究の質的な向上
- ・院生指導における主研究指導教員・副研究指導教員を中心とした指導体制の強化と研究支援の仕組み作り

以上

1. 今年度の活動

①「研究計画書」の作成方法と研究指導方法の情報共有

計画書の作成をおこなったが形式的なものとなっている。共有することによって指導の共同性が図られるよう、今後、検討していきたい。

②研究課題の設定方法と研究方法の共有

特別研究指導教員だけでなく、領域や内容が異なる場合、難しさはあるが、様々な教員が関わりながら研究の援助を行い学生の研究活動とおし指導の協同が行われた。

③個人別のカリキュラムマップ・履修計画の指導

コンセプトマップは個別の指導教員の範疇において実施。院生の個別マップを作成し、授業者と特別研究について実践を共有し、方途と見通しを具体的にしていっていった。本研究科の指導は個別である故、指導学生が何を学んでいるかを共有することが重要となる。

⑤院生の学会報告等の奨励

保育学会、美術科教育学会誌、本学部研究紀要において積極的に研究を発表した。

⑥院生・教員の懇談会実施

研究科長を中心に、中間発表準備会、院生の相談会を個別に設定し行った。

⑧研究をととしての地域連携、企業との連携推進

名古屋市教育委員会、附属園・小学校、地域の園・学校の協力をいただき、モデル保育・授業の実践、エピソードの収集を行い院生の研究活動につなげていった。また、インターンシップでは、週1日、現場において実践を学びその内容を授業およびゼミ活動と結びつけた。

⑪他大学との先進事例の研究と情報共有

5月の日本保育学会が本学で開催され、院生も研究発表とその運営に関わり、先端の学術に触れながら教員との共同によって大きな力となって役割を果たした。

⑫研究成果報告書（修論）の指導と修論報告

修士論文発表会を教員の参加によって行い、その内容を学部紀要において報告した。

2. 今後の課題

①学部と連携した授業改善

学部の公開授業参観週間の中に研究科の授業も取り入れ、学部の公開授業と連携し教員相互が研究科の授業について学び合える場が必要である。

②指導の共有

少人数であるため指導教員が研究、授業、就職支援を抱え込む状況や、実習指導教員の負担などが見えにくい状況がある。一方、未開講となる授業も多く、FD活動の組織化と実践の共有性が課題となる。

平成27年度全学FD委員会委員

所 属	職 位	氏 名	選出区分
学 長 補 佐	教 授	戸 部 栄 一	学 長 補 佐
生 活 科 学 部	講 師	及 川 佐枝子	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教 授	横 家 純 一	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教 授	北 岡 崇	学 長 指 名
人 間 関 係 学 部	教 授	山 根 一 郎	学部FD委員
文 化 情 報 学 部	准教授	向 直 人	学部FD委員
文 化 情 報 学 部	教 授	武 長 脩 行	学 長 指 名
現代マネジメント学部	教 授	石 井 雅 治	学部FD委員
教 育 学 部	教 授	早 川 操	学部FD委員
教 育 学 部	教 授	磯 部 錦 司	学 長 指 名
看 護 学 部	准教授	前 田 節 子	学部FD委員

平成27年度大学院FD委員会委員

所 属	職 位	氏 名	選出区分
学 長 補 佐	教 授	戸 部 栄 一	学 長 補 佐
生 活 科 学 研 究 科	教 授	雨 宮 勇	研究科FD委員
人 間 関 係 学 研 究 科	教 授	田 村 雅 夫	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	准教授	石 井 圭 介	研究科FD委員
教 育 学 研 究 科	教 授	磯 部 錦 司	研究科FD委員

梶山女学園大学・大学院FD委員会活動報告書（平成27年度）

梶山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント 第3号（通巻 第16号）

平成28年12月発行

編 集 梶山女学園大学大学院FD委員会・全学FD委員会
(平成27年度委員長 戸 部 栄 一)
(平成28年度委員長 後 藤 宗 理)

発 行 梶山女学園大学
〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3
TEL 〈052〉781-1186（代）

印刷 常川印刷株式会社